

マカオ・メキシコから見た華夷変態

中 砂 明 徳

はじめに

17世紀の半ばにスペイン帝国のメキシコ（ヌエバ・エスパーニャ）副王領で聖俗両界の改革にあたったプエブラ司教ホアン・デ・パラフォックス（1600-1659）の列福（beatification）の儀式が、2011年に彼の終焉の地スペインのエル・ブルゴ・デ・オスマで挙行された。列福への動きはすでに17世紀に起きていたにもかかわらず、3世紀以上もの時間を要したのは、彼が修道会とくにイエズス会との対立により長きにわたって毀誉褒貶にさらされてきたからだ、それが彼の名を一層高からしめることにもなった¹。また、彼が17世紀の「スペイン大西洋帝国」ないしメキシコ史を考える上で重要な存在であることを、西洋近世史研究の大家ジョン・エリオット²やジョナサン・イズリエル³が指摘している。最近では、彼の蔵書を基礎にして作られたメキシコのBiblioteca Palafoxianaが世界遺産に登録されて注目を浴びている。つまり、西洋史の世界ではそれなりに名が通っている人であり、彼については、ほとんどスペイン人によるものであるとはいえ、多くのモノグラフが書かれている。

パラフォックスは多産の作家でもあるが、その作品の中に『タルタル人のチナ征服史』（以下『チナ征服史』）がある。これは彼の死後にその遺稿から拾い出されてバ

¹ パラフォックスの死後から18世紀に至る彼をめぐる毀誉褒貶については、Gregorio Bartolomé Martínez, *Jaque mate al obispo virrey: siglo y medio de sátiras y libelos contra don Juan de Palafox y Mendoza*, México, 1991を参照。

² 彼の弟子であるCayetana Álvarez de Toledoの*Politics and Reform in Spain and Viceroyal Mexico: the Life and Thought of Juan de Palafox, 1600-1659*, Oxford, 2004のスペイン語版*Juan de Palafox: Obispo y Virrey*, Madrid, 2011に付されたエリオットの前言を参照。

³ Jonathan Israel, *Race, Class and Politics in Colonial Mexico, 1610-1670*, Oxford, 1975, pp.199-247.

リでスペイン語版が出され⁴、仏訳や英訳も出てかなりの反響を呼んだ書物だが、その現代漢語訳が2008年にイエズス会士フランソワ・ド・ルージュモンやマルティノ・マルティニの作品の翻訳とセットで出されている⁵。いずれも、明清の王朝交代期を扱っているところから一本にまとめられたものだが、この中ではマルティニの『タルタリア戦記』（ラテン語）が出版後にたびたび再刊されたほか仏・独・英・伊・蘭・葡・西・スウェーデン・デンマーク語版が出ており⁶、最近マルティニの仕事が再び脚光を浴びていることもあって⁷、最も知られていようし、これ以前にも中国語訳は出ている⁸。今回初訳でしかも英訳のないルージュモン⁹や、後述するように現在よく知られているとは言いがたいパラフォックス¹⁰が中国語で容易に読めるようになったことの意義は大きい。

しかし、漢訳者何高済が序文でパラフォックス（「帕萊福」）をドミニコ（「多明我」）会士と誤って紹介し¹¹、インドで出版された英訳本においても序言において彼を「イエ

⁴ Juan de Palafox y Mendoza, *Historia de la conquista de la China por el Tartaro*, Paris, 1670. なお、彼の第一次全集 *Las obras de el Illustrissimo y Reverendissimo Señor Don Juan de Palafox y Mendoza* の第8巻 (Madrid, 1671) にも 'Historia de las guerras civiles de la China y de la conquista de aquel dilatado imperio por el Tartaro' の表題で収録されている (pp.409-528)。

⁵ 何高済訳『韃靼征服中国史・韃靼中国史・韃靼戦記』（中華書局、2008）。

⁶ Edwin J. van Kley, "News from China; Seventeenth Century Notices of the Manchu Conquest", in *Journal of Modern History* 45, (1973), pp.563-568.

⁷ マルティニへの注目については、拙稿「マルティニ・アトラス再考」（藤井謙治・金田章裕・杉山正明編『大地の肖像 絵図・地図が語る世界』京都大学学術出版会、2007、pp.116-140）参照。

⁸ 1654年の英訳版にもとづいた現代中国語訳が杜文凱編『清代西人見聞録』（中国人民大学出版社、1985）pp.1-68に戴寅訳『韃靼戦史』として収録されている。

⁹ ルージュモンの著作には、ラテン語版 (*Historia Tartaro-Sinica nova*, Louvain, 1673) とポルトガル語版 (*Relaçam do estado politico e espirital do Imperio da China, pellos annos de 1659 até o de 1666*, Lisbon, 1672) があり、中国語訳は後者によっている。ちなみにポルトガル語版の序言ではパラフォックスの著作に言及し、著者が得た情報がフィリピン経由のものであるために記述が不正確だとしている。

¹⁰ ただし、中国語訳は英訳からの重訳であり、後に指摘するように、それゆえに原版との違いが相当存在する。

¹¹ 注5書p.9（以後、漢訳p.〇〇と表示）。なお、何高済が著者について参照を促がしている英訳者の序文自体、「パラフォックスがメキシコに渡る前にオスマの司教だった（実際にはメキシコから帰国後に叙任）」「スペイン語版は公刊されなかった」と誤る。

ズス会士」とするが¹²、パラフォックスは修道会には所属していない。こうした初歩的な間違いが起きるのは、著者自身に対する関心が薄い証拠である。逆に、スペイン・メキシコ史やパラフォックス個人を研究する人たちにとって、本書は関心の対象にはなっていない¹³。つまり、西洋史上の著名人とこの作品を結び付けて考えようとする人が少ないのである。

さすがに、宣教師の著述に関心を持つ研究者にこうしたことはない。現在までに本書の中身にまで踏み込んだ研究は2点ある。1つは半世紀前のジェイムズ・クミンズの論文である¹⁴。著者は、1630年代のフランシスコ・ドミニコの両托鉢修道会の入華に始まる典礼論争にさらなる火種を提供したドミニコ会士ドミンゴ・ナバレッテの研究で知られている人である¹⁵。いま1つは『ヨーロッパの形成におけるアジア (*Asia in the Making of Europe*)』シリーズで知られるシカゴ大学のドナルド・ラックの門下生

¹² H.S.Bhatia intro. *History of the Conquest of China*, New Delhi, 1978, p.10. なお、このインド版は1671年刊行の英訳版とは文章を少し異にしており、ところどころに欠落がある。訳者も示されておらず、独自に翻訳したものとは到底思われないが、何に準拠したものなのか明らかでない。

¹³ たとえば、彼についての浩瀚な評伝である Sor Cristina de la Cruz de Arteaga, *Una mitra sobre dos mundos: La del Venerable Don Juan de Palafox y Mendoza*, Sevilla, 1985 や、著述家としての彼に注目しその主要著作をかなり詳しく紹介している Francisco Sánchez-Castañer, *D. Juan de Palafox: virrey de Nueva España*, Madrid, 1988 にも、本書はほとんど取り上げられていない。前者はパラフォックスとドミニコ会の中国宣教グループのメキシコにおける出会いに1章を割り、後述のクミンズの研究を参照しながら、パラフォックスと中国布教の関係や『チナ征服史』について述べているが、『チナ征服史』の内容にまでは踏み込んでいない。後者のパラフォックスの刊行作品の一覧 (p.207) に *Guerras civiles de la China* (1638) の書名のみが掲げられているが、これは『チナ征服史』とは別の作品とは考えられず (表題の「チナの内戦」は全集所収のものとタイトルが同じ) 1638年刊というのは誤りである。近年に出版されたパラフォックス研究の代表作である注2のアルバレス・デ・トレドの著書や、12本の論文を集めた Ricardo Fernández Gracia ed., *Varia Palafoxiana: doce estudios en torno a don Juan de Palafox y Mendoza*, Pamplona, 2010 も本書を扱っていない。後者の中の Miguel Zugasti, “Juan de Palafox y Mendoza, hombre de letras” は Sánchez-Castañer 同様に書名 (*Guerras civiles de la China*) を挙げているだけである (p.336)。

¹⁴ J.S.Cummins, “Palafox, China and the Chinese Rites Controversy”, in *Revista de Historia de América* 52, 1961, pp.395-427. 同論文は J.S.Cummins, *Jesuit and Friar in the Spanish Expansion to the East*, London, 1986 に収録されている。

¹⁵ ハクルート協会叢書に、彼によるナバレッテの著作の英訳 *The Travels and Controversies of Friar Domingo Navarrete*, 1618-1686, 2 vols, Cambridge, 1962 が収められ、専著として *A Question of Rites: Friar Domingo Navarrete and the Jesuits in China*, Aldershot, 1993 がある。

チェン・ミンスンの博士論文であるが、これも 40 年前のものでしかも未公開である¹⁶。

まず、クミンズの論文を取り上げよう。彼の主たる関心はパラフォックスよりも、どちらかといえばナバレッテにあった。のちに『チナ王朝の歴史・政治・倫理・宗教論 (*Tratados historicos, politicos, ethicos y religiosos de la Monarchia de China*)』(1676 年刊行) で典礼問題を炎上させ、ヨーロッパの中国観に大きな影響を与えることになる彼は 1646 年に中国布教に向かう途上のメキシコでパラフォックスに会っている。クミンズの論旨をまとめると次のようになる。

- 1、パラフォックスはイエズス会と対立を深めていた時に、ドミニコ会士ホアン・パウティスタ・モラレスに会った。モラレスは典礼問題の解決を求めるべくローマに向かい、ナバレッテを含む同胞を引き連れて中国にとって返す途中だった。パラフォックスは彼から典礼問題について情報を入手した。
- 2、彼の中国への関心は典礼問題にとどまらず、自らの司教区プエブラを「チナにもっとも近い」教区の一つであると見なして、チナ布教を自らの職責の一環ととらえていた¹⁷。したがって、海の彼方の大帝国の近況には重大な関心を寄せていた。
- 3、『チナ征服史』の情報源は、フィリピンから寄せられた報告のように間接的なものだけでなく、モラレスら宣教師との直接のインタビューにあるとする。さらに、本書中の記述にもとづき、メキシコに渡ってきたチナ人から情報を得たことを想定する。
- 4、本書は単に中国のことを記述しただけではなく、常にスペインないしヨーロッパ全体との比較を意識している。中国の統治体制はキリスト教国の模範となりうる長所を持っており¹⁸、その中国が新興のタルタル人によって制圧されたことはスベ

¹⁶ “Three Contemporary Western Sources on the History of Late Ming and the Manchu Conquest of China”, The University of Chicago, 1971. ただし、彼が取り上げたのはセメード、マルティニ、パラフォックスの英訳（それぞれ、1655, 1654, 1671 年に出ている）である。

¹⁷ メキシコを中国布教の足がかりとする考え方はかなり広く共有されており、パラフォックスより後にメキシコにわたってきたイエズス会士エウセビオ・キーノは中国布教のルートを探査する過程で、現在のカリフォルニアが島ではなく半島であることを突き止めた。E.J.Burrus, *Kino Reports to Headquarters*, Rome, 1954, pp.120-121.

¹⁸ しかし、本書中にチナ人ないしその政治体制を称揚したところはほとんどない。ナバレッテにはそうしたところが認められるので、あるいは混同したものか。

イン帝国への警鐘でもあると見ていた。しかし、その一方で「野蛮な」タルタル人の道徳的資質を誉め、彼らが征服過程で見せた団結力をキリスト教世界の分裂と対比するなど、全体的にはチナ人より高く評価している。そして、こうした点にナバレッテの著作との共通性を見出している。

しかし、3・4の指摘は『チナ征服史』の記述に即して個別具体的に行われているわけではなく、多分に推測を含んだものである。また、ナバレッテとの共通性の指摘には首肯できるところもあるが、パラフォックスが反イエズス会の立場にあることに強くひきつけられた立論であることは否めない。

一方、チェンもまた『チナ征服史』を単独ではなく、イエズス会士アルヴァロ・セメードの『チナ帝国史』とマルティニの『タルタリア戦記』との3点セットで取り上げているが（ともに明末清初を扱っているだけでなく、いずれも英訳がある。それぞれの原版が使われた形跡はない）、なかでもパラフォックスに割かれるページ数が最も少ない¹⁹。それは他の2つと違って、彼の書が実体験をもとにして書かれたものではないからである。それでも、テキストそのものに即して個別的に論点を取り出して評価を試み、クミンズと違って資料源にも具体的に言及している。なお、チェンはクミンズを参照していない。

チェンは「著述の材料と目的」という一項を設けている。「マカオ経由でフィリピンに届いた報告 (Relation or Relations) を用いた」「その報告は1647年の終わりごろに書かれた」という本文中の言葉を引用し、これらの材料をメキシコにいたパラフォックスが1648年ないし49年の初頭に受け取ったと推測する（パラフォックスは49年の5月にメキシコを離れている）。そして、帰国後にも本書の編集を続行していたとすれば、時期的に見てマルティニ『タルタリア戦記』（1654年に刊行）を使えたはずだが、借用の跡はないという。後者についてはその通りである。ここで付言しておけば、タルタル人の中国征服という同じ題材を取り上げてはいても、マルティニは征服事業の開始から彼がヨーロッパに出発する1651年までの事態の進展を俯瞰的にとらえようとするのに対し、『チナ征服史』の事件の取り上げ方は著しくかたよっており、テキストの性格は随分異なるのである。

¹⁹ op.cit.,pp.217-236.

チェンはパラフォックスがマルティニを使わなかった理由を、敵対しているイエズス会の著述を使うのを潔しとしなかったからだろうとするが、この点については後に取り上げることにする。さらに、それまでに書かれていた西洋人の中国記述をも使ったとする。実際、本文にそうした記述は散見するが、いずれの場合も書名は挙がっていない。執筆の「目的」については、クミンズ同様に本書がヨーロッパ人に反省を促し、とくに「君主鑑」として意識的に制作されていることを指摘する。

チェンは次に内容の分析に入る。「伝聞と事実」の項では、本書の性格上材料をもっぱら伝聞に仰がざるを得なかったとはいえ、それらの情報を一貫した記述に落としこんだパラフォックスの文才を評価する。その上で、本書の明らかな短所として、重要な事件の繫年にえてして誤り—李自成の反乱、崇禎帝の死、満洲人の北京入りが1640年から42年の間に置かれるなど—があることを指摘する。しかし、こうした繫年の誤りの原因は分析されていない。

さらに、誤報をロマンチックに飾り立てる傾向が見られるとする。順治帝の年齢を実際より多めに見積もり（1643年時点で10ないし12歳とするが、実際は5歳）、「常に軍の先頭に立って戦う少年皇帝」をアレクサンドロスら西洋の英雄に比する一方で、征服事業の主役であった摂政ドルゴンが登場せず²⁰、そのぶん少年皇帝の存在が際立っている。また、暗君であったはずの弘光帝が持ち上げられ、鄭芝竜が忠臣とされるのも事実と反するとする。

その一方で、本書の記述と歴史的事実と認知されている事柄が一致するところもあるとして、いくつか例を挙げる。なかでも最も詳細に事態の推移を記しているのが、1647年初頭に始まる広東をめぐる攻防、清軍の入城とこれに対する「海賊」の逆襲の描写である。

チェンは本書と史実とを照合した後、パラフォックスの主体的な「解釈と洞察 (interpretations and insights)」を取り出し、さらに彼が満洲人を理想化する一方で、中国人の帝国の復活には否定的であったとする。満洲人への高評価は「黄金時代はヨーロッパからタルタリアに移行した」という言にまでエスカレートしている。

また、コーチシナや日本など周辺諸国が動乱に際して海外華人を冷遇・迫害したこ

²⁰ じつは、名前こそあがっていないが、順治の3人のおじの1人として少しだけ登場している。

とについて述べて「チナの没落」を強調するのは、カルタゴの滅亡時にスキピオがはやくもローマの危機を見て取った例を引き合いに出していることから見て、傍観者としてチナの没落を笑うのではなく、自己を省察するように読者に促がしているのだとする。

*

*

*

チェンの分析はクミンズに比べれば具体的だが、その手続きには問題がある。彼は英訳版をもとに議論を進めているが、これが忠実な翻訳であるという保証はない。当時のヨーロッパのアジア関係の著作を見ると、翻訳が短時日の間に行われる場合（本書の場合、英訳はスペイン語版の1年後に出ている）、草卒の間に誤訳が生じる可能性は大きいし、難所を適当に翻訳しておくといった態度もまま見られる。さらに、意識・誤訳を越えて、粉飾が施されることが稀ではない（たとえば、本書と同じ頃に原著が出たモンタヌスの『日本誌』のフランス語訳²¹は今日的な意味での翻訳とはいえない）。したがって、原版をもとにして議論するのでない限り、パラフォックスの見解や文飾を云々することはできないのである。この英訳は仏訳を底本とし、仏訳自体にスペイン語版とかなりちがいがあがるが、脚色は多くはない。しかし、これは結果論の話である。ちなみに、漢訳を読む限り、著者の事実誤認あるいはもとの情報自体に相当な誤りがあるような印象を受けるであろうが、その大半は西→仏→英→漢の伝言ゲームの中で生じたもので、原著の責任ではない（後掲の異同表を参照されたい）。

この他に、近世ヨーロッパのアジア記述の百科全書ともいえるべき前掲のラック編『ヨーロッパの形成におけるアジア』にも『チナ征服史』への言及はある。このシリーズは著作からの引用を断片的に行って内容を紹介し、コメントを随時付していくというスタイルをとっているが、パラフォックスについてのコメントの大半は共編者エドウィン・ファン・クレイの専論²²とチェンを下敷きにしている²³。マルティニとの違いを個別的に列挙するところにやや特色があり、やはり『チナ征服史』はマルティニに比

²¹ *Ambassades mémorables de La Compagnie Hollandoise des Indes Orientales des Provinces Unies, vers les empereurs du Japon*, Paris, 1680.

²² 注6 論文 pp.570-573.

²³ Donald F.Lach and Edwin J.van Kley, *Asia in the Making of Europe* vol3, book4, Chicago, 1993, pp.1670-1672. ただ、編者はチェンと違って1732年の仏語版を使ったと述べている。

べて信頼性に乏しいと評する。なお、ファン・クレイにはこれらの記事がヨーロッパの文学・戯曲に与えた影響を扱った論文もあるが、そこではパラフォックスのテキスト自体は問題になっていない²⁴。

また、スペインのアンナ・ブスケツ・アレマニーの近作は、これまでイエズス会士の記述の前にどちらかといえば影が薄かったスペイン経由の明清交代期の記述を再評価している。その中で、ドミニコ会士のヴィットリオ・リッチョ（未公刊）とナバレッテとともに、パラフォックスを取り上げてはいる。しかし、パラフォックスのテキスト自体についてはチェンに付け加えるところはほとんどない²⁵。また、『チナ征服史』中の鄭芝竜の記事を拾い上げた論文があるが、テキストの分析は行われていない²⁶。

以上見てきたように、『チナ征服史』は今日においても明末清初の大変動を外から見た記録として参照されているし、漢語訳の出現により読者の目に触れる機会が増えているが、著者自身の見聞（eye-witness）によるものでないために、同種の題材を扱ったマルティニに比べて軽んじられるという傾向は今なお強い。また、パラフォックス個人の政治・道徳観が色濃く反映されたテキストとみなされているが、これらの議論も根拠を欠く。取材源が明らかにならない限り、どこからがパラフォックスの付加部分なのか分からないからである。本稿はこの問題について考えようとするものだが、その前にあらためて『チナ征服史』のテキストの構成を確認しておこう。

1、『チナ征服史』のテキスト構成

本章ではスペイン語版（架蔵のものを用いたが、グーグルやフランス国立図書館のサイト Gallica でも閲覧可能である）によってテキストの構成を確認する。あわせて、

²⁴ Edwin J. van Kley, "An Alternative Muse: The Manchu Conquest of China in the Literature of 17th-Century Northern Europe", *European Studies Review* 6, 1976, pp.21-43.

²⁵ Anna Busquets Alemany, "La entrada de los Manchus en China y su eco en España", Pedro San Ginés Aguilar ed., *Cruce de miradas, relaciones e intercambios*, Zaragoza, 2010, pp.455-474. ただし、3つのテキストを比較して、パラフォックスが他とかなり性格を異にする（後二者について、マルティニを利用した可能性を指摘する）としていることは注目すべきである。

²⁶ Leopoldo Vicente, "Historia de Icoan por Palafox y Mendoza", *Encuentros en Catay* 6, 1992, pp.123-170. マルティニの記事が参考材料として掲げられているが、相互比較は行われていない。

折に触れて原版と英訳—漢訳との違い（英訳はほぼ仏訳に沿っているので、これは原版と仏訳の距離でもある）にも言及したい（英訳版・仏訳版は京都大学文学研究科図書館所蔵のものを用いた）。

スペイン語版の導言（Al QUE LEYERE）では、本書の原稿がパラフォックスの遺稿から見出されたものであり、この原稿のソースは彼がメキシコ在任時代にフィリピン経由で中国と行っていた文通、そしてメキシコに年2回届く情報（las noticias que le venian dos veces el año）であったとする。その原稿は本書出版の3年前に従兄弟の神父 Joseph de Palafox からフランスの書肆 Antonio Bertier（フランス語版もここから出ている）の手に渡ったと簡単に述べるのみである。なぜ、スペインではなくフランスで出版されたのかは分からない。

実は、この単行本以外にマドリッドで彼の死後に刊行された全集の第8巻（単行本刊行の翌1671年に刊行）に本書は収録されている²⁷。この巻の読者への導言の中にパリ版への言及があり、この版とフランス語版に見られる誤植、原稿の改竄への手厳しい批判が見られ、本巻収録のものについては原稿と対校してこれを訂正したとうたっている²⁸。この全集の大半を編集したのがパラフォックスの親戚でシトー会士の José de Palafox で²⁹、パリ版にいう Joseph と同一人物である。しかし、実際に両者を比較してもそれほど違いがあるわけではないので³⁰、テキストが流通している単行本のほうを用

²⁷ 注4を参照。なお、彼の全集の決定版は1762年に彼と深いつながりをもっていた跣足カルメル会によって刊行されているが、『チナ征服史』はその第10巻にも収録されている。

²⁸ 本書の A QUIEN LEYERE 参照。架蔵のものを用いた。

²⁹ ただし、本書を収録した第8巻は Benito de Horozco の編集である。注13所掲 Arteaga 著 p.588。

³⁰ 綴字法や文法上の細部の違いはかなり存在するが、用語自体はほとんど同じであり、違いの多くは単行本にある文またはフレーズが全集本に見えないケースである。具体的には p.78, ll.19-21, pp.80, l.26-81, l.1, p.88, ll.5-6, p.93, ll.9-10, p.107, ll.16-17, p.119, ll.7-12, p.145, ll.10-11, p.188, ll.5-6, p.197, ll.19-21, p.210, ll.10-13, p.212, ll.13-15, p.219, ll.10-13, p.230, ll.3-6, p.237, ll.25-26, p.281, ll.22-25, p.309, ll.2-3, p.320, l.23, p.321, ll.4-14, p.326, l.24, p.342, ll.18-26, p.367, ll.19-24, p.372, ll.10-11, p.380, ll.24 など、そのほとんどがワンセンテンスである。このうち p.188 の「タルタリアのローラン」という表現、p.219 のネロとの比較は本来原稿になかったものを付加したことが疑われるが、p.321 のタルタル人の刑吏が処刑者の肉を持ち帰って食糧にする話は後述する『チナ征服史』の元ネタにも書かれていることであり、どちらが原本により忠実かは俄かに決めがたい。いずれにせよ、あってもなくても影響のないものがほとんどである。また、p.19 ll.1-4 「この報告文書には太子への言及がない。彼の姉妹の皇女には言及があるのだから、太子が生きていたら言及されるはずである」が全集 p.414 では「皇女のような大きな災厄、突然の死を、太

いることにする。

一方、英訳版の読者への導言には³¹、誤りが入り込んでいる。中継役を勤めたパラフォックスの親戚をベルナルドとし、マドリッドでベルティエに手渡され、ベルティエはこれをフランス語に翻訳してパリに戻った後コレに渡し、コレがこれを前年に出版、この仏語版を入手して英訳が行われたとする。このうち、ベルティエが翻訳したというところまでは仏訳版の導言と同じだが、コレは仏訳版に載る王太子（ルイ・ド・フランス）への献辞の作者であって、実際に出版したのはベルティエ³²である。英訳版の導言には前述したように著者の経歴紹介にも誤りがあって、書誌情報としては失格である。マルティニヤキルヒャー（*China illustrata*）、セメード、モンタヌス（*Atlas chinensis*）にも言及し（このうちキルヒャーを除けば、残りは英語訳がすでに出ていた）、茶のことや省の名前で一席ぶってシナ通であることを装っているが、パラフォックスに浙江が登場しないことをもって彼が福建と浙江を同一視しているなどを見当違いのことも言っている。

本文は32章に分かれている。以下に章題を示し（比較のために丸カッコ内に漢訳のそれを示す。角カッコ内は筆者による補足である）、あわせて各章の内容を略説する。

1、「2人の臣下〔李自成と張献忠〕が大権を有するチナ皇帝に対して反乱し、6省〔seis

子は蒙らなかった」となっている。前者に資料への言及があるところから、こちらのほうがオリジナルないしそれに近いものと一応考えられようが、決め手には欠ける。逆に全集の方にある単行本にないのは、p.452の「(対立している一方は) 広西やその他の省の人間である」(単行本ではp.142にあたる)、p.515の 'tan mal ordenada, y que acomete siempre confusamente, y de tropel , como luego veremos' (単行本ではp.346に該当し、下線部がない) だけである。後者については、単行本のほうに明らかに誤脱があり、全集が原稿を見ていた証拠としてよい。しかし、ことスペイン語版に関していえば、両者はほとんど同じとみてよいだろう。全集の序言ではパリの2版とともに非難しているが、その非難が当たっているのはもっぱらフランス語版と考えるべきである。なお、パラフォックスの伝記 (*Vida del Ilustrísimo y Excelentísimo Señor D. Juan de Palafox i Mendoza*, 1671 刊) を書いた Antonio González de Rosende は序言の中で、ベルティエが入手した原稿によって出版されたものは文体面からみてパラフォックスの作品とは考えられないとしているが、確証があるわけではない。第2次全集でも、ゴンザレス・デ・ロセンデの偽作説に触れながら、結局は収録している。

³¹ 漢訳では pp.13-16.

³² ベルティエについては不詳だが、タイトル頁に librero de la Reyna と称しているので、ルイ14世の妃でスペイン王フェリペ4世の娘マリー・テレーズ・ドートリッシュ（マリア・テレサ）ゆかりの書肆である。その関係もあって、スペインの原稿が入手できたのかも知れない。

provincias)³³と帝都を占領。この際にタルタル人が考えたこと(中国騒乱の開端。皇帝の兩個子民造反。他們占領了五省以及皇都。韃靼人因此下的決心)」

君主にいかなる悪行があろうと臣民は反逆すべきでないとし李・張を切つてすて一方、チナとの平和協定を守って反乱軍につかず、叛徒を滅ぼすことを大義名分として侵入してきたタルタル人の態度は、それがたとえ建前にすぎなかったにしても、ヨーロッパの政治家たちに反省を迫るものだとする。

2、「崇禎帝と王家全員の惨死、タルタル人はチナ帝国侵入の口実を探し、それを見つけた(崇禎帝及皇室成員之死。韃靼王決定進攻僭位者、實現他原来对中華帝國的企図)」

チェンが言うように、皇帝の自殺が劇的に、そして夫に殉じた皇后の最期も見てきたように描かれるが、皇帝の即位・治世年については確たる情報を手にしていないことを認めている。李自成の挙兵から王朝の滅亡は1640年～42年の間の出来事とされる。

3、「タルタリアの王がチナに入る。僭主李の死。タルタルが北京市及び省と隣国のコレアを獲得(韃靼人進入中国。暴君李逃亡。年幼の順治到達北京、被立為帝。他宣布向朝鮮国王開戦、使其国成為藩属)」

タルタル軍のチナ入りについて、ある報告に「全土制圧に3年数ヶ月を要した」と述べられていることを手がかりに、最後の広東制圧が47年1月であることから逆算して1643年の第3三半期とする。また、チナ人より勇敢なコレア人(日本人と長年戦ってきたから、とする)に対して順治が戦いをしかけ激闘の末にこれを屈服させたことを述べるが、朝鮮に兵を送ったのはホンタイジの時代のことであるから、これは明らかな間違いである。

4、「タルタル人、チナ征服を続行。首都北京に近い他の5省を獲得。征服の手法と敗者への命令(韃靼王繼續征進、他平定了与北京接境的其他五省。他為取得勝利采取的措施、以及頒發給被征服百姓的勅令)」

順治帝をアレクサンドロスら西洋の英雄たちに匹敵するとまで持ち上げる。彼による施策を概ね肯定的にとらえ、敗者のチナ人官僚に対して批判的である。最後に辮髪(辮髪)の強制をとりあげ、これに対するチナ人の怒りを強調する一方で、支配者と被支配者を区別する標章としての効用をクールに認めてもいる。

³³ 本文中には5省とある。タイトルの方が誤り。

5、「タルタル王、北京に引き上げる。彼のおじが征服を続行し、大都市南京及び同省と近隣の5省を容易に制圧（順治的叔父攻占了南京省城；登基的中国国王逃走和死亡。南方九省中的六省帰順韃靼）」

南京で即位した弘光帝に対する評価が高い。タルタル軍の攻勢の前に無力だったとするものの、朝廷自体を批判することはない。一方、順治帝のチナ侵入時点での大義名分を評価していたのに、ここでは王朝の正当な後継者を滅ぼしたことに對して批判的である。

6、「タルタル人、最後の3省の征服に大いにてこずる。それは3省を防衛したチナ人の有名な海賊がいたからである。この海賊について知られていること（韃靼人征服最後三省時遇到最大の抵抗。一個中国海盜變得強大。這個海盜是誰？）」

タルタル軍に抵抗した海賊一官すなわち鄭芝竜の事跡をかなり詳細にたどる。とくに彼が背教者だったことが強調される。主人（名は記されないが、李旦のことである）からカンボジア³⁴に交易に派遣されていた彼が交易を委ねていたが、主人の死を知った時のふるまいはまさに背教者のものであったとする。明朝に帰順後の処遇、反対派の口封じのための贈賄などについても言及される。

7、「海賊一官の話の続き。ポルトガル人、オランダ人との交渉。タルタル人が彼を帰順させようとするが、王室に一貫して忠誠をつくす（海盜一官和荷蘭人達成的協定。他和澳門葡人的爭吵、因為他曾送女到澳門接受基督教的教導、但葡人拒絕把此女送還給他。韃靼人請求他帰順。他對中国君王的忠誠）」

とくに力点が置かれているのはマカオとの交渉であり、具体的には鄭芝竜の女を巡るものだった。彼女は日本でキリスト教信者となっていたが、1636年³⁵に追放されてマカオに送られた。父は娘を手元におこうとマカオに身柄の引渡しを要求したが、背教者に信者を渡せないとつっぱねられる。しかし、このやりとりを契機に両者に交渉が生じ、ついには鄭芝竜を通じて、マカオは日本との断交後も交易を継続できたと述べる。後半は彼の忠臣ぶりを強調し、タルタル人の意を承けたあるマンダリン³⁶の帰順

³⁴ 漢訳 p.124 は坎貝（カンバヤ）とするが、誤りである。

³⁵ 漢訳には年が示されていないが、スペイン語版には存在する（p.89）。

³⁶ 漢訳 p.68 が言うとおり洪承疇を指す。

勧告を拒んだことを記す。

8、「一官、日本王にタルタル人に対する援軍を要請するも、与えられず。一年にわたってタルタル人に抵抗するもついに捕虜となる。彼の最期（一官向日本皇帝³⁷ 求援、遭到拒絶。他抗拒韃靼人一年之久。他被俘虜、押送順治帝。這個海盜的結局）」

いわゆる「日本乞師」について述べた後、福建が制圧され、一官が仕えた王（隆武帝）がわずか6ヶ月の在位に終わったこと、一官は終始抵抗したが（彼の裏切りについては記さない）、降服後は財力に物をいわせて数々の中傷をかわし地位を保全したことを述べる。すでに殺されたという噂もあることを紹介し³⁸、いずれにせよ彼がやがて破滅するであろうと予見している。

9、「Pelipaovan³⁹が広東の町と省に強力な軍隊を派遣。そこでチナの王子の1人が即位。抵抗も受けずに入城したタルタル人の手にかかって死ぬ⁴⁰（韃靼人進入広東省、一個中国王子在那里被立為中国皇帝。他們進入広州城、發現城門洞開。一支中国艦隊前去救援、炮撃該城。韃靼総督命令在広州張貼布告）」

ここでは、広東が舞台である。これまでと違って、記述が俄然具体的になる。広東での紹武帝の即位（1646年12月）、タルタル軍の広東入城（47年1月19日）といった事件の時日が明示され、僅か20騎による入城、チナ人側の海軍の到来、占領軍の布

³⁷ 漢訳 pp.69-70 は本文で「天皇」としているが、当時の欧語史料では日本の「皇帝」「王」は一般に將軍を指す。

³⁸ 漢訳 p.74 はこれに注をつけて鄭芝竜が北京で処刑されたと記すが、彼が処刑されたのは1661年のことであって、ここでこうした注をつけるのはおかしい。本書が出版されたのは1670年だが、パラフォックスは1659年に死んでいるのである。

³⁹ 漢訳 p.70 はこれを「貝勒博洛」としている。たしかに、福建・広東の南方征服事業の指揮を取ったのはボロであるし、本書中に「Peliはタルタル語で、Vanはチナ語でそれぞれ王を指す」とあるように、Peliが貝勒の音写であることは間違いない。しかし、paoの説明がここではなされていないし（本書中では後述するように珍妙な説明をしていてあてにならない）、博洛の発音ともかなり違う。しかも、この人物は順治を支える3人のおじの1人とされているが（あとの2人は記述の中身からしてドルゴンとドドである）、ボロは順治のいとこである。paovanが「八王」の音写であれば、当時そう呼ばれていた阿濟格ということになるが、彼は南方経略にはかわっていない。しかし、マルティニ『タルタリア戦記』（ラテン語原版 p.123）にやはりPauangが登場する。何高済はここでも博洛としているが（漢訳 p.383）、彼が注に引く史料にあるように、この時のモンゴル（ハルハ）経略には、ボロだけでなく、アジゲも参加していた。やはり八王自体はアジゲとしておくべきだろう。

⁴⁰ 実際に彼の死について述べられるのは次章である。

告の描写など、これまでとフォーカスが全く違う。以下の章ではこのような詳細な記述がしばらく続く。

10、「タルタル人、大都市広東を掠奪。タルタル人の横柄さ。この大省の他の地方における征服の続行と完遂（韃靼人洗劫広州城。総督改変治理方式。広東国王及其随從之死。省内幾處地方的降服）」

掠奪を黙認している「武の副王（Vice Rey de las armas）」の李（姓の Ly のみ示されるが、漢訳者が指摘するように李成棟のことで当時広東提督）を批判するが、それらは中央の意向に反するものであることを強調し、また占領軍の良心である「文の副王（Virrey de las letras）」（名は示されないが、これまた漢訳者の言うとおりの修養甲のことで当時両広総督）の存在を浮き立たせる。タルタル兵の横柄と裏返しになっているチナ人の卑屈さが冷笑的に描かれる。

11、「肇慶城と桂王がタルタル人に抵抗して勝利を収めるが、結局は敗北し、帝国の征服は完了する（肇慶の中国人進行抵抗。広西の国王桂王進入該城。他迎戰韃靼人、奮戦、擊敗他們。中国人中出現分歧。在別一場戰鬥中他們被擊敗、肇慶城被攻占）」

舞台は広東省境に近い肇慶から広西へと移る。広東の描写と異なって情報はかなり曖昧である。桂王（永曆帝）など4つの勢力が並立したことを述べ、桂王と Shinhian 王⁴¹は王族の血を引くが、あとの2勢力は偽王だとする。具体的な事跡が語られるのは桂王のみであり、肇慶での大勝とその後の広東人・広西人の対立に起因する敗北が語られる。

中国史料によれば、桂王は1646年（以下西暦）の末に肇慶で即位し、翌年1月に紹武と戦って敗れ（その直後、1月20日に広東が陥落しているが、これは本書の日付と符合する）、ついで清軍の勢いに押されて梧州に移り、2月に肇慶は陥落しており、この間大勝利の記述はない。これは、何高済が指摘するように、同7月（永曆元年五月）に桂林で皇帝の留守を預かっていた瞿式耜らが収めた勝利と混線したものであろう⁴²。

⁴¹ この名前の同定については後述するが、漢訳 p.90 が「紹武王」とするのは誤りである。永曆と紹武が対立していたのは事実だが、ここは広西の話であるし、広西で両者が連合したという事実がないのは訳注の指摘するとおりである。また、紹武についてはすでに9章で述べられており（名前は示さない）、この王との関連性もない。

⁴² 漢訳 p.115.

桂王については死亡説と生存説を紹介し、レコンキスタの起点となったスペインの王たち（ペラヨ、ガルシア・ヒメネス）を持ち出してこれが唯一無二の経験であってその再現は疑問だとする一方で、短期間で広大な領域を制圧した順治をアレクサンドロスになぞらえてタルタル人の事業の偉大さを強調する。

12、「征服後にいくつかの省で騒動が起きる。タルタル人、容易にこれを鎮圧（沿海省份の騒乱、幾個中国王子退到山里。別一些与韃靼人締結和約。有一個曾藏身于和尚中、自行去見総督、被送往韃靼地方）」

まず、唐王（隆武）の生存説と魯王の存在を整合的に説明しようとする。結論は唐王＝魯王であり、魯王が「即位して6ヶ月安泰だった」という記録は、「隆武の治世が6ヶ月だった」（前掲）のと同じことを述べているとする。魯王を支援した「一官の子」（鄭成功のことだが、名は記さない）の存在に言及するものの、広東から少し離れた福建・浙江の情報は把握しきれていない。ついで、惠州で王に擁立された男と広東の僧院に隠れていた王子がともに降り、後者は北京へ護送される途中に殺されたと述べる⁴³。

13、「マカオ市のポルトガル人がタルタル人に対してどう振舞ったか。その時のタルタル人の対応（澳門葡萄牙人的处境。他們在中国人和韃靼人之間繼續中立。他們担心勝利者要襲擊他們的城池。他們得到的待遇超過他們的期望）」

広東での騒乱に対してマカオが中立的立場を取ったことで、タルタル人と良好な関係を築けたと述べる。マカオはかつて明政府に砲兵の提供など軍事支援を行っていたが、それが中国本土に依存せざるをえないマカオの地政学上の位置から必要であったとするなら、今回の中立も同様に正当化されることになる。さらに、キリスト教布教のセンターであることが強調され、日本で大量の殉教者を出したマカオ⁴⁴は神の加護を受けて今後も苦境を乗り越えてゆくであろうことを希望している。

14、「タルタル人がチナ海に出撃し、この帝国に属する海南島を平定。タルタル人と

⁴³ 後者については、何高済が趙王朱由棖と注記している（p.100）。従うべきであろう。しかし、趙王は広東で死を賜っていて、北京には送られていない。

⁴⁴ 文中には、「1日に60人以上の殉教者（漢訳p.105の「伝教士」は誤訳）が出た」としか書いていないが、これが1640年にマカオから派遣された使節団のうちの61名の殉教者を指していることは明らかである。

広東沿海のチナ海賊の海戦が始まる（韃靼人出海清剿中国的海盜。締結了和約、但被背信的總督破壞。他被發現是個中国人。這個民族天賦的特点）」

再び広東に話が戻り、また記述が具体的になる。この「海賊」は、漢民族側の歴史記述では「起義軍」とされている⁴⁵。しかし、本章の記述はどちらにも加担せず、李成棟も海賊もどっちもどっちと見ている。むしろ「民族の本性」の面では、タルタル人がヨーロッパ人同様激情にかられて行動するものの本来は流血を好まないのに対し、チナ人のほうが残虐だとする。

15、「武の副王が海賊に勝利。陸の征服に向かう。海賊、広東市に戻るが、文の副王がこれを破る（總督焚燒了海盜船；海盜大批返回、洗劫各地、并且強迫中国人放棄已穿上的韃靼服裝。他們襲擊廣州城、被民政總督擊退）」

広州の人民は李成棟の凱旋に歓呼の声を上げたが、賊軍も再三巻き返し、勢力下にある民の服装を強引にチナのものに改めさせたことを述べる。人々の暮らしを恐怖と不安に陥れた賊軍に対して明らかに批判的である。また、これまでの記事のクロノロジーを李成棟の動向を軸に整理し、タルタル軍の広州城占領（47年1月20日）→李成棟の海賊に対する大勝（2月末）→李の肇慶進攻、桂王の反撃→肇慶占領→李の更迭→広東に戻る（4月末）としている。終わりのところで、戦争に巻き込まれたある国⁴⁶の朝貢使節への言及がある。

16、「奴隸の黒人たちが偶像教徒のタルタル人の前でカトリックの信仰を英雄的に表明。海賊が海辺のまちを占領するも、結局は武の副王が奪取。文の副王⁴⁷が陸上で再度勝利（一些黒人基督徒向韃靼人呈遞他們信教的聲明。之後全能上帝奇迹般使他們在戰鬪中生存下来。海盜繼續破壞国土。軍政總督將海盜逐回他們自立之地、并進行防禦、他摧毀城鎮及其隣近地区）」

広東の防衛に奮戦した黒人クリスチャン部隊が主人公。ハイライトは、褒美に肉を与えられたのを「四旬節だから肉は食べられません」と断った彼らの信仰の強さである。黒人しかも逃亡奴隸（彼らの来歴について、マカオから逃亡し、一官のもとに身を投じ、

⁴⁵ たとえば、後出する張家玉は、屈大均の『皇明四朝成仁録』では「東莞起義大臣伝」（巻10）に立てられている。

⁴⁶ 後述するように、この国はシャムだが、『チナ征服史』ではそれが示されていない。

⁴⁷ 本文を見れば、「武の副王」が正しい。

主人の投降後にタルタル軍に仕えるに至ったと説明する）でありながら、異教徒のみかヨーロッパのクリスチャンにまで反省を迫るような純粋な信仰を見せたことを力説する⁴⁸。この海賊の2度目の敗戦を4月初とし、その10日後に一官の旧配下の艦隊が救援に来たとする。

17、「海賊の増加に副王が怯える。東莞市でおきた彼に対する有名な抵抗。海賊の逃亡と副王の残忍（海盜給將軍製造麻煩。他們占拋東莞城、守衛它并且打退幾次襲擊。他們有条件地交出城池。將軍士兵的暴行）」

豊かな広東を疲弊の極に陥れた一方の責任者李（成棟）が帝国滅亡の原因をもたらした李（自成）と同姓であることを指摘し、「李」の字がほんらい有徳・礼節などよい意味しかもたない文字⁴⁹なのに、この字を冠した2人が帝国を破壊した皮肉を嘆く。また、この攻防戦にヨーロッパ人砲兵が参加したとする。彼らはタルタル軍に対抗すべくマカオから遠く離れた辺境にまで駆り出され、けっきょくタルタル人に投降した者であった。

18、「文の副王、武の副王の残忍に心を痛める。海賊の報復。何度も武の副王に対し勝利を取める。これらの勝利とチナの滅亡の原因（民政総督談他同僚的残酷。海盜仍騷擾韃靼人。中国人改善他們的戰術。北方的中国人本性不同于南方人）」

佟養甲がイエズス会士サンビアシに対して漏らした李成棟批判から始まるが、先の「李」の符合に加えて、ここでは二人の「張」の符合があると付記する。1人は張献忠だが、もう1人の「海賊の張」とは「義兵を起こした」として明の忠臣に数えられる張家玉のことである⁵⁰。海賊に対しては相変わらず手厳しいが、その猛烈な抵抗と再三にわたる勝利のうちに文弱のチナ人が鍛錬によって優秀な兵士となりうる可能性を見出し、これを前章に登場したヨーロッパ人の証言により確認している。しかし、大

⁴⁸ 仏訳ではその力説部分が省略されている。つまり、漢訳にもない。

⁴⁹ 漢訳 p.125 の注では「李を木と子に分解して解釈したのだろうが、ここで言われているような意味はない」としているが、そうではなく、「李」と「礼」を混同したものである。同音ないし近似音からくる混同は中国滞在経験を持つ宣教師でもしばしば犯す。たとえば、マルティニの『シナ新地図帳』には、そうした事例が複数見られる。注7 拙稿 p.126 参照。

⁵⁰ 漢訳では同定されていないが、舞台が東莞であることからして、張家玉を指していることは間違いない。彼が東莞を陥落させたのは、1647年4月のことである。まもなく広西から戻ってきた李成棟に敗れて惠州に奔ったが、その後も陳子壮らの抵抗がしばらく続いた。

勢としては武を軽んじたことがチナの滅亡に繋がったとする。

19、「海賊、武の副王の不在時に広東を襲う⁵¹。郊外の要塞を占領して保持する。文の副王が種々の陰謀を発見し、処罰する（海盜占拠了広州付近一座小堡壘、得到部分守軍的支持。軍事総督⁵² 發現別一座堡壘有新的陰謀。他懲處叛逆的方式）」

1647年8月4日に海賊が広州に舞い戻り、郊外の要塞を占領した。海賊と通謀している者がいることに気づいた佟養甲はスパイを逮捕して拷問にかけ、首謀者が「閩老のChim」であることを突き止め⁵³、彼の兄弟や従兄弟を捕らえた。佟養甲は好意的に記述されてきたが、ここでは無辜の者まで巻き込んだ彼のやり方に批判の目が向けられている。

20、「海賊が広東を新たな危険にさらす。武の副王の勝利。新たな陰謀の発覚と処罰。チナ人将官のたぐいまれな勇氣（広州警惕海盜的到来。居民的驚恐。將軍抵達并擊敗海盜。謀逆者の受審、及他們受到的処罰。一位中国将官的決心、其死亡以及受到的贊揚）」

次々と逮捕者が出る中で、最後まで勇敢沈着だったある将官にスポットライトを当てる。誣告は当たり前一極端なものになると仇の家の前で首を吊って相手に殺人罪をおおいかぶせようとする一のチナ人のなかにあって、連座者を出さないために黙秘を守り、妻子の命を餌にされても平然としていた人物を、ヨーロッパの知識人にはおなじみのローマ世界を引き合いに出して絶賛する。内通は「カティリナの陰謀」と表現され、黙秘を貫いた男には小カトーも及ばないとしている（カトーには自殺する勇氣はあっても、息子の死を恐れてカエサルに託した）。そして、その将官が桂王から広州の内応工作に派遣されたとする説を紹介している。

21、「海賊の戦いの結末。副王にしかけた海戦。失われた帝国、その一部でさえも回

⁵¹ 漢文史料によれば、李が新安に赴き、広東を不在にしていた間に、陳子壮らが広東を襲っている（李君明『明末清初広東文人年表』（中山大学出版社、2009、pp.157-158）。この記述とほぼ符合する。

⁵² 「文の副王」が正しい。ここでは李成棟不在の間の佟養甲の事態処理が述べられているからである。スペイン語版のVirrey de las letras、仏訳のVice-Roi des lettresが英訳で「武」に誤ったのである。

⁵³ 漢訳p.137は誰か分からずとりあえず「秦」を当てているが、隆武帝に東閣大学士に任命された陳子壮のことである。『皇明四朝成仁録』巻10によれば、この時佟養甲は彼の妹婿を殺している。

復の希望なし（海盜占領了幾個地方、而且回師進攻廣州。將軍在海上擊敗他們。中國人的情況不妙、他們只能激怒韃靼人、消耗韃靼的兵力）」

ここでようやく海賊の話は終わるが、一地方の騒乱の終結にとどまらず、中国全体の抵抗の終結として描かれている。失地回復のチャンスはあったのに、不死鳥のごとくレコンキスタで蘇ったスペインのように再生できなかったと嘆息するのである。

22、「帝国は青い眼をした外国人に征服されるというチナの占星術師の有名な預言。この不吉な預言に対するチナ人の予防策（中国一個星相学家著名的預言：中国要被長着藍眼睛的外國人征服。中國人爲防止這個預言實現而採取措施）」

チナの滅亡の記述を総括すべく、預言の話を持ってくる。青い眼をした外国人にチナが滅ぼされるという預言が流布し、これがオランダ人を敵視し、さらにはイギリス人やデンマーク人に入港を認めなかった原因だとするが⁵⁴、この碧眼とは実は順治のことだったというオチがつく。だが、はっきりと順治の眼が青いという記述を見つけたわけではなく、「ヨーロッパ人に劣らぬほど透き通る肌をしている」という記述から類推したのだとことわっている。そして、チナ人が預言により滅亡を察知し、見当違いとはいえ対策も講じていたのにかかる事態を招いたのは、神の審判について知らなかったからだと嘆いている。

23、「チナの滅亡が周辺諸国の人々に引き起こした感情。亡国チナ人の困惑とコチンチナ王の厳酷な扱い（和附近国家作生意的中国人、在喪失国土的消息伝開後受到虐待。交趾支那的侯王不接納到他国土上避難的人）」

チナの滅亡は周辺諸国に波紋をまきおこし、貿易商人や在住華人にとっては受難の時となったとする。なかには滅亡を信じたくない、あるいは滅亡の事実を糊塗しよう

⁵⁴ イギリス人の中国渡航は、ジョン・ウェッデル率いるコーティーン会社の船隊が1637年にマカオにやってきたのに始まる。デンマーク人はこの時点で中国には到達していない。オランダ東インド会社を離れた後、デンマークの東インド会社に鞍替えしたバレント・ベッサールトは会社と袂を分かった後、配下を引き連れて日本への渡航を目指したが（彼の動向を追尾する史料では、あいかわらず「デーン人のプレジデント」とされている）、バタビア総督府に阻止された。その後彼はオランダ人によってマニラに派遣されるが、その途中に原住民に殺害され、配下の者はマニラに到着したもののスパイと疑われてスペイン人に拘留された（Sanjay Subrahmanyam, *The Political Economy of Commerce: Southern India, 1500-1650*, Cambridge, 1990, pp.186-189）。スペイン人がデンマークの存在を意識したのは、おそらくこの事実によるものだろう。

とした人たちもいて、パラフォックスの知り合いのメキシコ在住チナ人クリスチャンはその一例だった。この人は故国を離れて20年、当然その事情を直接に知るべくもなかったが、「チナ人がタルタル人を破った」と述べる兄弟の手紙をパラフォックスに示した。しかし、パラフォックスはそれを信じなかった。手紙の日付とほぼ同じ頃に彼が情報源とした報告を入手しており（つまり、手紙は報告より後に書かれている）、報告のほうを信じて、手紙のほうは事実を糊塗したものと考えたのである。彼はかかるチナ人の苦境に同情しながら、こうなったのはチナ人が外国人に猜疑心を抱き、その入国を阻止していたことのしっぺ返しとも見ている。それに対して、新支配者であるタルタル人は外国人に対して偏見が無く、ヨーロッパ人に気質が似て開放的であり、今後は交易だけでなく、宣教にも大いに期待が持てると述べる。最後に、コチンチナ王（広南阮氏）は寄港したチナのジャンクに当初交易を許さなかったが、「卑怯なチナ人は相手にせず」という口とは裏腹に、賄賂をもらうと交易を認めたことを記す。

24、「日本王がこれまで抱いていた警戒心と恐れが新たにかき立てられる。それがカトリック布教を不利にする。亡国チナ人に対する残酷な扱いとこれに対するタルタル人の感情（日本皇帝虐待中国人。這個君王忌恨異邦人。他的猜忌是向日本百姓布道的巨大障碍。他拒絕接受澳門葡人的使臣。日本人尽管很強大、仍有理由害怕韃靼人）」

チナ人に対して最も苛酷だったのが日本であり、それは日本の皇帝（将軍家光）の對外恐怖が形を取ったものだとする。その恐怖心は1647年にポルトガルから送られた使節団を追い返したことに示されているとして、事件の推移を追った後、タルタル人のチナ制圧に恐れをなした皇帝が在留華人を追放し、すでに辮髪にして長崎に来航した華商に交易を許さず強制退去に処したことを述べる。著者は、もし順治が日本に兵を送ることを決意すれば、征服は達成されようし、そうなれば福音が日本に再び入る道が開かれるだろうと希望的観測を示す。そして、ここであらためて帝国の滅亡に思いをいたし、カルタゴの滅亡にローマの将来を見た異教徒スキピオ、ローマ劫略の時代を生きた聖ヒエロニムスを引き合いに出して、周辺諸国は帝国の滅亡を見て反省の機会とせねばならないと締めくくる。

25、「タルタル人の崇拜対象と偽の宗教、生来の美德と悪徳（韃靼人的宗教。他們本性善与恶）」

タルタル人の信仰を、多神または無神と規定する。天を崇拜することを知っても、真の神の存在を知らず、祭祀を担当する Bonzo（坊主）は存在するが、彼らを尊重してもしない。要するに、宗教に対して関心が薄いのだが、それが信仰に対する寛容を生み出している。征服の過程で無数に存在する偶像寺院を軍隊の宿営に使うことはあっても破壊まではせず、坊主を軽蔑しながら迫害まではしなかったことがそれを示している。多信仰の許容は布教の障害にもなりうると指摘する一方で、宣教師が占領軍に概ね好意的に遇せられていること、北京では教会をタルタル人の女性が足繁く訪れている例があることを述べ、今後の布教に期待をかけている。最後に美德として、1、女性に禁欲的（多妻不可）、2、平和な時は愛想がよく気さくである、3、賄賂を取らないことをあげるが、これらを裏返したものがチナ人の短所ということでもある。最大の悪徳は戦場における残忍であり、また平気で約束を破ることを指摘するが、前者は戦場とくに下級兵士に見られるもので、民族の本性とは言えず、後者はトルコ人やムスリムにも顕著に見られ、さらにいえばマキャベリの言説が示すようにヨーロッパにもあるとする。このように、タルタル人独特の悪徳が指摘されているわけではない。

26、「順治王治世下のタルタル人の統治、チナにおいていかに始まり、いかに受け止められたか（韃靼人在中国的治理。年輕順治出色的才能、他對宮中曼達林和太監改革。韃靼婦女的個性自由）」

タルタリアは南北東西の4グループに分かれ、そのうちの東・北のタルタル人が征服の主役となったとする。しかし、もともと敵対していた西・南のタルタル人（モンゴル人のことを指す⁵⁵）もこれに協力しているのを見て、トルコ人を前にして一致団結できないヨーロッパの「文明人」はこれら「野蛮人」に及ばないと嘆く。順治の治策については、タルタル人を両京に集住させ、支配の拠点とする一方で、首都はタルタリアに維持されていたとする。次に「北京から来た者」の情報として少年皇帝の寛大、温和さが紹介され、その証拠として44～46年の納税が免除されたことが上げられる。さらに、占領地における兵士の掠奪を防ぐべく軍営を郊外に張らせる、退職官僚の特権の剥奪、「一派だけでも30万を数える」大量の坊主の整理を挙げた後、最大の改革

⁵⁵ 17世紀には、マルティニの『タルタリア戦記』にも見られるように、宣教師の間ではモンゴル人を西タルタル人、満洲人を東タルタル人と呼ぶのが一般的であった。

として宦官の排除を強調し、タルタル女性に自由な行動が認められているためにそれが可能になったとしている。

27、「チナにおけるタルタル人の統治と個々の官僚たち（中国人滿意韃靼的治理。中国曼達林的威風和貪婪。韃靼人執法之迅速和公正）」

タルタル人の政治が人民に歓迎された理由は、旧時代の官僚が威厳を保とうとするあまり人民を遠ざけていたのに対し、新しい支配者たちは人民に気軽に接し、訴えもすぐに受理して処置するところにあるとする。特に、旧時代の裁判の場における勿体ぶった官人とその権威の前におびえきっている容疑者の様子を具体的に（多少漫画的に）描写して、タルタル人の裁判の迅速かつ清廉な処理との対比を際立たせる。順治が政治の旧弊を知ったうえで、官僚の中間搾取を防ぐ処置を講じたことも、新政の成功の原因だとする。反乱鎮圧において冷酷だった李成棟が裁判にあたっては公平であることをエピソードを引用して紹介し⁵⁶、綱紀肅正の一例としている。

28、「タルタル人の言語と文字。チナ人の言語文字を輕視（韃靼人強迫中国人放下書本、拿起武器。韃靼的文字和語言。他們最喜歡的事）」

著者は文人を自認しているが⁵⁷、武の重要性を認めている。母国スペインのレコンキスタも武によるものだったが、その維持・拡大には文を必要とし⁵⁸、両輪相俟ってこそその世界帝国であると認識している。文を重んじるチナ人と武で征服を達成したタルタル人のいずれにも偏向はあるが、ここでは武に軍配を上げている。1647年初頭に南京で開催された科举に言及して、征服者が文を軽んじたわけではないとしながら、同年8月に順治が遠路広東まで兩副王に褒美を送る使者を派遣した話を持ち出し、旧体制下で兵が死後の褒賞も期待できないままに戦場で死んでいったのに比べて、武功が正當に評価される新王朝を持ち上げる。王朝の交代は大まかにいえば、文から武への転

⁵⁶ もとの「李は（広東副王の役所では）大カトー（のような清廉な官僚）であった」（p.326）を漢訳 p.182 は、「後に大官となり、清廉な法官となった」とし、「李成棟は広東占領後、永曆側に投じ、清と戦って死んだので、大官にはなっていない」と注記してこれを否定しているが、これは仏訳の誤りから来ている。

⁵⁷ 漢訳 p.185 が「那些因生活方式宣称自己偏愛書本的人」と3人称になっているのは仏訳から来たものである。このほかにも1人称が3人称に変えられたことでテキストの意味がかなり変わってしまっているところがある。

⁵⁸ 漢訳 p.184 には「根本不使用書本」とあるが、仏訳に由来する誤りである。

換であり、その象徴として、ある文人の書房（Xufan）がタルタル人将官の占拠するところとなったコメディタッチのエピソードが挿入される。

文字については、日本やヨーロッパ、ヒエログリフなどとの比較のもとに紹介される⁵⁹。そして既出の Pelipaovan を「貝勒 + Pao（根拠も示さずに、コレア語または他の言語で「王」を意味するのではないかとする + 王）と分解し、「王」を意味する言葉の三段重ねだが、無駄に繰り返しているわけではなく、「君（Kium）」と「王（Van）」が重ねられて「君王」という新しい語が作り出されたように、この三段重ねにも何らかの意味があるのではないかと珍妙な解釈を施す。そして、これほど栄光ある称号をおじに与えながら不安を覚えていない皇帝順治の度量はヨーロッパの君主を上回るものであり、臣下の側もヨーロッパに比べて野心が少ないとする。

29、「タルタル人の攻守の武器（韃靼人之好戰。他們的攻守武器。騎兵是他們的主力。他們的良馬）」

軍事教練で褒賞が出ることや、武具のかなり細かい説明など、記述は具体的である。とくに著者が強い印象を受けているのは、チナ侵入後火器を手にしたタルタル人が自らこれを使わずに降服したチナ人に使わせたことである。そこに彼らの無警戒を見るのではなく、順治が3人のおじに大権を委ねたのと同様な信頼感を見い出している。ただ、時代が変わった時、そうした信頼感がアダとなって国を滅ぼすこともありうることを釘をさすことも忘れていない。

30、「タルタル人の軍隊と軍紀（韃靼人的軍紀。他們作戰的方式、以及他們怎樣圍攻城池。他們不喜歡住在城里。他們安全地睡在營帳里、不設置守衛和哨兵）」

部隊編成も何もなく無秩序にひたすら攻め立て、攻城戦においても突撃してから空中戦に移る、いずれをとってもヨーロッパと対照的な戦法を紹介する。キャンプを張れば、チナ人のように厳重な警邏の兵を置かないのは彼らの自信のなせるわざで、逆に280年間営々と都市を守ってきたチナ人の警戒心が何の役にも立たなかったとする。

31、「顔つき、社会的交際におけるタルタル人の礼儀とその他の性格（韃靼人的儀表。他們天生偏愛戰爭和勞働。他們坦率和自由的交際、不拘礼節。他們一般的娛樂、職業的工作）」

⁵⁹ この部分の漢訳は原版と相当かけ離れている。詳しくは異同表を参照。

タルタル人の裏表のなさをヨーロッパ人の偽善と対比した後、具体的に彼らのあいさつの方法や音楽、食べ物の好みについて述べる。とくに強調されるのが、彼らがムスリムの禁酒の偽善に影響されず（著者はタルタルの隣人にムスリムがいるととらえている）、酒を好む一方で酒に吞まれないことを賞賛する。愚かにも乾杯を繰り返し足腰が立たなくなる酔態をさらすヨーロッパ人とは大違いだと言う。

32、「タルタル人の服装（韃靼人的衣服和裝飾。他們婦女的賢淑和貞節：女人尽管愛騎馬打仗、仍然恪守婦道。這部韃靼征服中国史的結束）」

服装についてかなり細かい描写がされた後、社会における女性の地位について述べる。広東での事例を除けば女性への暴行が禁じられ、男性には辮髪が押し付けられたのに、女性には習俗が強制されずにその意志が尊重されたことに、その地位の高さを見る。男同様に馬を自在に走らせ、戦闘にも参加する女性の姿を行き過ぎとはしつつも、こうした風習は宗教に関係しないので一概に咎めるべきではないとする⁶⁰。最後に、タルタル社会の諸側面を描写してきたのは、新しい統治体制を理解するためだと述べ、新帝国に福音が普及することを期待し、宣教の役割を果たすのは「カトリック帝国」スペインだと予言して結びとしている。

次に、使われた材料を示唆する文言を拾い出してみよう。

p.4（チナから）届いた報告・情報（*relaçion y notiçias*）を集めて知らされたものだが、これらの記述は戦乱と帝国の転覆のために短く、混乱しており、時間や人物の確定ができない。そのために、一つ一つを見て照合し、ある情報に含まれている事柄から別の情報中にあるものを推測するという手続きが必要になる⁶¹。

p.4 李は張を圧倒したか、詐略により殺害したらしい。というのも、「報告（*la relaçion*）」にはこれ以上張についての言及がないからである⁶²

p.18 1640年に刊行されたチナについての最新の報告（*ultima relaçion de la China*）

⁶⁰ ただし、パラフォックスの女性観自体は、その著作 *Discursos spirituals*(1638-1639)に見られるように当時にあって常識的なもので、夫に従順で家を守って外を出歩くことのない女性像を理想としていた。Joseph-Ignasi Saranyana, “Cómo vio Palafox a las mujeres”, in *Varia Palafoxiana*, pp.291-304.

⁶¹ 漢訳 p.19 は英訳の誤り。

⁶² 漢訳 p.19 が「李と張の関係についてはこれ以上の言及がない」とするのは誤り。

には崇禎帝に太子がいたことが2ヶ所記される⁶³。

p.19 この報告文書 (esta relación manuscrita) には (太子への) 言及がない。

p.27 「報告」には (崇禎帝の) 治世年数が記されていない……出版された諸報告 (las relaciones impresas)⁶⁴ やその他の文書 (otros papeles) によれば、帝国の滅亡前の22年間に4ないし5人の王が立ったという。

p.36 そこ (チナ) から来た「報告」にはその時期をはっきり記さないが、南方の省での王族の即位はタルタル人の侵入以後のことだと考えられる。

p.39 「報告」は、全土の征服に3年と数ヶ月を要したと述べる。

p.42 「報告」には (李が) 陝西に撤退したと記す。

「報告」全体 (toda a relación) を見ても、その後の僭主、その軍隊、財宝の行方には言及がない。

我々にこの知らせ (noticia) を提供してくれた人は、(李の情報について) これ以上確かめることができなかった。

p.43 タルタル人が即位した後に北京から来た人が提供した情報が「この報告」にはあるが、

p.64 「報告」には、ヨーロッパの兵が2000もいればこの (南京) 城壁なら数年持ちこたえられるとある。

p.93 「報告」によれば、(一官は) 国王たちから国公の権威を得たことに満足したという。

p.100 おじ (ドドのこと) が王と呼ばれたといっても、それは副王 (Virrey) に過ぎない。単なる副王だとすれば、「報告」が間違っていることになる。

p.103 「報告」はここで (aqui) 「王 (唐王=隆武帝) は捕えられ、殺されたのは確かだ」とするが、どうやら後に復活したらしい。

p.112 この省 (広東) はマカオ市に近く、(広東征服の) 情報はマカオからマニラに

⁶³ これに該当する書物を見つけることができていない。1642年にマドリッドで刊行されたセメードの『チナ大帝国志』にはこうした記述はない。漢訳 p.26 が「中国で刊行された書物」とするのは誤り。

⁶⁴ 漢訳 p.30 は「中国で出版した報告」とするが、「チナで」という表現は仏訳で加わったものである。

届いた。

p.114「報告」にはこの王（紹武帝を指す）の名を記さない。

p.148「報告」が書かれたのは47年の第3三半期だが、日付は特定できない⁶⁵。

p.152唐王はまだ生きているとも言われているが、「報告」は彼を別の名前で魯王と呼んでいる。

p.153私には「同じ報告 (la misma relación)」が彼（唐王）を復活させたのだと思われる（「同じ報告」とはp.152のもの）。

p.154「同じ報告」から反対のことが類推される。というのも、そこには「福建から Pelipaovan が派遣した馬歩軍が日々広東に向かっている」と記されているからである。

p.169 私が執筆している時、20年前にチナを離れて当地に妻子と暮らしているキリスト教信者が言った⁶⁶。

p.187「報告」によれば、彼（李成棟）は1647年の4月初に遠征から広東に戻ってきたという。

p.205「報告」の表現によれば、1艘を破壊しても30艘、1人を殺しても100～200人が新たに押し寄せたという。

p.207「報告」には（賊の数は）真砂の数にも劣らぬと書いている。

p.229「報告」は、最近のタルタル人との戦闘において、チナ人はタルタルの弓矢をあざけり、正確にすばやく銃を放ち、すばやく矛や短槍を使ったという。

p.234「報告」には言及がないが、海賊たちはこの後要塞を出たと思われる⁶⁷。

p.258 上述のほかにも海賊との戦いはいくつもあったが、「報告」は退屈な記述であり、

⁶⁵ 漢訳 p.95「これが1647年末時点での関係するすべての報道だが、その詳細は分からない」は仏訳に由来する誤訳である。

⁶⁶ 漢訳 p.153では、「私が執筆している時」がないので、中国人がバラフォックスに向かってしゃべったということがわかりにくくなっている（仏訳も同じ）。この後、バラフォックスがメキシコ在住の中国人から、本国にいる兄弟から届いた手紙を示される話が続くが、仏訳にはやはりバラフォックス個人が登場しない。漢訳はさらにそれを誤訳しているので余計に話が見えない（後掲異同表参照）。なお、クミンズはこの記述から、バラフォックスが中国人から取材したと述べているが、英訳しか使っていないチェンはこれに気づいていない。

⁶⁷ 漢訳 p.137は「消息はここで中断し」とするが、誤訳である。

どの戦いも似通っているので、全部述べようとは思わない。

p.264「報告」ははっきりと順治が碧眼だと述べてはいないが、「イギリス人やフラマン人よりも色白」だと明確に言っている。

p.305 タルタリアの首都の名はこちらに届いた「報告」にも、情報 (notícias) にも言及されていない。宮都 (北京) から来た人⁶⁸の情報によれば・・・

p.333「この報告」に書かれているとおり、(両副王は) 広東の防衛のために多く戦い、同等の勇気を示した。

p.338「報告」全体を見ても、タルタル語の発音を示す事例は順治のおじである有名な Pelipaovan 以外には存在しない。

このように、刊行物も多少は用いられ、複数の材料 (「その他の文書」) を使っているが、頻出するのは *relacion* という語であり、それも未刊のもの (*manuscrita*) であるらしい。むろん、これだけでは「報告」が同一のものを指すとは限らないが、「この報告」「報告全体」「報告はここで」という表現は、やはりそれらが同一のものであることを予想させる。

なお、p.275 に「昨 1647 年 (*el año pasado de 1647*)」⁶⁹と見えることから、この著作の原稿が翌 48 年に書かれたものだということが分かる。

以上で、『チナ征服史』の大要は理解されたと思う。では、当初の問題に戻るとしよう。材料が具体的に特定できれば、本書のオリジナルな部分を確定できるのである。

2、イエズス会文書

前述したように、チェンは反イエズス会の立場にあるバラフォックスがマルティニを使ったとは考えにくいとし、クミンズはメキシコを通過したドミニコ会士からの情報入手を重く見ている。しかし、当時中国内地の情報に最も容易にアクセスできたのは、福建でしか活動していなかった托鉢修道会士ではなく、きわめて薄くではあるが (当時全国で 20 名～30 名程度) 各地に分布していたイエズス会士である。

⁶⁸ 漢訳 p.172 では「北京で順治に会った人」となっているが、これは仏訳に由来したものである。

⁶⁹ 漢訳 p.158 で「昨」が落ちているのは、仏訳に始まるものである。

そのイエズス会の文書の中に、『チナ征服史』にきわめてよく似た内容を持つポルトガル語文書が、ローマのイエズス会文書館（ARSI）に2点、ポルトガルのアジュダ図書館に1点存在する。前者は同時代に作成されたものと考えられるが、後者は18世紀にマカオで作られた写本である。テキストの関係についていえば、この3者の関係を整合的に説明するのは難しい。イエズス会の2本（ARSI.Jap.Sin.123,ff.181r-205v と Jap.Sin.126,ff.31v-73r. 以下JSと表記）は途中まではほぼ同じで、アジュダ本とは細かい表現における違いがあり、広州の神父たちの記述がアジュダ本では1人称複数になっているところが、JSでは3人称複数になっているケースがある⁷⁰。イエズス会本のほうが文法上のミスも少ない。しかし、JS 126は途中（「外見、慣習、交易」の項の途中）から急に文章の大胆な省略化が始まってそれが最後まで続く（おおむね文脈が取れるような改変だが、ある事件の記述を一切カットする場合もある）のに対し、JS123はそのまま、つまりアジュダ本とほぼ同じである。また、アジュダ本にはイエズス会本にない記述もあり⁷¹、JS123も原本あるいはその完全に忠実な写本ではないことが分かる。しかも、JS123は完本でなく、「付録」の途中で終わっている。そこで、以下の記述においてはアジュダ本を用いる。アジュダ本であれば、その写真を国内（東洋文庫）で閲覧可能で、リスボンから取り寄せることもできるが、イエズス会本はローマに行かなければ検証できないという理由にもよる⁷²。なお、この文書はタルタル人の興隆を主に扱ったものとして今後注目を集める可能性はあるが⁷³、管見の限りでは今のところこの文書の内容を本格的に検討したものは存在しない。

⁷⁰ たとえば、JSで‘alegrarão’となっているところがアジュダ本f.9vでは‘alegramos’になっている。マカオを指示する代名詞が前者では‘là’（そこで）になっているのが、後者では‘câ’（ここで）となっている。しかし、JSでnosso（我々）がそのまま使われるなど、人称変換が徹底しているわけではない。

⁷¹ アジュダ本のf.1vにタルタルの軍勢を「quasi des mil homens（ほぼ1万）」と記すが、イエズス会の2本にはない。

⁷² イエズス会の史料状況については、拙稿「イエズス会の極東関係史料—「大発見の時代」とその後」（大澤顯浩編『東アジア書誌学への招待』第2巻、東方書店、2011, pp.195-229）参照。

⁷³ Davor Antonucci, “The Jesuits’ Contribution to the Knowledge of Tartary: a Research Project”, 中国社会科学院近代史研究所・比利時魯汶（Leuven）大学南懷仁研究中心編『基督宗教と近代中国』（社会科学文献出版社、2011）, pp.233-234に言及されている。この論文は副題が示す通り、今後の検討課題を提示したものでイエズス会のタルタリア認識の展開を具体的に述べたものではない。また、本文書がアジュダにも存在することに言及していない。

当該文書は Codex49-V-13 に収められ、51 葉の分量を持つ。表題は「1642 年⁷⁴から 1647 年に至るシナの戦乱：皇帝の死、タルタル人の進入の記録。日本に派遣された使節におきた出来事」(Relação das guerras e levantamentos que houve na China : morto do seu Imperador e entrada dos Tartaros nella, des do anno 1642 athè o de 1647.E successo da Embaxada que foi a Japão ※斜体部分は省略を補ったもの、以下同じ) となっている。

この文書(以後「報告」と呼ぶ)には署名と日付がない。ただ、「コチンチナ・トンキンに数年行っていた (em especial da Cochinchina e Tumkim por onde andei alguns annos)」(fl.43r) とあることから、著者はベトナムとマカオを往還していたイエズス会士ということになる⁷⁵。これに該当する条件を備えているのは、一所に定住した宣教師でなく各地を巡察した者であり、候補としてマヌエル・デ・アゼヴェドが挙がってくる。すでに根拠は不明ながら、イエズス会士の史家フーベルト・ヤコブスが JS126 を彼の著作に数えている⁷⁶。後述するように、ベトナムだけでなく、マカッサル、ソロルにおける中国人の活動に言及しているところを見ても、各地を広く巡察した彼の作成になるものとみて間違いないだろう。

おそらく、広東からの報告を中心として(広東の神父たちに 1 人称が使われている)他の材料を集めながら編集され、JS はその後第三者的に書きかえられたものだろう。作成年月については、後述するように記述の重点が 1647 年にあり、付録として同年にマカオから貿易再開を策して日本に派遣された使節団⁷⁷の記述が置かれているところからして、イエズス会の各地における布教レポートをまとめた年次報告書である「年報」のスタイルはとっていないものの、これが 1647 年時点での記録として作られたことは明らかである。『チナ征服史』が「報告は 47 年の第 3 三半期 (terçio) に書かれた」と

⁷⁴ JS126 の表題も同じだが、JS123 では「1642 年」が落ちている。

⁷⁵ なお、J126 にはこの記述がない。

⁷⁶ C.E.O'Neill, S.I. and Joaquín M. Domínguez, S.I., eds., *Diccionario Histórico de la Compañía de Jesús*, I, p.315. 彼は 1644 年から日本管区の巡察師として、マカオに拠点をおき、東南アジア各地を回っていた。

⁷⁷ この使節団の首尾については、Charles.Boxer, *A Portuguese Embassy to Japan (1644-1647)*, London, 1928, id., "Fresh Light on the Embassy of Gonçalo de Siqueira de Souza to Japan in 1644-1647", in *Transactions of the Japan Society* 35, 1938, pp.13-62 参照。

推定していた(24頁)ことを想起されたい。この「報告」の中で時日がはっきり記されている下限は「9月3日」、その翌日に使節団は長崎を出航している。

文書には序文に当たる部分(表題はない)以外は各項目に表題が冠されている。それを掲げ、内容を略説しながら、折に触れて『チナ征服史』と比較していく。丸括弧内はフォリオナンバーを示す。

序文(1r-2v)

巨大な帝国に「近8年間(oito annos mais chegados)」の悲惨を生み出し、17王(reys)280年間続いた王朝が滅んだのは、チナ人の「罪と不正」によるという書き出しに始まる。「罪と不正」が具体的に述べられているわけではないが、主に布教の妨害を指していよう。マテオ・リッチに始まって、明末には各地に足場を作るに到ったイエズス会士の活動は、同時期の日本に比べれば随分好況にあった。しかし、宗教者側にとっでは大いに不満の残るものだったのである。満洲人の侵攻を布教の阻害に対する神罰だとする言説は多く見られる⁷⁸。また、ここで「近8年」となっていることに注意を喚起しておきたい。表題の「1642年～47年」と数が合わないのが妙だが、47年から8年さかのぼると、1640年つまり『チナ征服史』の記述の始点なのである。

その後は、李(自成)と張(献忠)の2人の反乱、北京の陥落と崇禎(Cumchim)の死、タルタル軍の北京入城と山西・山東・陝西の制圧、南京での弘光(Humquam)の擁立、「タルタル王のおじ(hum tio do Rey Tartaro)」による南京攻略、「一官 Iquan」(鄭芝竜)が福建で擁立した王(唐王=隆武)の政権の滅亡、一官の北京連行、広東での王族の即位とタルタル軍による制圧が早足で述べられる。

『チナ征服史』はこの間の経緯について100頁以上を費やしているので、「報告」との量的な差は明らかだが、それでも「報告」を使っている、あるいはこれを意識した記述が随所にある。詳しくは後掲のテキスト比較表に譲るが、ここでは序文の内容にかかわる2点のみ指摘しておこう。

⁷⁸ 1616年に始まるいわゆる「南京教案」の直後に満洲人の侵攻が始まっているが、宣教師の記述ではこの両者がしばしば結び付けられている。たとえば、マルティニ『タルタリア戦記』(アントワープ刊、1654) p.30(漢訳 p.348)を見よ。

1、前章で『チナ征服史』の中の‘*relaçion*’への言及を列挙したが、その中に張献忠の消息について「李は張を圧倒したか、詐略により殺害したらしい。というのも、報告にはこれ以上張についての言及がないからである」というものがあった。こちらの「報告」にも、たしかに張についての言及がない。

2、‘*relaçion*’には「南京の城壁はヨーロッパの兵が2000もいれば、数年持ちこたえられる」とあったが、同じ記述がここに見える。

また、「棄教者一官に神罰が下って彼が失ったもの」として、彼の親衛隊であった「さまざまな種類の黒人部隊300人」が数えられていることに注意を喚起しておきたい。

「タルタル人のチナ進出の理由」(*Rezão que moveo aos Tartaros a entrar na China*)
(2v-7v)

まず、タルタル王が中国侵入を正当化した口実が述べられる。すなわち、かつて王国は彼らのものだったのに、不当にも300年前にチナ人によって追われ、その後は「毎年払われる膨大な貢品とひきかえに中国に侵入しない」との契約を結んだが、その相手が亡くなり、その後継者もない現状では、叛徒を倒して本来自らの所有物であった王国を回復するのは当然である、とするものである。『チナ征服史』の1、2章にこれに該当する記述があり、「報告」より随分紙幅を費やしているが、この部分を敷衍したものだと考えられる。

次に順治(Xunchi)の征服過程の説明に移る。補佐役の3人のおじの存在(ここでは名前には触れていない)、北京征服後に「チナ人より勇敢なコレア人(*os Coreas mais valentes que os Chinas*)」の抵抗にてこずるが、ついには屈服させ、その印として王が北京に伺候したこと⁷⁹、山東・河南・陝西・山西・遼東を1年以内に制圧したことを述べる。これらは『チナ征服史』の3章後半と4章の頭に対応しているが、『チナ征服史』では征服が順治自身によって行われたとしていた。しかし、「報告」にはそう書

⁷⁹ 実際に北京に行ったのは、王ではなく昭顯世子である。世子が北京でアダム・シャルと会ったことは有名である。ジョン・ルイズ＝デ＝メディナ『遙かなる高麗：16世紀韓国開教と日本イエズス会』近藤出版社、1988, pp.131-134 参照。アダム・シャル自身が王(Rex Coreae)と会ったと述べている(H.Bernard S.J., *Lettres et Memoires d'Adam Schall S.J.*, Tientsin, 1942, pp.180-181)。

かれてはいない。これは少年皇帝の偉業を強調しようとしたパラフォックスの勇み足であろうが、あるいはフェリペ2世がネーデルラント反乱に対して親征しなかったことにスペイン衰退の原因を認めていた彼ゆえにこう書いたのかも知れない⁸⁰。また、『チナ征服史』が一連の出来事を「1644年に終わった」⁸¹と記していることが注意される。

続いて、2年目の出来事として南京の占領、江西、浙江ついで雲南・四川・貴州(Quaicheu)・湖広の帰順が述べられる。南京占領直後に副王(Vice Rey)となったのはチナ人でしゃべる時に手や頭を動かすしぐさから猿(Bugio)とあだ名された官僚で⁸²、まもなくして順治の3人のおじの1人⁸³がこれにかわったとする。このチナ人官僚とは洪承疇のことを指しているが、『チナ征服史』でも猿(Mono)というあだ名が紹介されていた。

『チナ征服史』では1645年に南京について「江西・湖広」「河南・四川・湖広⁸⁴」が清朝の支配下に入ったとしていた。「報告」の浙江が湖広、雲南が河南となり、貴州が抜けているが、いずれもミスだろう。

そして、3年目にはタルタル軍は歩騎合わせて20万、大砲500の軍容で福建に侵入、一官が頭を剃って帰順し、ついで広東もあっさり軍門に下ったとする。これらの征服軍を率いていたのが順治のおじで「チナ人を征服せる者」の異名を取ったPeli Pao Vamであり、もう一人のおじPeli Lu vamがおいを朝廷で補佐していたとする。前者については前述したように、内容からするとボロにふさわしいが、名前自体はアジゲを指す。「報告」では、Peliはタルタル語で小王(regulo)、Vamもチナ語で同義とするだけで、間のpaoについては語釈を施していない。一方、Peli Lu vamも記述からし

⁸⁰ “Juicio político de los daños y reparos de qualquiera Monarquía”, in *Obras de Palafox*, X, 1762, p. 41.

⁸¹ スペイン語版 p. 51, 漢訳 p. 43.

⁸² 副王とは江南総督を指す。洪承疇が任命されたのは順治二年(1645)閏六月である。彼が猿とあだ名されていたという話を漢文史料に見つけられるか分らないが、少なくとも王宏志『洪承疇伝』(紅旗出版社、1991)、楊海英『洪承疇与明清易代研究』(商務印書館、2006)にそうした記述はない。また、「2,3人の王に仕えた」とする『チナ征服史』の記述は、「報告」にはない。

⁸³ 南京を陥落させたドド(多鐸)を指す。ただ、ドドが洪承疇に代わったという事実はない。

⁸⁴ 仏訳、そして漢訳 p. 51 は Cancheu としているが、スペイン語版では Huquang となっていて、湖広が重複している。仏訳の Cancheu は、湖広の重複に気づいて独自に直したものであろう。

てドルゴンのことを指すに違いないが、「九王」の訛であろうか⁸⁵。

そして、この後は「マカオと近く詳細な情報が入手しやすい広東」⁸⁶ (3v) の情勢の推移について、紹武帝の即位、タルタル軍による占領、3日間にわたって行われた掠奪、盗賊の蜂起、マカオの新朝への服属、広東諸都市の帰順、王族 (Sinkiamvan⁸⁷) の即位と破滅などが述べられるが、これらは『チナ征服史』の内容とほぼ重なる。この部分についても、費やされる紙幅は『チナ征服史』のほうが相当多いが、そこに出てくる数字 (広東の死者数 15000 以上⁸⁸) や具体的な占領政策の記述 (タルタル人への服従の証として、その旨を書き付けた赤紙が一般人民と大身の者にそれぞれ指 2 本分の幅のもの、1 バルモ大のものが配布されたこと⁸⁹ など) は両者に共通する。

そして、一連の征服活動はほぼ完了し、1 年以内にタルタル軍は北京に凱旋するだろうと予測を述べ、内戦のために全土の交易は麻痺し、物価高に見舞われていたが、盗賊がなお充満する 3 省 (福建、広東、広西) を除いては物資の流通は回復していると情勢を総括する。次に、教会の情況、タルタル人の信仰・統治・軍事・文字・習慣・服装・容貌、征服に際して起きた出来事、征服者の善と悪についてこれから紹介すると予告し、次に「この報告」 (esta relação) では「タルタル人」をチナの主人となった人々と定義するので、征服者と行動を共にした人たちは「両親ともにチナ人 (mesmo Chinas de pay e may)」であってもタルタル人であり、これらの人々は外見からしてタルタル人と区別しがたいという (7v)。

タルタル人を装う姿に象徴されるように、あっさりと外国の支配者に身を委ね、その手先となって同胞と争うさまに、「報告」の著者も浅ましさを感じて、「汝の強き力

⁸⁵ 『チナ征服史』では、「報告には Pelipaovan 以外にタルタル語が見つからない」としていたが、これは気づかなかったか、「報告」に Peli Lu vam に続けて 'ou Lu' (「または Lu」) とあるのを処理しきれずにネグレクトしたかのいずれかだろう。ちなみに、「報告」はこの 2 人を「第二のおじ」「第三のおじ」とするが、これは長幼を表すのではなく、登場順を言っているだけである。

⁸⁶ 類似の表現は『チナ征服史』にもあった (p.112)。

⁸⁷ 『チナ征服史』で Sinhianuan としているのは、この訛である。広西で監国を称した靖江王亨嘉は瞿式耜に捕らえられて福州に送られ刑死しているのに、これにあてはまらない。存疑としておく。

⁸⁸ 「報告」 5v. 『チナ征服史』スペイン語版 p.128, 漢訳 p.85.

⁸⁹ 「報告」 6r. 『チナ征服史』スペイン語版 p.132, 漢訳 p.87.

を汝の国の臓腑に振り向けるな」というヴェルギリウス『アエネイス』の一節（第6歌）を引き、征服者の中に実は同胞がまじっているのを知りながらすべてが「真のタルタル人(Tartaros verdadeiros)」であるかのようにみなし、風体を変えたかつての同胞(seus mesmos naturaes tão mudados e trocados do que dantes erão)に膝を屈するチナ人の姿は、かつて外人とみればすべて野蛮人とさげすんできた民族だけに一層滑稽だと述べる。『チナ征服史』にも、被支配者へのいささか冷笑的な気分は共有されている。

また、広州占領の時日を1647年1月20日とし、征服事業に「3年数か月(tres annos e alguns meses)」かかったとする(4r-v)のも『チナ征服史』と同じである。後者はここで引き算を行って征服の開始を43年の末とし、以下北方諸省、南方諸省、福建の制圧をそれぞれ「1年目」44、「2年目」45、「3年目」46年に配当したものであろう。

『チナ征服史』にあって「報告」にない部分もかなりある。しかも、それは事件に対する評価だけでなく、情景描写にも及んでいる。しかし、そのほとんどは話を膨らませることが可能なものである。

「この時にチナ教会に起きたできごと」(Da Christandade da China a cerca do que passou nesta ocasião) (7v-12v)

『チナ征服史』には本章に対応する記事はほとんどないので、ここは詳しく紹介する。当時の布教配置図を確かめる意味もある。

広東の掠奪に際してある信者に起きた出来事が紹介された後、全国に現在29名のイエズス会士⁹⁰が分布し、北京のアダム・シャルが王(順治)の愛顧を受け、漳州では教会保護の告示を獲得するなど、新政権下で会士たちが概ね厚遇されていることが記される。

なかでも、広東の3神父(上長フランシスコ・サンビアシ、ガスパール・フェレイラと「他の一人(outro)」⁹¹)が蒙った苦難と救出劇の記述が飛びぬけて具体的だが、そ

⁹⁰ 当時福州にいたアントニオ・デ・ゴヴェアが書いた1647年のシナ副管区南部年報では「北に8人の神父、南に15人の神父と4人のイルマン」とする。Horácio P. Araújo ed., *Cartas Ánuas da China António de Gouvea*, Lisbon, 1998, pp.336-337. 「南部年報」なので、北部の会士の個別名は挙げられていない。

⁹¹ 該当する神父は見当たらない。Louis Pfister, *Notices bibliographiques sur les jésuites de l'*

れについては拙稿⁹²を参照していただきたい。ただ、ここで強調しておきたいのは、彼らを救ったのがスペイン人の父を持つメキシコ出身者で、その勇敢さと砲術の腕を買われてタルタル軍に仕えていたディオゴ・バレットという男だったということである⁹³。

その後はまた総論に戻り、ついで各地の概況が伝えられる。以下、それを紹介しつつ、イエズス会年報の記述との比較を行うが、あいにく47年の年報は南部（南方9省を扱う）のものしか残っておらず、北部については46年報が比較の対象になることをこたわっておく。

北京では、アダム・シャルのいる住院に順治がしばしば夜に訪問し、その愛顧を受けたシャルは欽天監の長（*mestre de calendario sinico*）となっていた。ほかに上長のフランシスコ・フルタド⁹⁴と、「名前の分からない誰か（*de outro não sabemos quem seja*）⁹⁵」がいた。上長よりもシャルのほうが先に名前が来るほどに、当時であってその存在は大きかったということだろう。彼のもとを「コレア王」が数度訪ねていた⁹⁶。

山東には、「80歳を越える」最長老でもはや体を動かすこともままならないニコラオ・ロンゴバルドとフランシスコ・フェラーリ⁹⁷、陝西にはジョゼ・ダルメイダとイナシオ・ダ・コスタ⁹⁸とそれぞれ2人がいたが、山西はミゲル・ヴァルタが病死した今、ミシェ

ancienne mission de Chine, 1552-1773, Chang-hai, 1932, p.142 は、17世紀末に Dunyn-Szpot が著した「シナ布教史」（稿本）にもとづいて、*coadjuteur*（助修士）としているが、やはり名前は挙がっていない。

⁹² 「イエズス会士フランシスコ・サンピアシの旅」（『アジア史学論集』3, 2010）pp.64-68.

⁹³ フィステーは Dunyn-Szpot にもとづいてその略歴を述べている。「父が Nova Hispania 生まれである」という記述を「フィリピンか」としているが、文字通りメキシコと考えてよい。Pfister, *op. cit.*, p.295.

⁹⁴ 北京の上長であるだけでなく、当時の北部全体の統括者であり、各地の巡察にあたっていた。Joseph Dehernie, *Répertoire des jésuites de Chine de 1552 à 1800*, Paris, 1973, p.103.

⁹⁵ 後述するように、ジョゼフ・ダルメイダと考えられる。「報告」がこれを知らないとしているのは、46年報を参照していないことを示している。ちなみに、46年報は福州で47年8月30日に作成されている。

⁹⁶ 「コレア王」の訪問は46年報にも記されている（Araújo, *op.cit.*, p.301）

⁹⁷ この時点で在華半世紀を数えるロンゴバルドと対照的に、フェラーリが中国に来たのは1640年で、年も39歳。46年報には彼らへの具体的な言及はなく、省都済南に2人いたと記されるのみである（*ibid.*, p.297）。

⁹⁸ 西安にいた2人は李自成によって囚われの身となるが、やがて釈放される。この苦難の記録が

ル・トリゴーがただ1人残されていた⁹⁹。

南京ではジェロニモ・グラヴィナがいた住院がタルタル人の掠奪にあったが、神父が恭順の意を示したので命は助かった¹⁰⁰。上海にイルマンのルイス・デ・フィゲレドとともにいた神父フランシスコ・ブランカティは大身の者に敬意をもって遇せられ、一度失った住院を取り戻したばかりでなく、徐光啓 (Doutor Paulo) の子や孫ら友人たちの窮地を救った¹⁰¹。

江西の首都南昌には、神父のトランクイロ・グラセッテとイルマンのマヌエル・ゴメスがいたが、町が大火に見舞われる前に疎開していたために助かっていた¹⁰²。浙江のマルティノ・マルティニも、混乱の中、住院の側に住んでいた敵人による虐殺をからくも逃れて、イルマンのフランシスコ・フェレイラ、ジョアン・コルテスの2人と杭州から程遠からぬところに避難していたが¹⁰³、浙江は「現在ではチナでもっとも平穩であった。(hoje he a mais pacifica provincia de toda a China)」

福建では、チナ副管区長のジュリオ・アレーニが福州の近郊に身を隠していたが¹⁰⁴、前述のスペイン人のバレットが何とか彼と連絡をつけたという。福州には上長のアント

やはりアジュダ文書に存在する (Codex 49-V-13, "Relação da entrada dos Tartaros nesta China, tomada do Imperio", ff.267r-300v)。ダ・コスタはそのまま西安にいたが、ダルメイダは45年に北京に移っており (Araújo, p.298)、47年の時点でも北京にいたと考えられる (ibid., p.415)。実際にこの時陝西にいたもう1人は、フランス人会士のエティエンヌ・ル・フェーヴルであろう。

⁹⁹ ヴェルタは46年報によれば、盗賊に襲われて負った傷がもとで死んだという。トリゴーは、同年報によれば、山西布教の中心地絳州にいた (ibid., p.302)。

¹⁰⁰ 46年報では、常熟にいたグラヴィナがタルタル軍入城の3日前に郊外に退避していたところを、彼を目の敵にしていた「偶像の僧侶たち」が亡き者にしようとしたが、これを逃れた彼が南京に赴いたことを記し (ibid., p.309)、47年南部年報では再び彼が常熟に戻ったことを報じる (ibid., p.377)。

¹⁰¹ ここでは「大身の者」としか書かれていないが、46年報にはタルタル人支配者との交流について記している (ibid., p.309)。47年報には松江での「タルタル人の將軍」の反乱 (呉勝兆を指す) の記述がある (ibid., p.369)。

¹⁰² ibid., p.310に言及がある。マルティニ『タルタリア戦記』は2人の名前を出さないが、南昌の攻防戦の記述で2人の会士が殺害されたとする。

¹⁰³ 46, 47年報では、コルテスをマカオの学生 (estudante)、メスティゾ (ポルトガル人とマカオの中国人の混血だろう) として、イルマンのフェレイラとは区別している。年報には隣人による迫害への言及はないが、彼らが避難していた場所を蘭溪とする (ibid., pp.265,366)。

¹⁰⁴ 47年報は、延平にいて、カネヴァリの招きで泉州に赴いたとする (ibid., pp.338-339)。

ニオ・ゴヴェアがいたが、病のために一層衰弱していた¹⁰⁵。他にもシマン・ダ・クーニャとジョアン・ニコラオ¹⁰⁶、この年新しい副管区長に就任したマヌエル・ディアスとイルマンのバスクアル・フェルナンデス¹⁰⁷、そしてペドロ・カネヴァリ¹⁰⁸がそれぞれ3つの住院に駐在していた。これらの会士たちの任務の1つが、主にマカオから逃亡し、その後一官に仕えた黒人たち (*hum numero de homens pretos, principalmente cafres fugidos, os mais delles Macao, e andão em serviço do Iquan*) の信仰生活の世話であったとする。また、福建では省都の長官 (布政使?) から優遇措置を講ずるとのお墨付きを得ていたが、タルタル軍の侵入後も、「従軍していた外国人たち」 (*os homens estrangeiros que vinhão no exercito Tartarico*) が神父たちの徳を吹聴し、物心両面で支援してくれたことに言及している。つまり、バレットのような流れ者が他にも存在していたのである。

最後に、四川のルイジ・プリオとガブリエル・マガリャンイスの両神父の消息はつかめないとし¹⁰⁹、アンドレ・シャビエルは進士 (*doutor*) ルーカスとともに肇慶から広西に向かったとする説と、宦官アキレス (龐天寿) とともに雲南に向かったという説を紹介している¹¹⁰。

『チナ征服史』でこれに対応する箇所は、佟養甲がサンビアシに李成棟について愚痴をこぼすところ (18章) を除けばほとんど存在しない。これから述べるように、他の章についてはフルに使っているのと対照的である。そこに著者の「イエズス会嫌い」を読み取ることも可能だろうが、宣教師の存在一般について無視しているわけではな

¹⁰⁵ 46,47年報の著者である。ちなみに、「報告」には全く記されないが、福建は47年には再び騒乱の時期を迎えていた。浙江の魯王と連携した勢力が一省を席卷し、福州は鄭彩により西暦8月に包囲された。47年報 (49年1月20日、福州で作成) にはその状況が詳細に記されている (*ibid.*, pp.347-351)。年報にはバレットへの言及はない。

¹⁰⁶ 47年報によれば、2人がいたのは建寧府である (*ibid.*, p.341)。

¹⁰⁷ 2人がいたのは延平府である。47年報はディアスの副管区長就任に言及する (*ibid.*, p.338)。

¹⁰⁸ 彼がいたのは泉州である (*ibid.*, p.339)。黒人たちの指導にあたったのも、主に彼であった。

¹⁰⁹ 2人は張献忠の配下に入り、清軍に捕えられた後、北京に連行された。47年報にはその消息が詳しく伝えられているが、これは48年5月26日付のマガリャンイス書簡にもとづくものである (*ibid.*, pp.357-365)。

¹¹⁰ 46,47年報に広西情報は記されていない。それは年報が福州で製作されたことと関係しよう。ただし、より距離の近いマカオには広西情報が直接入ってきていたはずである。進士ルーカスについては注92拙稿 pp.51-52 参照。

いし、本書にはイエズス会批判は一切出てこない。本項をあまり使わなかったのは、『チナ征服史』の関心の主眼が新王朝の出現、その支配者と被支配者の関係にあって、宣教師個々の布教活動にないからだろう。

しかし、余り使われていない本項の中に、実は『チナ征服史』のテキストの性格を規定する要素が含まれていると筆者は考えている。それについては後述しよう。

「タルタル人の信仰」(Crença dos Tartaros) (12v-13r)

ここからタルタル人の諸特性の記述がしばらく続く。『チナ征服史』では25章以下にまとめられている部分に対応している。両者の記述は重なっており、その内容はすでに紹介したとおりなので、以下では両者の違いを主に取り上げる¹¹¹。

内容は『チナ征服史』25章の前半部に相当する。『チナ征服史』では、仏教の盛衰がキリスト教の布教に連関することから、イエズス会士の布教の現況と合わせて紹介しているが、これは前項から固有名詞を省き、ごく簡単に縮めたものと見なしうる。

「平和時のタルタル人の統治」(Governo dos Tartaros na páz) (13r-14r)

『チナ征服史』では26,27章に対応する。しかし、『チナ征服史』は本項目だけでなく、他項の記述を使って2章を構成している。

「報告」では、法や官僚機構、刑事・民事裁判制度について細部が分からないとして、「ほとんどチナ人と真逆である (quasi de frecha são opposto ao Chinas)」と総括し、裁判における文書の煩瑣なやり取りの省略、スピーディな処理が指摘されるが、『チナ征服史』のように裁判官と被告の姿を絵画的に描出することはない。

それでも、『チナ征服史』にある、罪人を拘留するのに牢と鎖はあまり使わないこと、通常の罪の場合は耳に矢をつけた姿での (pregar as orelhas com hua frecha en cada huma delles) 市中ひきまわし、重罪の場合は肉体を何度も輪切りにする (fasem o corpo muitos veses em postas) といった記述は、「報告」にも見られるものである。

ついで、元官僚 (mandarins aposentados) つまり郷紳と、現職官僚 (mandarins

¹¹¹ ただし、この部分は『チナ征服史』原版と仏訳以下の開きが最も大きいところなので、これらと「報告」を比べると差がさらに大きいように見えてしまう。詳しくは異同表を参照されたい。

actoregentes)¹¹² に対する待遇、タルタル人を北京・南京にチナ人とは隔離した形で移住させたこと、辮髪を強制する際にチナ人とタルタル人を区別する標章として rabieho (rabinho の訛とすれば、小さなしっぽ) をチナ人に残すアイディアは北京出身のチナ人によるものだったことなどを述べるが、『チナ征服史』では 26 章にこれらの記述がある。

「報告」では、王朝交代にともなうこれらの変化をもっぱら淡々と述べて、それに対するはっきりした評価は見られない。あえて言えば、収賄の禁止により官僚が懐を肥やすことができなくなったという記述が、新政評価にあたるといえようか。

これに対して、『チナ征服史』は前掲の「チナとタルタルはやり方が真逆である」という一文におそらく示唆を得て、両者のコントラストを際立たせたのだろう。旧王朝における裁判の情景描写¹¹³ もそのために必要だったのである。そして、裁判の処理にいささか拙速なところがあるとする指摘以外は、完全に新体制に軍配を上げ、それが旧朝よりすぐれているばかりか、ヨーロッパ人も学ぶべきところがあるとしている。

「タルタル人の文字と言語」(Letras dos Tartaros, e Lingoagem) (14r-14v)

まず、文・武の価値が逆転したこと、にもかかわらずチナ人の反発を買わないように科挙は存続したことが簡単に述べられる。『チナ征服史』28 章の前半部に相当するが、『チナ征服史』は「報告」の他項（後出）にあるエピソードを挿入して記述を膨らませている。

文字については、日本の文字と似ているがチナ文字とは違いが大きいと述べ、話し言葉については、しゃべり方が粗野でチナ語ほど音の種類がないとする。『チナ征服史』では、文字については日本との類似に触れた後、タルタル・日本の文字の双方がチナの文字に由来すること、ヘブライ文字のように上下に点を打つこと、タルタル文字の

¹¹² 『チナ征服史』スペイン語版にもこの区別はあるが、仏訳そして漢訳 p.173 では、元・現の区別が不明瞭になってしまっている。

¹¹³ セメード『チナ帝国志』にも裁判に関する描写はあるが、『チナ征服史』の描写と共通する部分はほとんどない（『リッチ、セメード 中国キリスト教布教史』2、矢沢利彦訳注、岩波書店、1983, pp.493-503）。たとえば「審理にはほとんど時間をかけない」とするが、これは『チナ征服史』ではタルタル人の裁判の特徴ということになっている。

簡明さがはやくもアジア各地で賞賛されていることを述べ¹¹⁴、発音についてはスペイン語と同じくらい母音があるとしており、この部分については別に取材源があったようである。そして、この後に例の Pelipaovan の講釈が来る。

「タルタル人の軍事」(Milicia dos Tartaros) (14v-15v)

前半は、武器（よろい、弓、槍¹¹⁵、馬具、刀）についての具体的な紹介である。火器についてタルタル人は使用しないが、軍中のチナ人が攻城戦で用いたとする。『チナ征服史』29章では、これに武器に対するタルタル人・チナ人の態度の対照的な描写が加わる。

後半は行軍、城攻め、宿営について述べられ、『チナ征服史』30章の記述に相当するが、そこにあるヨーロッパの攻城戦との比較はない。中国人との比較についても「チナ人のように毎晩警戒を怠らず、盛んに音を立てることがない」とするだけである。『チナ征服史』はここから話を膨らませて、チナ人は280年間びくびくしながら国を守ってきたのに実際侵入された時には迅速な対応を取れなかったと冷笑している。

「タルタル人の容貌、彼らの習俗、スタイル、交易」(Feições dos Tartaros. Seus costumes, estilos, e tratos) (15v-16v)

細かな違いはあるが、『チナ征服史』31章とほぼ同じ内容である。ただ、記述の順序は違う。外見→性格→馬好き→音楽→食べ物→食器→嗜好品（小麦のケーキ、茶、酒¹¹⁶）→あいさつ→扇→民族間通婚→商売→役畜→海上交易の順だが、『チナ征服史』は外見→性格→馬好き→あいさつ→扇→民族間通婚→音楽→食べ物→嗜好品→食器→商売→役畜→海上交易の順に記述されている。また、『チナ征服史』には本項にない記述として、乾杯についてのあるタルタル人の感想（「報告」は酒を痛飲すると述べるだ

¹¹⁴ 漢訳 pp.187-188 では、このあたりが全く違った意味になっている。異同表参照のこと。

¹¹⁵ 槍については、「報告」はたんに「小さい (pequenos)」とするのに対し、『チナ征服史』の描写はヨーロッパ製のものと比較もあって詳しいように見えるが、他に情報源があったとは思われない。また、漢訳 p.192 では矛（英訳 pike を訳したもの）となっていて、文章の意味も違うものになっている。

¹¹⁶ 漢訳 p.202 では「チョコレート飲む」とする（英訳に由来）。これは『チナ征服史』の付加だが、スペイン語版は「茶はチョコレートのように贈答に使われる」である。

けだが、『チナ征服史』には欧州の乾杯の風を聞いたタルタル人がその非合理性を指摘するくだりがある)、これは欧風を批判するために仮構されたものだろう。質実の風を強調するためにローマ兵を引き合いに出し、ホラティウスの詩句¹¹⁷を引用しているのも、古代ローマを持ち出すことで現状のヨーロッパの風潮をそれとなく批判しているのだろう。また、「報告」には交易について、新王朝がマカオに積極的に働きかけ、広東に交易に来るよう促したが、マカオ側は資本の欠乏と海賊の跳梁のために応じられないでいるという記述があるが、『チナ征服史』ではマカオを扱った13章に組み込まれている。

「タルタル人の服装」(Trajo, e vestidos dos Tartaros) (16v-18v)

『チナ征服史』の中でも最も記述が細かく具体的な(特に帽子の房飾りの描写)最終32章に相当し、前半は男子を、後半は女性の服装を扱い、内容はほぼ重なるが、それぞれ微細な違いはある。

帯について、「武の気風を示そうとする人が帯に獣皮を用いる」とする『チナ征服史』の記述はないが、これもコントラストを出そうとして、『チナ征服史』が敷衍したものだろう。上着の合わせ部分をボタンで留めるという部分は、『チナ征服史』の誤訳によって意味が変わっている¹¹⁸。「報告」が麦藁帽子の値段を2テール(両)強(dous taeis e mais)とするのに対し、『チナ征服史』が「その値段2ドゥカートでダマスコ織が買える」とする。また、「報告」は女性の服装については手短に「チナの女性とさして変わらない」とするだけだが、『チナ征服史』は「髪はヨーロッパの女性のように伸ばす」(「報告」にも「髪を伸ばしてまとめていない」という記述はある)とか「フープスカートがない」¹¹⁹といった見てきたような比較をする。これらも敷衍であろう。「スペインの男でも馬に乗らない者がいるのにタルタル女性はみな馬に乗る」といった指摘もそう

¹¹⁷ 漢訳 p.199 が「1人の詩人」とするのは仏訳以降。引用はホラティウスの *Odes* からである。

¹¹⁸ 「報告」は「大人の場合、上着の左側を1パルモ分折り返すことがあり、左側を右側に重ねる時は首と右肩のところでボタンで留める」とするが、『チナ征服史』は「左側を1パルモ分折って右に重ねるか、上にくる左側の端から曲線状にボタンをつける」となっている。漢訳 p.206 はさらに異なる記述になっている。

¹¹⁹ 漢訳(仏訳)ではこの一文が落ちている。

だが、『チナ征服史』はチナとタルタルを比較する際に、常にヨーロッパの存在を意識している。

一方、「報告」ではそうした色彩が薄い。また、全体的に西洋の事例を引き合いに出すことは『チナ征服史』に比べてよほど少ないが、ここではチナ人男性への服装の強制について『新約聖書』のペテロの手紙の「しもべは主人に従うべし」、タルタル人女性の騎馬や武勇については「詩人の歌うかの名高いティルス処女たち (virgens de Tyria)」すなわちオウィディウスが歌うエウロペの侍女たち（『変身物語』）やアマゾネスを引き合いに出している。後者の女性の比喩は『チナ征服史』でも使われている。

「タルタル人の美質と悪徳」(Virtudes naturaes, e vicios dos Tartaros) (18v)

『チナ征服史』では25章の後半部に相当する。「報告」はここでは野蛮人 (gente tão incluta e agreste) であるだけにその道徳性は一層評価すべきであると一般論を述べて美質の指摘が具体的でないのに対し、『チナ征服史』は平和な時にはおだやかで、気さくだとする¹²⁰。しかし、「おだやか」は「報告」では前項にそうした記述があるし、「気さく」も「統治」の項の記述から容易に引き出せるものである。本当に追加されたのは「約束を守らない」ことについて、それが近隣のモーロ人（ムスリム）から学んだものだろうと推測し、信義の問題についてヨーロッパ人も含めて他を批判する資格はないとしているところだけである。

「チナ征服時に起きたできごととそこから類推しうること」(Cazos acontecidos nesta conquista da China, de que se pode colher melhor a sobreditta materia) (18v-19r)

ここから、また情勢の推移についての記述に戻る。本項ではまずタルタル軍が南下中に、黄河 (o rio chamado amarello) と南方のある省の川が渡渉不可能な状況にありながら、これを渡ったこと¹²¹をタルタル人は征服の正当化のための宣伝材料とし、かたやチナ人はこれを天命 (vontade de Ceo) ととらえて自分たちの帝国がタルタル人

¹²⁰ 漢訳 p.168 では「平和な時には約束を守る」となっていて（仏訳から）、意味がずれている。

¹²¹ 黄河については、ドドの率いる南征軍が順治元年十二月に孟津から渡ったことを指し（『順治実録』巻12）、南方でのもう一例とはおそらく同二年六月に钱塘江の「潮水連日不至」に乗じて清軍が渡渉したこと（『順治実録』巻18、『明季南略』巻10）を指すだろう。

のものになってしまったことを甘受したと述べる。『チナ征服史』では4章にこのエピソードが挿入されているが、天に責任を転嫁する態度への批判が付け加わっている。

その後、東西タルタル人の対立への言及をはさんで¹²²、再び不思議な現象を取り上げる。すなわち、1647年8月9日に広東で東方に通常より大きく色彩豊かな虹が現れ、翌日には土砂降りの雨の中にもかかわらず、天に「二日」(dous sois) がはっきりと現れたことを記すが、こちらについては「評判になって様々に解釈された」とするだけである。『チナ征服史』はこの話を荒唐無稽と思ったのか、征服事業と直接関わるものでないからか、とにかく取り上げていない。

「戦争の続き、その他のできごと」(Continuação da guerra, e outros successos della)
(19v-23v)

ここから再び広東の戦況に戻る。『チナ征服史』が「タルタル人とは？」について終わりのほうにまとめているのに比べて、未整理の感が否めない。しかし、このような形になったのは、情勢の記述の中にタルタル人問題を割り込ませたというより、もともとここで一旦筆をおいた後、新たな情報を継ぎ足したということだろう。

記述は官と賊の間の交渉決裂→海賊の広東来襲→タルタル側の圧勝→李成棟の広東凱旋→李、永暦のいる肇慶に出征、永暦側の勝利→広東・広西人間の内紛→永暦の敗走→梧州陥落→二人の小王の蜂起と降服→(1ヵ月後に)盗賊が再起して広東を攻撃→広東在住の漳州人の奮戦→李成棟不在中の佟養甲による防衛策の成功→マカオから来た黒人の活躍→巻き込まれたシャムの朝貢使節→4日後の海賊再来襲→再び黒人の活躍→10日後に鄭芝竜(Chinchilum)の艦隊70隻の援軍到着→李成棟、順徳で3度の攻撃→激戦の最大の被害者は人民→マカオの対応→4度目の攻撃も失敗→賊の増大→広東の警戒強化という順序で展開する。

この中で漢文史料によって事件の時日が確かめられるのは、肇慶の陥落(西暦

¹²² 主に天変地異を述べる項目にこうした記述があるのはなんとも奇妙だし、前後のつながりを全く欠き、錯簡かとも思われるが、イエズス会の2本も同じである。

47.2.23)¹²³、梧州陷落(3.4)¹²⁴、佟養甲の勝利(3.15.16)¹²⁵くらいである。また、永暦側の勝利を肇慶ではなく桂林とすると、それは4月18日¹²⁶のことであり、「報告」の流れと齟齬をきたす。「報告」の記述は李成棟の所在に沿って展開している。この時期の彼の行動を厳密に追いかけることはできないが、広西に遠征し、桂林を攻めた李成棟が広東危うしの報を聞いてとって返したということは確かである。

このうち、広東情勢に挟み込まれる形になっている(下線部)桂王関係の情報については、『チナ征服史』に永暦の肇慶入城の場面、敗北後の行方、生存・死亡説への言及があるが、「報告」にはない。この点については、他から補った可能性を考えてよい。桂王政権のもとにはアンドレ・シャビエルが随行しており、おそらくは彼による報告をもとにしてマニラに流れた情報を編集した短いパンフレットが1651年にスペインで出版されているところを見ても¹²⁷、桂王関連の情報をマカオ→マニラ経由で入手することは難しくなかったと考えられる。

一方、広東の状況については、「報告」にあって『チナ征服史』にはない部分が目を引く。『チナ征服史』には「ある国の朝貢使節が事件に巻き込まれ、一行120人中、40

¹²³「両広総督佟養甲掲帖」(中央研究院歴史語言研究所『明清史料』丙編6,p.582)

¹²⁴「粵東南詔兩郡俱入版籍殘掲帖」(『明清史料』丙編6,p.581)

¹²⁵「両広総督佟養甲殘掲帖」(『明清史料』己編1,pp.84-85)

¹²⁶錢海岳『南明史』(中華書局、2006)第二冊,p.129.

¹²⁷ Albert Chan, "A European document on the fall of the Ming Dynasty (1644-1649)", *Monumenta Serica* 35, 1981-1983, pp. 75-109. このパンフレットは「報告」より時期幅は広く1638年～1649年までを扱っているが、分量的には比較にならないほど少ない(フォリオ2葉)。一般情勢を述べた後、隆武からサンビアシへの書簡、おそらくはシャビエルの報告にもとづく広西情勢の記述、セメードによる永暦のマカオへの派遣記事が続く。一般情勢の記述については、「報告」との共通項がかなりある。1. 1640年を反乱の開始年とする、2. 1647年初頭に全国が一応平定されたとする(ただし、広東占領には言及しない)、3. 順治を12歳とし、3人のおじが補佐しているとする(ただし、どの時点で数えたものかはっきりしない)。4. コレア王の朝貢、5. 日本王によるチナ人の追放とこれに対するタルタル王の怒り(後述)、6. ポルトガルの日本使節派遣(後述)、7. 広東でサンビアシがタルタル人の虐待を受けた後、副王に厚遇されたこと、である。しかし、このパンフレットが「報告」を直接見て書かれたもののだとはいいがたい。47年初頭に15省がほぼ平定されたが、福建だけが屈しなかったとしてその後に隆武の話を持ち出し、その死後広東で紹武が即位したことを述べていて、広東平定の時期を理解しているように見えないからである。

人が死亡し、10人余りが賊の捕虜になり、残りの70人¹²⁸は救出され、本国に帰った」とするが、国は特定されておらず、生存者について「タルタル人が厚遇して帰国させた」とするだけだが、「報告」からそれが前年にやってきたシャムの使節（os Siameses que de Sião vierão o anno passado）であり¹²⁹、さらに彼らがサンビアシのとりなしで（por intercessão do padre Francisco Sambiasi）広東の両副王から厚遇されるようになったこと、そしてマカオからシャムに毎年向かう便船（embarcaçoens nossas, que todos os annos vão mercancear à Sião）で帰国したことが分かる。当時八方塞りだったマカオ（日本の鎖国、スペインからの独立に伴うマニラとの関係の断裂）にとってシャム交易はそれなりの重みを持っていたはずで、サンビアシの尽力も宣教師としての慈愛の精神だけでなく、マカオの利益に沿うものであった。『チナ征服史』はこうしたマカオの利害そのものには関心を持たないので、これらを省いたのであろう。

また、防衛に大活躍した黒人について、「報告」にはここでは「マカオから来た」とあるだけで人数を200人余りとするが、先に言及された「鄭芝竜の親衛隊300人」（2v）との関連は示されてない。『チナ征服史』は同じく黒人クリスチャン部隊であることから両者をつなげ、さらに300人いた部隊が戦死ないし自殺して（クリスチャンなのだが）、現在は広東で200人余りになったとするが、もとづくところがあるかは疑問で、300マイナス200を死者にしてしまった疑いがぬぐえない。

「報告」は四句節に豚を食べなかったことを賞賛し、死者が出なかったことを神の加護によるものとしているが、黒人たちを16章の主役にまでに押し上げた『チナ征服史』ほどには、彼らの存在を強調しているわけではない。

鄭芝竜の艦隊の来援については、その中に様々な機会に（em varias occasioens）内地に入り、漳州に行ったマカオ出身の白人（alguns homens brancos desta cidade de Macao）そして100人近くの様々な民族の逃亡奴隸（mossos fugidos・・・perto de

¹²⁸『チナ征服史』は70人が泳いで無事に逃げたとするが、「報告」は40人とし、あとの30人はタルタル軍に従って肇慶に向かったとする。

¹²⁹前掲拙稿では、シャムがどの政府を対象として朝貢使節を送ったか存疑としたが、「前年」という記述がもし間違っていたとするなら、崇禎16（1643）年に朝貢した使節がそのまま居残っていたものとも考えられる。清朝は広東を平定した時点でシャムに朝貢を呼びかけていて、この使者の存在には気づいていないかのごとくである（『粵東底定恩詔』『明清史料』丙編6, p.585）。

cento de varias naçoens e principalmente cafres) が含まれていたとするが¹³⁰、これらは『チナ征服史』には出てこないし、李成棟の4度目の出撃を一官艦隊の提督 (o geral da frota de Yquam) が制止しようとしたことも載せていない¹³¹。

「報告」は李成棟を一方の主演として描いているが、『チナ征服史』はそれ以上に彼の存在をクローズアップする。彼が中央政府の命令を聞き入れずに独断専行したことを強調し、それでも更迭されないのは、チナ人としての李の狡猾さによるものであるとする (14,16,17 章)。「報告」でも李成棟は非難されているが、『チナ征服史』は加筆によって調子をぐんと強めている。ただ、加筆の内容は具体的なものではなく、すべて敷衍とみなしてよい。同じ Li 姓であることから李成棟と李自成をむすびつけ、Li の字について珍妙な解説を試みているのも『チナ征服史』だけである。しかし、これらの描写のねらいは李成棟個人というより、「国を裏切ったチナ人」を批判することにあるだろう (皮肉にも、李は翌年に「反正」するのだが)。

なお、『チナ征服史』は4度目の出撃が失敗して賊が益々増大したというくだりで、「報告 (la relação) には真砂の数にも劣らぬと書いている」とするが、この表現が「報告」に存在する (são tantos como as areas do mar) ことを付け加えておこう。

タルタル軍来襲の報に接したマカオの状況については、議論続出のあげく「タルタル人は決して信用できる相手ではないが、彼らが望んでいるのは友好と交易であろう」という意見が優勢を占めて使節派遣まで検討されたが、交通の不安と費用の不足により断念したとする。『チナ征服史』は広東の戦いの描写と区別するためにマカオに専章 (13 章) を設けているが、その大半は「報告」の各所から集めて構成されたものである¹³²。

『チナ征服史』のクロノロジーについて付言しておけば、広東占領が47年1月20日であることから出発して、その直後に李成棟が海上に出て2月末に勝利を収め、その後広西に出征して広東に戻ったのを4月初としているが (15 章)、「報告」に記されて

¹³⁰ JS126 では、このうち黒人についての記述をすべてカットしている。

¹³¹ 艦隊の派遣については、『順治実録』巻34 順治四年十月庚午条の広東からの捷報の記事の中に出てくる施福・鄭芝豹らのことを指すのだろう。

¹³² 「報告」にないのは、マカオの苦境がインディア諸島全体の不況をもたらししているという指摘である。

いるのは1月20日だけで、あとは「報告」の記述から割り出したものであろう¹³³。事件の叙述については「報告」の流れに従っているが、広西の話は広東と切り離して載せている(11章)。地域ごとに話をまとめようとしたものだが、かえって事件の推移がとらえにくくなっている。

「東莞県の抵抗とその他の出来事」(Rezistencia da Villa de Tunquam e outros successos)
(23v-26v)

賊が立てこもった東莞をめぐる攻防戦は、『チナ征服史』では17章の後半に述べられている。そこで目立っていたのが、援軍にかけつけたヨーロッパの砲兵たちであった。「報告」でもその存在は言及されているが、この時送られた大砲と砲兵について前掲のディオゴ・バレットが広東まで携行していた6、7台(*seis ou sette pessas de bater e que Diogo Barreto fosse com ellas*)とマカオから内地にわたったカステイリヤ人、ポルトガル人2、3名(*dous, ou tres artilheiros Castelhanos e Portugueses que de Macao passarão à China*)とする。『チナ征服史』ではバレットの名前も出さず、単に「ヨーロッパ人8人から10人」が派遣されたとするが、これは大砲の台数と人数を混同したものである。さらに彼らが「マカオから数年前にチナ側を援助するために派遣された」とするのだが、「報告」にはそうした記述はない。明朝政府の要請を受けてマカオから砲兵隊が数度送られており、なかでも1630年にイエズス会士ジョアン・ロドリゲスが随行した砲兵隊はよく知られていたもので¹³⁴、それとここの助っ人外国人を結びつけたものだろう。しかし、バレットがそうであったように、彼らと呼んだのは北京の宮廷ばかりでなく、地方でもスカウトされた事例があることが分かっているので¹³⁵、このリンクに根拠はない。一方、「報告」はこの時のヨーロッパ人の命知らずの勇猛ぶりが広く知られるにいたったとするが、『チナ征服史』にはそうした記述はない。

¹³³『チナ征服史』は「報告によれば副王は47年4月初に戻ったとある」とするが、「報告」にそうした記述はない。しかし、2人の小王の擁立と降服の話の後に、「1ヶ月もしないうちに」盗賊が広東に再び来襲したとする。この記事が李の広東帰還を4月とする推測の根拠なのだろう。

¹³⁴Charles Boxer, "Portuguese military expeditions in aid of the Mings against the Manchus", *T'ien Hsia Monthly*, 7-1, 1938, pp.24-36.

¹³⁵拙稿「サンビアシの旅」pp.44-46.

ちなみに漢文史料によれば、張家玉が東莞を陥落させたのは三月十四日（4月18日）、敗走したのは同十七日（4月21日）のことである¹³⁶。

李成棟はゲリラ戦の根を絶つために周囲の集落の破壊を命じたが、これに不満な佟養甲はその思いをサンビアシに吐露した。曰く「叛徒の張（張家玉）が海賊の長とすれば、副王の李（成棟）は陸で盗賊行為を行っている。互いに悪事を働いた結果、広東一省の破壊は止まるところを知らず、皆が我々に対する怒りから武装している。私は命令とあらば死もいとわぬが、私が死ねば同僚の李はこれ以上のことをやるだろう。」『チナ征服史』でサンビアシが出てくるのはこの箇所だけで、彼に語る佟養甲のせりふもほぼ同じだが、二人の張（張家玉と張献忠）李（李成棟と李自成）の「暗合」の指摘は「報告」ではなく、『チナ征服史』の言葉遊びに過ぎない。

さて、本項は後半部で急展開を示す。広東の話をしていたのに、急に一官のその後へと話を転じるのである。鄭芝竜の艦隊が話に出てきたついでにということなのだろうが、いかにも唐突な印象である。『チナ征服史』では一官の動向がまとめて述べられているので、こうしたことはない。

述べられているのは、『チナ征服史』7章のものとはほぼ同じ内容である。鄭芝竜が北に送られる途中に告発が相次ぎ、その罪状のひとつが「サルというあだ名の南京副王」がかつて投降を促す書簡を送ったのに対して、これを小馬鹿にして「盗賊・蛮人」に屈するつもりはないと返していたことだった¹³⁷。さらには彼が禁制の銀山開掘を行ったと告発された。これらに対して、鄭は「書簡は彼を陥れようとした人間の手になるものであり、使われている印鑑が違うのがその証拠である」と主張し、銀については日本から輸入したものであると弁明した。

『チナ征服史』には、順治帝自身がこの手紙を蒸し返して詰問した、銀の出所が日本だけでなくメキシコやペルーにあったといった「報告」にはない記述があるが、脚色であろう。

最後に、要路への賄賂が効いたこともあって当座は隆武王（o Rey Lumvu）によって

¹³⁶ 李君明『明末清初広東文人年表』p.154

¹³⁷ 洪承疇が投降勧告の書を同郷人の誼で鄭芝竜に送ったという話は、たとえば『南疆逸史』巻54に見えるが、これによって芝竜が投降を受け入れたとしている。

与えられた「国公 (Guecum)」の地位は新王朝のもとでも保証されても、いずれはその地位を首とともに剥奪されるのではないかと推測しているが、『チナ征服史』はさらに一歩進んですでに死亡しているのではないかという説を紹介する（実際には鄭芝竜は1661年まで生き延びる）。

主人が新王朝に降った今、配下の軍もタルタル軍に組み込まれ、前記の艦隊の他に騎兵400が広東に派遣され、ついで息子も大艦隊を率いて広東に向かうだろうとする。鄭成功は投降した父とは袂を分かったので、これは誤りである。この後再び一官の話に戻って、マカオでは海盜、あるいはマカオと日本との交易が断絶した後も日本との交易に利をあげている存在として多年にわたって注目されてきた人物だと述べるが、一官がそこまで上り詰めた過程には触れない¹³⁸、『チナ征服史』のように、鄭成功のバタビアでの「修行」にも言及していない。

「広東、広西、他省におけるタルタル人の軍事活動」(Cazos e variedades das armas dos Tartaros nas Provincias de Quantum, e Quansi e outras da China) (27r-v)

李成棟の再三にわたる出陣にもかかわらず、賊の勢いは増すばかりだった。チナ人たちは次第にタルタル人の弓矢を恐れなくなり、槍・銃・大砲を有効に利用して優位に立ち、タルタル側は敗北の報を隠しきれず窮地に追い込まれたとする。そんなところに海南島に遠征していた軍が戻ってきたとするが、具体的な時期は示されていない。

漢文史料によれば海南島の首府瓊州が陥落したのが四月三日(5月7日)のことであるから¹³⁹、それ以後ということになる。『チナ征服史』では、海南島と一連の広東の記述を別に行っている(14章の初め)、前後関係がわかりにくくなっている¹⁴⁰。真珠などの産物を紹介する中で「チナについて書かれた本」¹⁴¹に言及しているので、ここでは他の材料も使われている。

¹³⁸ マルティニの『タルタリア戦記』には言及があるが、『チナ征服史』の記述とは異なる。後者の取材源は独自に考究するべき問題である。

¹³⁹ 「両広総督修養甲掲帖」(『明清史料』丙編6, p. 594)

¹⁴⁰ なお、漢訳p.107は「海賊の問題を解決する前に海南島を征服しようとした」とするが、仏訳で付加されたものである。

¹⁴¹ 漢訳p.107は「中国に関する報道」となっている。海南島の産物の記述はセメード『チナ帝国志』に見える(前掲邦訳p.278)。

「海南島で我らが神父に起きたできごと」(Sucessos dos nossos Padres na Ilha de Aynam) (27v-28r)

タルタル軍の侵入が海南島の布教に及ぼした波紋を扱っている。イエズス会は1633年から海南島布教を開始していた¹⁴²。ここでは、当初はチナ副管区に所属していたが、のちに日本で殉教することになる巡察師アントニオ・ルビーノの指示で6年前に日本管区に所属替えとなったと説明されている。その主な理由を「チナ副管区のプロクラドールからの物資支援が容易でなく、その一方でトンキンの神父たちに毎年送られる船や物資の関係上、日本管区に所属するほうが便利だから」とする。中国領でありながら、トンキンとの連絡のよさから、日本管区の東南アジア布教の中に位置づけられたのである。

47年の時点で島には上長ベント・デ・マツス、アンドレア・ルベッリ、ミカエル・ボイム、ジョアン・ヌネスの4神父¹⁴³が2つの住院に分かれて布教活動を展開していた。そのうちマツスのいるほう(儋州)が掠奪にあったが¹⁴⁴、タルタル軍の司令官が神父を哀れんで20両の寄進をしたと述べ、取材源は広東に戻った司令官から話を聞いたサンピアシだとする。この部分は『チナ征服史』には存在しない。

「タルタルの進撃とそれに対する抵抗(続き)」(Continuação de alguns sucessos de entradas, e rezistencias) (28r-31r)

舞台は広東に戻るが、広西や北京・南京関連の情報が間に入り込み、それが前後との脈絡を欠いている。

李成棟がまたしても出撃して失敗したことを述べた後、広東省内の惠州(Hoeicheu、『チナ征服史』のHuchicheuはその訛)で明室の血を引かない者が王号を称したこと、広東から逃げ出した王族(Vanfu ou regulo 前者は王府の音写)が寺に避難した後、

¹⁴² Jesuítas na Ásia 49-V-11 "Anua da V.Provincia da China do anno de 1633", fl.99v.

¹⁴³ マツスがもっとも古株で1635年来島し、途中コーチシナに赴任しているが、44年に島に戻っていた(Pfister, op.cit., pp.209-211)。あとの3人はいずれもこの年に海南島に着任しているが、マツスの指示でやがてトンキンに向かった(ibid.,pp.329-330)。

¹⁴⁴ フィステーが紹介するDunyn-Szpotによれば、海南島を襲ったのは「Coxinga(鄭成功)の艦隊」であり、マツスはその首領と福建でかつて関係を持っていたことからタルタルとの間の和平交渉を買って出たが、かえって抑留されたという(ibid.,p.211)。

当局に出頭したことを述べる。いずれも『チナ征服史』では広東攻防と切り離して12章に載せられているが、王族がタルタリアに送られたとする『チナ征服史』の記述は「報告」にはない。しかし、別にもとづくところがあったとは思えず、おそらく推測で付け加えたものだろう。

その後、広西で桂王と Simkiamvan が争うことなく両立していたが、やがて対立するようになり、そこへ数ヶ月前にタルタルの大カピタン (grande capitão) が広西に向かったとする。前に見たように、「報告」はすでに Simkiamvan を登場させ (7r) ついで肇慶攻防 (19v)、別の2王の擁立¹⁴⁵と降服 (20r) に触れており、広西情勢の紹介はこれで3度目ということになる。『チナ征服史』はそれを11章にまとめ、さらにその後の桂王と Sinhianuan の消息 (両王の死亡説と桂王の生存説) に触れるが、これは「報告」には存在しない。

次に、「様々な書類や布告などによれば、かつての都であった北京・南京が都の地位を喪失して一介の都市 (cidades particulares) に格下げとなり、大タルタリアが都とよばれることになった」という奇妙な記述が続く。たしかに清朝の旧京 (瀋陽) は保たれていたが、順治が北京に移ったことは「報告」にも書かれており、2つの記述の間に整合性はない。ここでいう「書類や布告」がいかなるものなのかも分からない。ただ、シャールの著述には前掲の「コレア王」との会見の話の少し後に、ドルゴンによる新都建造計画への言及がある¹⁴⁶。後述するように、この「報告」は北京からの情報も得て書かれているので、あるいは情報源はそこかも知れない。この記述は『チナ征服史』にも踏襲されている (26章)。

さらに、南京で47年に会試 (geral exame de Letrados) が行われて、300人の進士とそれに倍する挙人・生員 (tresentos Doutores, e em dobro os Licenciados, e Bachereis) が生まれたことを述べ、南京で試験が行われた理由を、シナの学問や文人を軽んじていたタルタル人は前代の儀礼的慣習を踏襲することで妥協したものの、さりとて北京ではやりたくなかったからか、あるいは南京の情勢が安定して騒乱の恐れがないからだと推測している。47年の科挙は「加科」(進士登第者298名) でやはり

¹⁴⁵ この2王が誰なのか明らかにしえない。

¹⁴⁶ Bernard, op.cit., pp.184-187. シャールは自らの諫言により、ドルゴンが計画を中止したとする。

北京で行われているのに、なぜ「南京で」と書かれているのかは分からない。『チナ征服史』は科挙実施の記事を28章に取り入れているが、人心収攬のためと述べるだけで南京で行われた理由については省いている。

この後に文の副王¹⁴⁷が属僚に読み書きは不要と言った話、ある書齋人に対してタルタルの軍人が立ち退きを命じ、従わないなら大量の蔵書をタバコの巻紙 (canudos de tabac) に使うぞと脅したエピソードを続けたのは、科挙の実施と一対をなして新王朝における「文」の位置づけを示そうとしたものだろうが、科挙の話とこれらのエピソードの間にさらに旧王朝の文重視と順治の武重視の記述を挿入した『チナ征服史』ほど明示的ではない。

この後、広東の占領行政が概ね順調に行われ、訴訟も迅速に処理されたことを述べ、その事例として、訴状を取り上げなかった官僚を李成棟が叱責してその処理を促した話を取り上げている。「報告」はすでにタルタル人の迅速な裁判処理に言及しているが、その記述はこうした事例をもとにしているとみてよい。『チナ征服史』はこの話¹⁴⁸をより一般化して、タルタル人の政治全体の特徴として強調している。他の箇所では「似非タルタル人」として批判してきた李成棟をここではローマのカトーの清廉に比して持ち上げているのも、そのためだろう。

ついで、両副王がかつて総督の治所であった肇慶に移ろうとしたところ、広東の人民の嘆願により思いとどまったが、やがては治所を移すだろうとの推測を述べた後、武器を鍛える音が夜も止まない、8歳以上の者も武器を携行しなければならないほど騒然とした状況にあり、武芸を重んじた両副王が教練を強化したこと¹⁴⁹が述べられる。

¹⁴⁷「報告」では南京の話に続けて「この省都で・・・」としている。そのまま読めば「南京」ということになるが、『チナ征服史』では広東の話としている。地方行政に関する話の取材源がもっぱら広東にあることからして、『チナ征服史』の解釈でよいのかも知れない。

¹⁴⁸李成棟の台詞として「以前のチナの法廷では、裁判で1000ドゥカート勝ち取るために2～3000ドゥカートを要した」(この箇所の漢訳p. 183は誤訳)と具体的な金額まで言わせているが、これは創作であろう。

¹⁴⁹「報告」では、「矢2本ないし弾2発が命中すれば2タンガ (tamga アジアにおけるポルトガルの貨幣単位) 相当、1発なら1タンガ相当の褒賞を取らせる」とあるのに対し、『チナ征服史』では「3発命中で4レアル、2発で2レアル」としているが、これは適当に改変したものであろう。3発外した時の措置は同じ記述である。

『チナ征服史』は武を扱った29章にこれらの話を組み込み¹⁵⁰、ここでも広東ローカルの話了一般論に転化している。

最後に、数日前に朝廷から広東に使者がやってきて、両副王に褒美がもたらされたことを記すが、『チナ征服史』(28章)では使者の派遣は「47年の8月」に行われたとしていた。「報告」の記述時点の推定から、広東—北京間の距離を引き算してはじき出したものだろう。

「マカオ市と住民についての情報」(Algumas novas a cerca da Cidade de Macao e dos seus moradores) (31r-32r)

広東の両副王はポルトガル本国のジョアン4世が対日交易復活のために使節を派遣したことを知り、スペインからの独立により断たれたマニラとの交通再開を見込んで、マカオとの交易復活に期待を寄せていたとする。そのために当局は優遇措置を講じた。「チナの政府 (governo sinico)」の時代にマカオに入った船舶への課税 (mediçoens dos barcos) はサンビアシの請願により免除されていたが、新政府もマカオの困窮に配慮して同様の措置を取ったとする。ここで言う「チナの政府」とは南京の弘光政権を指しており、サンビアシの請願とはマカオの使節として南京に向かった際に行われたものである¹⁵¹。さらに、修養甲が自発的 (de seu moto) にマカオの商人が広東に赴くことを許可する命令書 (chapa) を発したとする。

ちなみに、漢文史料によれば、順治四年五月三日(6月5日)修養甲がマカオのポルトガル人の広東での交易を認めるよう上奏し、これに対する八月九日(9月7日)の戸部の議復は「商人載貨下澳貿易」のみを認めるものであって、ポルトガル人の広東行きには言及がない¹⁵²。上の記述と矛盾するが、あるいは広東当局の裁量で先行して交易にゴーサインを出していたのかも知れない。とにかく、広東当局がマカオとの交易に積極的だったことはここからも確かめられる。おそらく修養甲に交易の再開を示

¹⁵⁰ 治所移転の問題については触れない。

¹⁵¹ 拙稿「サンビアシの旅」pp.49-55.

¹⁵² 吳志良・湯開建・金国平主編『澳門編年史』(広東人民出版社、2009)第2巻 pp.532-534. ちなみに6月5日条の上の2月初条に「畢方濟(サンビアシ)が桂林に行つて西洋銃を製造した」とするのは誤りである。

唆したのは、前出のサンビアシであろう。

次に、チナのマンダリンに砲手としての才能を買われてマカオから内地に入ったヨーロッパ人4、5人を両副王が厚遇したことを述べた後にまた黒人の話が出てくるが、ここでは彼ら逃亡奴隷をタルタル人が全く評価しなかったとする。広東で餓えや病気のために40人、賊との戦闘で20人が死に、100人近くが困窮のために「漳州の元の主人たち (seus senhores)」の処に戻り、残る20人は「かつて漳州で神父たちから得ていた」と同様の物心両面の支援を広東の3神父から得て信仰を維持しているとする。足し算すると180人となり、『チナ征服史』で大活躍した黒人部隊の200という数に近く、漳州からやってきたともあるが、こちらは「主人たち」とあるのでおそらく別の存在であろう。『チナ征服史』は紛らわしいと思ったのか、この話を取り上げていない。とにかく、ヨーロッパの砲兵隊にしても黒人奴隷にしても、これまで知られていた以上に内地に入る者がいたことが分かる¹⁵³。

「賊が新たに広東に仕掛けた攻撃、王国内で起こったその他の出来事」(Sucessos de hum assalto que de novo fizerão os ladroens em Cantão; e de outros cazos acontecidos no interior do Reyno) (32r-35v)

1647年8月4日午後5時に広東前面に賊の艦隊が出現し、翌日から戦端が開かれて¹⁵⁴以後の出来事を述べるが、これは『チナ征服史』の19～21章にほぼ該当する¹⁵⁵。まず2つの要塞をめぐる攻防が記される。前者について、賊に奪われた後通報を受けた佟養甲が奪回を図ったが、犠牲者は増えるばかりだったとする。この要塞が結局どうなったのか分からないが、『チナ征服史』に「この報告では言われていないが、海賊はこの後要塞を出たと思われる」(p. 234)とあるのと符合する。

事態の打開をはかるために佟養甲が賊の首領(前掲の陳子壮のこと)を屈服させよ

¹⁵³ 46年報には延平(当時、隆武がいた)に黒人部隊がいたことを伝える(Araújo, op.cit., p.329)。

¹⁵⁴ 漢文史料では七月五日(8月5日)に陳子壮が拳兵して広東を攻撃したとする(『明末清初広東文人年表』p.156)。

¹⁵⁵ 微細な違いはあり、「報告」は賊がタルタルの帽子を脱ぎ捨て紅巾(toalhas vermelhas)をつけたとするとところを、『チナ征服史』は黄色の縞のマントをつけ、チナ人常用の同じ色の頭巾をつけたとしている(p.232)。

うとして、その兄弟やいとかさらには郷紳たちの身柄を拘束することで圧力をかけ、結局これらを殺したこと、タルタルの服を着用していない住民の処刑、帰還した李成棟が人民の解放者 (liberador do povo) として市民に迎えられたこと、内通者の詮議、桂王¹⁵⁶ が派遣した将官が拷問にも口を割らず、妻子の死を齒牙にもかけなかったことなどを『チナ征服史』は受け継ぎ、無辜の者たちをも巻き込んだ修養甲や詮議に対してあっさり口を割り、この機会に誣告によって報復を果たそうとするチナ人（「報告」には「居民は沈黙を守っていた」とあるだけである）に対する批判を加えている。これは著者がローマのカトーにまで比したチナ人将官の泰然自若とした態度とコントラストをつけるためでもある。

「報告」は、次に広東の騒乱が福建に波及したとして、タルタル風に髪を切ることを潔しとしなかった一官の息子 (filho de Yquan) が沿海の土地を占領し、そこに魯王 (o regulo Luvam) が合流、即位して現在「半年」になる (foi coroado e governou meyo anno) とする風評を紹介する。前に「一官の息子がタルタル軍を救うために広東に向かう模様である」と述べていたのと矛盾するが、記述を整理しないまま、書き足したものであろう。

また、浙江で監国の位に即いた後、清軍に攻められた魯王を福建に迎えたのは鄭成功ではなく、おじの鄭彩である。魯王と隆武の間柄は微妙であり、隆武の年号を奉じる鄭成功との関係もそうであった。ここでいう即位が皇帝を意味するのであれば、魯王は監国でしかないし、監国となったのは1645年なので、「半年」にも合わない。これはおそらく連絡の不通に起因するものだろう。かつて福建とマカオはサンビアシを通じてかなり深くつながっていたが¹⁵⁷、彼が広東に行ってから、両者の連絡は取れなくなったのだろう¹⁵⁸。そのことを示唆する記述が次項に出てくる。

『チナ征服史』はここでも他地方の話が混じるのを嫌って、福建情勢の話をも別の章に置いている (12章)。そして、「報告」に魯王が即位して半年とあるのに着目し、それが清の福建制圧後であるはずがないことから、魯王は清に倒された唐王 (隆武) と同

¹⁵⁶ 『チナ征服史』漢訳 p.145 が「桂王の最後の冒険については後述に譲る」とするのは誤り。実際、この後に桂王の話は出てこない。

¹⁵⁷ 拙稿「サンビアシの旅」pp. 56-63 参照。

¹⁵⁸ 逆に福建で作成された 46,47 年報には、広東の情報は出てこない。

一人物だろうと推測するが、福建は再び騒乱状況に陥っていたのだから、これはむしろ誤りである。

「報告」はついで広西における桂王政権の梧州 (Ucheu) 回復¹⁵⁹に触れ、明室の末裔が擁立された広東・広西・福建の3省のみが今も不穏な状況にあると述べて締めくくる。『チナ征服史』は梧州回復¹⁶⁰を桂王について述べた11章に置くが、その後に「報告」にはない桂王死亡・生存説を紹介した後、わずか4年で征服をほぼ完了した¹⁶¹順治をアレクサンドロスに比している。

「北京からやってきた信頼すべき信者がもたらした情報」(Algumas novas particulares dadas por hum Christão fidedigno. De Pêkim veyo a Cantão) (35v-37r)

北京から来た信者とは、ある異教徒の大官に随行して7月にやってきたマテオスである。彼は広東の神父たちを教会に訪ね、ここまで述べられてきた情報を確認するとともに、北京ははじめ彼が道中に会った各地の神父たちの状況を伝えた。こうした中国人信者の存在はイエズス会の記録になかなか現れないが、彼らが各地に分散している教会の間の連絡役を務めていたのである。

まず、彼は順治とその統治について「年齢は12、13歳¹⁶²。色白でフラマン人(framengo)のようであり、文武の補佐役は有能で、人民は大切にされ、各地に派遣された官僚たちもチナのマンダリンに比べてはるかにすぐれた政治を行っている」と述べる。『チナ征服史』はこのくだりを26章に組み込んでいるが、順治と統治に対する全体的な評価もおそらくはこの記述から出発したものだろう。

しかし、「報告」がその後、順治のシャルルに対する厚遇がマカオからの支給が3年途絶えている北方の神父たちをも支えていること(明朝がシャルルに与えた土地の地

¹⁵⁹ 漢文史料によれば、同年七月(西暦8月)のことである(『南明史』第二冊 p. 136)。

¹⁶⁰ 確証がないので全面的に信用できないとしている。

¹⁶¹ 「報告」の最初のほうに出てきた「征服に3年数ヶ月を要したとする記述」にしばられ、ここに「3省は今なお不穏」とあるのを見落としたのだろう。

¹⁶² これは1647年時点で12.13歳ということである。順治は1638年の生まれなので、実年齢より高く見積もられている。『チナ征服史』はこの限定を見逃し、シナ侵入時点(1643年末か44年初)で12歳未満(仏訳以降は「10ないし12歳」とする)としたために、さらに実年齢とかけ離れることになった。

代が上がったのでこれを返上しようとしたところ、順治はこれを受け取らずかえって地代を免除した)を述べていることから分かるように、順治への好意的な見方は、多分に彼のキリスト教会に対する態度に由来しているのである。

信者が道中出会った神父たちは戦乱の余波もあって口々に窮乏を訴え、中には布教地を変えざるを得ないものもいた。最も悲惨だったのは江西にいたグラセッテで窮乏の余り亡くなったとする¹⁶³。全国の布教概況の項ではまだ存命ということになっていたが、ここに最新情報が届いたことで訂正を加えたかっこうである。有名な信者ルーカスと神父シャビエル(いずれも桂王に仕えていた)の消息は不明だが、どうやら無事でいるらしいとの情報も得ている。

以上が信者から得た情報だとして、次に全国の概況の記述に移る。交通は回復しつつあるが旅行にはまだ危険が伴い、とくに河川には賊が横行して掠奪を働いているとする。したがって、マカオと北方の神父たちとの連絡はとりづらい状況にあったが、南方各地との間はまだましなほうで、とくにサンビアシが隆武の招聘で福建に行っていた時は連絡が取れていたとする。

ここで話はサンビアシのことに転じて、彼が隆武のもとから広東に赴き、そこでは王国の四大人の1人(huma das quatro maiores deste reyno)として重用され、マカオにも貢献したとするが、具体的には広東―マカオの交易に彼が果たした役割を指すのだろう。

「報告」はここで中締めをして、「ここまでタルタル人のチナ帝国征服について確実な情報にもとづいて述べ、不確かなことや瑣末なことは書いていない」とし、チナ人の余りにも急速な服従が外国人にも大きな衝撃を与えたと述べて、周辺諸国の反応に話題を転じる。

「大チナの征服、タルタル人への臣従と近隣諸国の反応」(Como tomarão esta conquista, e vassalagem de grande China aos Tartaros; e como fallaram e discursarão sobre ella as nações vizinhas) (37r-38r)

¹⁶³ マルティニは「盗賊に襲われて亡くなった」としており(注102)、話が少し違う。

まず、タルタル人が東西南北の4グループに分かれると指摘し¹⁶⁴、これに接する隣国「コレア王」の北京への朝参に触れた後、朝鮮と海を隔てた日本、チナの南方のトンキン王国に言及し、これらの国の人々は色白で顔つきはチナ人風ですべてがチナに朝貢するが、日本だけは「生来の傲慢のゆえに (levado de sua natural soberba)」朝貢しないとする。

ついで、日本とトンキンは彼らが真の文字 (letras, que elles chamão verdadeiras) と呼ぶ漢字に代表されるチナの文化を尊重しつつも通俗の文字と言語を有すること、「学位試験」(os exams e os graos)は漢字によって行われること(科挙が行われているのはベトナムだけだが)、両国の言語は文字に対応して雅語と俗語では天と地、ギリシア語とラテン語ほどの違いがあり、いずれにおいてもチナ人はその文化的洗練のゆえに尊敬されていたとする。ここで、日本とトンキンが並べられているのは、同じくイエズス会の日本管区に属しながら、鎖国下にあつて宣教師を送り込めなくなっていた日本に比べて、新たな布教地(1626年にイエズス会が布教を開始)としてトンキンが浮上してきたことを示している。これらの記述が『チナ征服史』にないのは、その関心があくまでチナ人とタルタル人の関係にあるからだろう。

「報告」はついで、チナ人だけが国を出て現地に土着し、マニラ、日本、コレア、トンキン、コチンチナ、チャンパ、カンボジア、シャム、パタニ、マカッサル、ソロル、スマトラ、ジャカトラに展開し、その大半が漳州人(=福建人)だと述べ、植民者は10万人を越えるとする。イエズス会は東南アジアの各地で現地に土着した日本人との交渉を持っており、彼らの存在を軽視していたわけではないが、日本人の海外渡航が禁じられた今、中国人の「一人勝ち」になっていたことを述べたものだろう。

「報告」は、かくも海外に勢力を張っているチナ人の本国がいともあっさりとタルタル人のくびき(jugo dos Tartaros)に屈したことに周辺諸国の人々がいぶかっていると、その個別例を以下に示す。一方、『チナ征服史』はそれと同時に海外のチナ人の

¹⁶⁴「報告」はこのうち北のタルタル人が征服の主体であるとするが、『チナ征服史』は東と北だとする。しかし、これは他に取材源があったのではなく、筆のすべりであろう。「その後、対立を克服して一致団結して征服に当たった」とするのも「報告」にはない。満洲とモンゴルの連合を考えれば間違っていないが、まぐれ当たりだろう。トルコを前にしてのキリスト教界の分裂が引き合いに出されているが、著者のねらいはむしろこちらを批判することにある。

屈辱感を強調し、メキシコ在住のチナ人の例を挙げる。

「チナ人がタルタルの征服に甘んじたことへの日本人の嫌悪」(Quão mal tomarão os Japoens deixarem se os Chinas senhorear dos Tartaros) (38v-39v)

「報告」が周辺諸国の反応の具体例として挙げるのは日本とベトナムで、本項ではまず日本における反応を述べる。日本には数千のチナ人が在住していたが、征服の報を聞いた日本の王は彼らを国外追放とし、今後は交易に訪れることのみを許可する命令(faxaque)を発し、そこには理由として、故国と王に不忠であり無抵抗のまま外国人に国を委ねたことが記されていたとする。これによって、多くのチナ人は妻子を残して国外に出るしかなかった¹⁶⁵。そして、辮髪、タルタル風の衣装をまとった者(rapados à Tartara, com vestidos e trajos contrafeitos)は来航自体を禁じられた。

一方、これを聞いたタルタル人は日本を懲らしめようという動きを見せるが、それを先導していたのが2人の副王を筆頭とする広東の武将たち(os dous V.Reys da Cidade e Provincia de Cantão e os seus capitaens)だったとする。しかし、それはポーズに過ぎず、いかに「本物のタルタル人(os verdadeiros Tartaros)」が勇敢であれ、海戦の経験もない彼らに戦う気はなかったとする。

幕府が中国の王朝交代に警戒感をあらわにし、とくに辮髪の商人の出現に目を光らせていたことは確かだが、中国人全体を追放とした事実はない。ただ、明朝が滅んだ1644年にその報が長崎に入ってもなく、9月にマカオから来航したジャンクに中国人クリスチャンが乗り込んでいたことが発覚して、それをきっかけに長崎の中国人全体が詮議を受けるという事件が発生していた。そのジャンクはマカオから出航したもので、当時マカオと関係を深めていた鄭芝竜の配下の者もその遣船に一枚かんでいた¹⁶⁶。おそらくはこの話が捻じ曲げられて伝わったのであろう。これを見ていたオランダ人はこの事件をきっかけに中国人が日本から追放されるのではないかと期待していたが¹⁶⁷、そうしたことはならなかった。

¹⁶⁵ 余りに急な命令であったためにこの時は武器などの禁制品の持ち出しが許されたとする。『チナ征服史』スペイン語版もその通りだが、仏訳以後は逆に輸出が禁止されたとしている。

¹⁶⁶ 『オランダ商館長日記』訳文編8下、pp.65-72,93,94,97-100.

¹⁶⁷ バタビア総督から本国の17人会に送られた1645年1月17日の一般報告に一官の配下が逮捕

広東の両副王の憤激も、すでにマカオと日本の交易が途絶えていることや、広東制圧の1647年の時点で中国と日本の交易関係は平常化しつつあったことを考えると奇妙である。しかし、「報告」は彼らがマカオとの交易回復の先に日本を見ていたことを示唆しているもので、広東と日本の取り合わせがトンチンカンというわけではない。『チナ征服史』はさらに順治が日本に出征する可能性を云々しているが、明らかに風呂敷の広げすぎである。

ついで「1年半前に一官（鄭芝龍）が日本に援軍を請う使者を派遣したという噂があるが、それは日本の王に断られたらしい」と乞師に言及し、一官つながりで隆武帝の消息に触れ、清軍に敗走後身を隠したとも、あるいは落命したとも言われていて諸説さまたげと述べる¹⁶⁸。先には死亡説を有力視していた(2v)のといささか矛盾するが、『チナ征服史』(8章)ではこちらの両説併記のほうを採用している¹⁶⁹。

「トンキン、コチンチナ人がチナ人の屈従にどう反応したか」(Como discursarão os Tunkins e Cochinchinas sobre esta sugeiçam dos Chinas) (39v-40v)

「アンナンまたはトンキン王国」から60年前にコチンチナが独立し、現在では孫の代になっているが、その支配者を王と呼ぶことはできないとする¹⁷⁰。トンキンとコチンチナには多くのチナ人なканずく漳州人がやってきていたが、トンキン人もコチンチナ人も故国を守ろうとしなかったチナ人の臆病さにひどく驚いていた。そこへ日本から追放されたチナ人が大挙してやってきたが、トンキン王には名誉の観念がなく、チナ人を受け入れしほりとするだけしほりとした。こうした王の姿勢のためにトンキンに行こうとするマカオの人間は少ないとする。マカオとトンキンの関係は交易に布教が随伴していたが、トンキン政権は禁教へと時に踏み込みながらそれをマカオとの駆け

されたことを報じ、これを機会にシナ人が日本を避けて台湾に交易に来るのではないかとの希望的観測が述べられ、同年7月9日の報告では「シナ人が去れば、日本政府が我々によるジャンク船の拿捕を見逃してくれるようになるのではないか」と述べている(VOC1055 f.3v,1057 f.7v)。

¹⁶⁸ 隆武生存説には、46年報も言及している(Araújo, op.cit.pp.291-292)。

¹⁶⁹ 仏訳以後は「長期間抵抗したらしい」とあいまいな表現になっている。

¹⁷⁰ 阮潢から数えて3代目の阮福瀾の時代(1635-1648)であった。

引きに使っており、これにマカオ側は不満を持っていた¹⁷¹。

イエズス会士の立場からすれば、むしろ布教が重要であり、18年間¹⁷²の布教の間で信者は増大して15万を超えていること、2年前に海南島沖で神父たちを乗せた船が難破して6人の神父が亡くなったことを伝える¹⁷³。後者については、船の沈没記事の後に日本管区で銀が不足し、これにかわる財源確保が喫緊の課題となった時によりよく当地在住の日本人信者パウロ・ルイズ (Paulo Roiz)¹⁷⁴の支援を得たことを記している。沈没した船によってイエズス会がトンキンとの交易に関与していたことが伺える。

一方、コチンチナの支配者は当初、日本から来航したチナ人を受け入れなかった。理由は日本同様「チナ人がタルタル人に服従し、タルタル風に髪を剃ってやってきたから」だった。しかし、ここからの対応が違った。チナ船は河口から2レグアの距離にある絶好の船着場であるチャンペロ島 (ilha de Champello クーラオチャム) での投錨を余儀なくされたが、賄賂を使って (ここでオウィディウスの文句—munera, crede mihi, capiunt hominesque deosque「私を信じよ、贈り物は人にも神にも効く」¹⁷⁵を引用) 結局は交易に成功した。『チナ征服史』はコチンチナの対応のみをとりあげて、トンキンについては触れない。

「他の民族や土地における反応」(O que succedeo nesta mesma materia em outras nasçoens e terras) (40v-41r)

チャンパ、カンボジア、シャム、パタニ、ソロル諸島、カステイリア人 (マニラのスペイン人)、オランダ人それぞれの反応があったが、「マカオと日本の断交から8年間でかつてない」ほどの数のチナ船が各地に入港するという事態は彼らにとって歓迎

¹⁷¹ Isabel Augusta Tavares Mourão, *Os Portugueses em terras do Dai-Viêt. 1615-1660*, Macao, 2005, pp. 263-266.

¹⁷² トンキン開教は1626年なので、数字が正しければ44年時点での話となる。

¹⁷³ マカオから出航した船に乗った7人の神父のうち、海南島沖で6人の神父が亡くなったのは1646年2月25日のことである。うち4人はトンキンへ向い、3人は海南島に留まる予定であった。Antonio Cardim, *Batalhas da Companhia de Jesus na sua gloriosa provincia do Japão*, Lisboa, 1894, p. 99.

¹⁷⁴ オランダ人とも交易をしていたトンキン在住の有力な商人和田理左衛門のことである。永積洋子「17世紀中期日本・トンキン貿易について」『城西大学大学院研究年報』8, 1992, pp. 2-46.

¹⁷⁵ *Artis amatoriae* L.3.

さるべきものだった。その貿易の推進力であった漳州船数ダース (*muitas duzias destas somas dos Chincheos*) よりも「我々の船一隻 (*hum pataxo nosso*)」のほうが高価値である、なぜならポルトガル人が広東で注文していた織物はその品質のよさでかつて日本商人に好まれていたからだと述べ、チナ船の横行に対する悔しさをにじませる。ここで広東製織物が強調されているが、日本への輸出が不可能になっただけでなく、戦乱によって広東市場自体が不振に陥っていた¹⁷⁶。この点ではマカオだけでなく、台湾のオランダ人たちも同様の苦境に置かれていたのである。

「マカオ市と住民のチナ人の反乱への反応」(*Como se houve a Cidade de Macao e seus moradores nestas guerras e revoltas dos Chinas*) (41r-43r)

ここでは、まずポルトガル人が当地にやってきてから現在に至るまでを回顧する。チナ人は外国人ざらいだが、ポルトガル人はチナ人とは平和にやってきたし、「王の息子、王国の民 (*filhos do seu rey e naturales do reyno*)」とみなされてきたと述べるが、その位置を獲得するために多くの資財がつぎ込まれたことに言及するのを忘れない。

ついで、政府から対タルタル人戦争への援助要請をたびたび受けたことに触れ、2連隊 300 人以上の兵が送られたが、外人導入に反対した官僚の上奏によって途中で帰還命令が出されたこと (前述したジョアン・ロドリゲスが随行したもの)、次に大掛かりな派遣への警戒を考慮して 15 人が派遣され今度は北京に着いて王に数年仕えて軍功をあげたことを記す¹⁷⁷。

近時の内乱にあたっても兵の派遣を要請されたが、同国人同士の不和、つまり皇帝と反乱者の争いを見て中立を持することにしたところ、はたして両者は共倒れに終わったとして、ルカ書の「すべて分れ争う国は滅ぶ」を引用する。

さらに、各地の短命政権がそれぞれマカオを利用しようとしたが、それに応じようという声はあったものの結局手を貸さないことに決した。しかし、広東の紹武政権に対しては、近隣であり、物資面での広東に依存せざるを得ないことから、使節を派遣

¹⁷⁶ 当時の VOC の記録には、台湾で交易していた中国商人がしきりにオランダ人にこのことを訴えていたことが記される。

¹⁷⁷ 注 134 ボクサー論文はマカオ派遣の部隊を列举するが、その中にこれに該当するものはない。

したほうがよいとの声が挙がったという。結局、武器や兵員を送り込む費用と船便のことが考慮されて沙汰やみとなった。

広東政権は47年の初めに「煙のごとく」消滅したので、使節派遣が実現しなかったのはマカオには天の配剤であったとし、交通の不安を理由にして新政府の広東当局に使節を送ることができないのも好都合だとする。「中立 (indiferença e neutralidade)」を維持することがマカオにとっては最も好都合であり、使節を送らずとも広州との交易は復活したのだから、たしかにこれに越したことはない。

そして、中立の維持はポルトガル人の目的が軍事侵略ではなく、平和・友好・交易にあることを示すことにもなり、宣教にも好印象をもたらすだろうとする。前掲のディオゴ・パレットを含む砲術家たちが、対タタル戦のために「ある省の副王」に呼び寄せられて活躍した後、さらにチナ人同士の争いにも助勢を求められたところ、それではマカオ当局の不興を買うからと断ったことにも、マカオ人の慎重さの表れを見る（パレットはのちに清軍に加わっているので、中立を保ったわけではないのだが）¹⁷⁸。

最後に、神の勸諭によって現在の嵐は静まり、布教にとって追い風が吹くことに期待を寄せると述べ、以上の話には広東の神父たちの諸報告を用い、記録者自身が増補したのは特に自ら数年の滞在経験を持つコチンチナ・トンキンの部分であると述べ、征服に対する反応については「昨年」の経験をもとにしたと述べる。

「付録：ジョアン4世から日本王に派遣された使節団の顛末」（43v-51v）

1647年にポルトガル王の名前で日本に派遣された使節団は有名であり、これについてはボクサーの著書・研究もある¹⁷⁹。したがって、「付録」というには分量の多いこの部分の記述を一々紹介する必要はない。ここではその概略、特色について述べよう。

¹⁷⁸ しかし、1646年にマカオは永暦政権にニコラス・フェレイラ率いる300の兵を救援に送っていた（前掲注134ボクサー、注127チャン論文参照）。この事実に関心していないのはいぶかしい。たしかに、清朝に対しては「不都合な事実」ではあるが、イエズス会の上長に報告する文書において隠蔽しなければならない理由をさしあたり思いつくことができないからである。そして、1648年に情勢は大きく変わる。李成棟が「反正」して永暦側につくからである。マカオもこれを見て永暦朝廷からの使者を受け入れ（1648年10月17日）、マスケット銃を送るのである（チャン論文 pp.107-108）。

¹⁷⁹ 注77。

まず、1644年の1月にジョアン4世がゴンサロ・デ・シケイラを大使とする使節団を派遣したことから記述が始まり、これがヨーロッパから日本に派遣された初めての使節であることが強調される。インドからはかつてアレッサンドロ・ヴァリニャーノ、そして日本司教パドロ・マルティンス（両者とも「わが会士」であることへの言及は忘れられていない）がそれぞれ副王によって派遣された前例があった。

この2使節の派遣の成功にも拘わらず、「悪魔は眠らず (o diabo não dorme)」迫害を引き起こしたとして、以下、日本教会の1世紀の歴史が略述される。1639年の貿易の途絶はマカオにとっては大きな痛手であり、それを挽回すべく派遣された40年の使節団の大半も「殉教」を遂げた。貿易復活をあきらめないマカオは一方でゴア当局に使節派遣を求めていたが、これに応じてマカオにディオゴ・デ・ソウザ・メネセスが派遣された。しかし、マカオ到着後に殉教の報が入ったために渡海は中止された。ここで、最終手段として本国からの使節派遣の話が浮上してくることになる。国王はマカオの請願を容れ2隻の船（サント・アンドレ、サント・アントニオ）が派遣されたが、その指揮官はいずれもマカオ人（アントニオ・フィアーリョ・フェレイラ、ゴンサロ・フェラズ・デ・リマ）であった。しかし、両船とも航海では苦難を強いられ、スマトラ沖ではぐれてしまう。アントニオ号は南東インドに流れ着き、そこでオランダ船と戦闘した後¹⁸⁰、ゴアに到着。一方、アンドレ号はなんとかジャコトラ（バタヴィア）に到着し¹⁸¹、ここで越冬して翌年の5月にマカオにようやくたどり着いた。時期的には日本への航海にちょうどよかったが、たった1隻で日本に向かうのは王の使節として体面的によろしくないということで派遣は見送られ¹⁸²、船はいったんゴアに戻った。そしてあらためてゴアを出発した（1隻はサン・ジョアン号に代わる）。2船は1646年8月

¹⁸⁰ この頃本国同士は10年の和平協定を結んでいたが（長崎の『オランダ商館日記』にもしきりにこの情報が登場し、幕府がこれを非常に気にしていたことが分かる）、アジアで和平が実現するのは1644年11月にバタヴィアの特使ヨハン・マーツァイケルとゴア当局の間で協定が結ばれてからである。

¹⁸¹ スマトラ沖で遭難し、バンタンに到着したところをオランダ人によってバタヴィアに連行された。オランダ人は日本に大使派遣の話を伝えたので、幕府は事前にこのことを知っていた。

¹⁸² しかし、これは表向きの理由である。国王から大使への指令の中に、「宣教師を派遣しないことを確約してはいけない」というものがあった。このまま日本に向かえば、当然幕府の禁教政策に抵触することになる。マカオの立場からすれば、仕切りなおしが必要だったのである。

12日マカオを出航して¹⁸³日本に向かったが、50レグアの距離にまで接近したところで逆風に会い、マカオへの帰港を余儀なくされ、住民たちの少なからぬ失望を買った。

しかし、マカオの住民は望みを棄てず、ゴアの副王からの支援も得ながら、ついに47年7月初に2隻が出航した。舞台はここでようやく日本に移るのだが、著者はその前にマカオの聖俗両界あげてこの使節団の成功を強く祈っていたことを強調する。出航に際しては多くの改悛者たちの行列が組まれ、乗員たちには2日2晩かけてイエズス会士らから秘蹟が授けられた。

2船が7月26日に長崎に到着した後、幕府に帰還を命じられて9月4日¹⁸⁴に出発するまでの経緯についてはかなり詳細に述べられているが、ここでは省略する。『チナ征服史』24章の記事にこの部分は使われているが、使節が日本に来るまでの経緯の部分はカットされ、来日以後についても日本人がいかに外国人を恐れているかを強調しようとして、河口をさかのぼったポルトガル船を急ごしらえの船橋で封鎖した話をクローズアップする以外は簡略である。そのかわりに、スペインによる日本征服の可能性を取り上げてこれを一笑に付しているが¹⁸⁵、これも日本人の恐怖がいわれなきものであることを強調するためである。

「報告」は最後に、当局と使節団の連絡役を務めた通訳(jurubaças)が背教者であるにもかかわらず、使節団の便宜を図るために都合の悪い部分を意図的に省略するなどしたことに触れ、使節の失敗の原因である「暴君の皇帝」すなわち徳川家光のかたくなな心を神が動かすことを祈念して締めくくる。

3、再び『チナ征服史』

以上、「報告」の内容を紹介してきたが、その特徴をまとめると以下のようになるだ

¹⁸³ ボクサーが使ったパンフレットは8月11日とする。

¹⁸⁴ 漢訳p.158が「7月6日と20日」としているのは、単純な錯誤である。また、9月16日はスペイン語版では6日となっている。「報告」と2日ずれるが、別に情報を持っていたとは考えられない。パラフォックスのミスであろう。

¹⁸⁵ 漢訳p.160が「日本人がスペイン兵1万で日本を征服できると言っているのを真に受けてスペイン人が得意がっている」とするのは誤訳で、原版から英訳まで「スペイン人もこうした追従を真に受けはしない」である。

ろう。

- 1、書かれた時点から近数年をさかのぼって中国とその周辺で起きた出来事が述べられるが、全体としてのまとまりがなく、各パーツが未整理のままに記述が上乘せされていく形になっている。その結果できあがったものは、マカオ関連の記述が数か所に挟み込まれる形になり、読み手が筋を追うのに苦労する。
- 2、しかし、マカオの視点から書かれているのだから、これは当然のことでもある。フォーカスは、本土あるいは周辺諸国の出来事がマカオにどのような影響を及ぼしているかにある。付録の日本派遣使節団の記録が本国・ゴアよりマカオにウエイトを置いている点¹⁸⁶もそれを示していよう。
- 3、記録者はイエズス会士だから、究極の関心はこれらの事件が布教に与える影響にある。
- 4、タイトルからすると全国の事柄を扱っているように見えるが、実際には記述の中心はマカオと広東にある。それだけでなく、広東の神父（サンビアシラ）から得られた情報が「報告」の大部分を構成している。広州での出来事はもちろん、海南島、北京からの情報もサンビアシ経由で届いたものである。タルタル人の諸特性について述べたところも、明示されているわけではないが、ほとんどは広東占領軍と接する中で得られたもの、あるいは清軍に随行した元イエズス会士のバレットから得られたものであろう。

この4つに対応した『チナ征服史』の改変の特徴について記せば、

- 1、「報告」の記述における頻繁な場所移動がリーダービリティを損なっていることを勘案して、マカオ・広西の記述を一括して扱うなどの工夫によって、読みやすくしようとしている。それでも時系列は分かりにくいし、かえって混乱を招いているところもあるが、手持ちの材料が豊富とはいいたい状況（多くの材料を使ったように見えるが、実際にはこの「報告」にほとんどを負っているのはすでに見てきたとおりである）を考えれば、これは責められないだろう。むしろ、編集の工夫（細部については、後掲の対照表を参照）に敬意を表したくなる。
- 2、「報告」のマカオ色が薄められている。そのかわりに、当然のことながらスペイン

¹⁸⁶ ボクサーが使ったパンフレットと比較すれば、それは明らかである。

あるいはローマ、ヨーロッパの事例を頻繁に持ち出して比較の材料にしている。

3、著者自身教会人として、布教に寄せる関心はイエズス会に劣るものではない。ただ、イエズス会の場合には、マカオの繁栄に布教の命運がかかっていたが、著者にはそうした認識がない。それがマカオの扱いに反映している。

ポルトガルが1640年にスペインから独立した今、マカオの命運は直接にスペイン人に影響を及ぼすものではなくなった¹⁸⁷。ただ、「報告」にあるイエズス会関連の記述の大半がカットされている原因を会に対する反感に求めるのは、おそらく正しくない。メキシコで著者とイエズス会が厳しく対立し、イエズス会の中国布教の方法に批判的だったことは事実としても、本書の中にイエズス会に対する批判は一切ない。「省略」はフォーカスの違いによるものと見るべきである。

4、「報告」の広東色を一般論に転化している。また、そのためにとくに前半の叙述を「報告」にない材料も使って充実させている。その来源は明らかでないが、マルティニ『タルタリア戦記』がその中に入らないのはまず間違いない。パラフォックスが帰国後この本を見ていた可能性はあるが、それが使われた痕跡はない。マルティニには1648年以後の「ゆり戻し」（李成棟、金声桓らの「反正」）も描かれているが、『チナ征服史』は47年を征服完了の時点として捉えている。仮にマルティニを読んでいたとしても、それをテキストに反映させることはなかったのである。

要するに、これらの違いは「マカオから見た華夷変態」が「メキシコから見た華夷変態」へと変換されたことによって生まれたものだが、『チナ征服史』が「報告」に多くを負っていることにはかわりはない。ここで、チェンが暗君であったはずの弘光帝が持ち上げられ、鄭芝竜が忠臣とされるのは事実と反すると指摘していたことを思い出そう。たしかに『チナ征服史』はそうした側面を強調しているが、もともと「報告」にそうした解釈を生み出す記述があった（弘光の即位への南方の人民の期待が記され、鄭芝竜の清朝への内通には触れられていない。それをはっきり書いているマルティニ¹⁸⁸と対照的である）。したがって、これは『チナ征服史』の責任ではない。それでは「報

¹⁸⁷ マカオもポルトガルの独立の報を受けて、ジョアン4世への臣従の誓いを立てた。それ以前におきた使節団の殉教について『チナ征服史』は評価しているが、47年の使節団については、日本の封鎖性を強調するために持ち出しただけで、使節団に肩入れた記述は見られない。

¹⁸⁸ 原版 p.102、漢訳 p.375

告」が単に事実を誤認したのかといえ、そうではない。テキストに大きく関与しているサンビアシは、マカオの使節として弘光帝そして鄭芝竜と良好な関係を保っていたのである¹⁸⁹。おそらく、そのことがこうした評価につながっている。

ただ、鄭芝竜に関しては「報告」以外の材料に多くを負っていることもたしかである。当時のヨーロッパ人すなわちマカオのポルトガル人、台湾のオランダ人、そしてマニラのスペイン人にとって、鄭芝竜は中国で最も有名人だったから、彼に関する情報が様々な形で流布していた。そのほか、22章の予言の章は「報告」には存在しない。

なお、本書が生息の情報を記したものではないことをもって、その価値をイエズス会士の諸記述より低く見る見解は、すでに会士のルージュモン¹⁹⁰の著作序言で表明され、以後も本書の評価に必ずつきまとってきたものだが、それには根拠がない。この本の骨格はイエズス会の「報告」により作られているのだから¹⁹¹。ここで、あらためてマルティニ『タルタリア戦記』と本書のもとになった「報告」を比較しておこう。

1、マルティニには時期、場所においてアドバンテージがあった。彼は1651年の出国寸前までの自らの見聞と出国後に同僚から送られた手紙による情報を盛り込んでおり、「報告」が47年止まりなのに対して、その後のことを知った上で書いている。したがって、「報告」のように「一部に不安定要素はあるものの、天下はほぼ平定された」といった眼鏡違いを免れている。また、マルティニは杭州を基点として、各地の布教拠点を回り、北京にも短期間ながら滞在していたし¹⁹²、満洲人との接触経験もかなり長期にわたっていた。したがって、「報告」に比べれば視野は広い。太宗ホンタイジをその2つの年号によって天聰・崇徳の2人の皇帝に分けてしまっているような誤りも散見するが、その記述は漢文史料と照合できるようなものがほとんどであり、安心して読める。それに比べると、「報告」はあちこちにトンチンカンなところがある。サンビアシはマ

¹⁸⁹ 拙稿「サンビアシの旅」参照。なお、イエズス会年報の記録者デ・ゴヴェアは鄭芝竜には冷たく、その裏切りをはっきり記している。イエズス会の中でも立場によって、見解は当然異なってくるのである。

¹⁹⁰ 注9参照。

¹⁹¹ 注13所掲Arteagaのパラフォックス伝(p.263)には、彼がフィリピンのイエズス会との間にチャンネルを有し、情報の提供を受けていた事例を紹介している。

¹⁹² この間に四川から連行されてきた2神父にも会っている(原版p.154、漢訳p.394)。「報告」では影の薄い張献忠の記述が相当にある。

ルティニよりも在華経験がずっと長く、官界にかなりのコネクションを築き上げたが、明朝滅亡後その行動範囲はもっぱら南明諸政権の領域に限られ、満洲人との接触もこの「報告」の時点では1年にも満たなかったことが、こうした不正確さの原因になったのだろう。さらに、彼は常にマカオの利益代表として行動していたが、マルティニはそうした立場からはとりあえず自由であった（彼が出国したのはマカオでなく、安海からである）。こうした立場の違いが、2つのテキストの性格をかなり大きく規定しているはずである。

しかし、「報告」のハンディキャップは、逆にこのテキストのユニークさにもつながっている。マカオから見て、当時の華夷変態がどう映ったのかを見てとることができるのである。一方、マルティニが一步退いて俯瞰的な構えを取るのは一見すると客観的だが、テキストにゆがみが少ない分、面白みに欠ける。

閑話休題。再び『チナ征服史』に戻ろう。『チナ征服史』は「報告」の視点を切り替えただけの産物ではない。すでに先行研究において、この作品が遠く離れた地域における大変動を「対岸の火事」的に描いたものではなく、自らの文明や国家を省みる材料を提供しようとするものであることが指摘されている。スペイン語版と仏訳以下を比べ、「報告」と一々対照した今回の作業によって、各所に見られるヨーロッパないしスペイン文明に対する自省とそれを引き出すためのタルタル人礼賛が原材料に備わったものではなく、ほぼ著者パラフォックスのオリジナルであることが確かめられた。

しかし、従来の研究はパラフォックスの色が出た部分を「君主鑑」という一般論で片付けるか、少し後の時代のナバレッテにひきつけて考えるかで、本書が登場した時代的文脈に顧慮していない。彼らの論点には、著者パラフォックス自身が不在なのである。この点について、少しく付言して本稿を閉じよう。

第一の問題は、彼のタルタル人への称揚をどう見たらよいかということである。チナ人に対する厳しい評価¹⁹³（「報告」にもそうした記述はあるが、『チナ征服史』の強度

¹⁹³ なお、中国人とその文化をおおむね高く評価する傾向のあるイエズス会士に対して、スペイン人にはどちらかといえば、これを低く見る傾向がある。それは彼らの中国認識が托鉢修道会經由で得られた情報により形作られた部分があることにも一つの原因が求められようが、イエズス会士であるアドリアノ・デ・ラス・コルテスの冷静な評価 (*Le voyage en Chine d'Adriano de las Cortes s.j.(1625)*, tr. by Pascale Girard, Paris, 2001) から分かるように、すべてが修道会の

とは比べものにならない)、ヨーロッパ人への批判・自省の裏返しとも見られるが、それにしてもこの称揚ぶりはやはり少し度外れである。タルタル人が外国人に対して開放的で、布教を受入れる素地を有する（その点、日本人と対照的）と見なしていることを差し引いても、まだお釣りがくる持ち上げかたである。

そこに彼のインディオ観の影響を見てもよいのではないかと思う。本国出身のスペイン人が社会の上層を占めるメキシコにおいて、現地生まれのクリオーリョの声に耳を傾け、インディオを保護すべしと彼が主張していたことはよく知られ、後者の側面については「第2のラス・カサス」と評されたこともあった。しかし、これは言いすぎであって、彼は統治者（メキシコ教会の指導者であっただけでなく、一時期総督代行も務めていた）としての立場からインディオを帝国の必要な1ピースとみなしていたと考えるのが正しいだろう¹⁹⁴。

しかし、彼が同時代人の中では、ヨーロッパ人中心あるいは華夷的な観念から比較的自由だったことは確かで、タルタル人評価にもそれが影響したと考えるのである。スペイン・ハプスブルク帝国はインディオも含めた多民族で構成されるキリスト教国家であった。かたや中華帝国もパラフォックスにとってはチナ人によって構成されるだけではない。もともと300年前にはタルタル人が支配しており、今回の革命はある意味では旧態への復帰であった。彼はタルタル人の帝国の永続については懐疑的だが、少なくとも当分の間はタルタル人の主導體制が続くだろうことをイエズス会の報告に読み取った（48年の情報を見れば、また話は違ってきただろうが）。タルタル人と、常に「従」の立場にいたインディオとではおかれている境位が違うし、インディオが帝国の主となる日があるなど、「帝国必衰史観」（スキピオについての記述に窺える）を抱いていた彼でも考えるはずもない。しかし、大帝國を構成する *nação* としてそれぞれを見れば、等価である。インディオをそうした目で見ることができた彼には、タル

違いによるものではない。より大きなファクターとして、スペイン人会士がまず出会った中国人がルソンにやってきた者たちだということを考慮する必要がある。

¹⁹⁴ パラフォックスに関する著作は彼の列福運動とどこかでつながっているものが多く、いきおいインディオに対する保護者の側面も理想化されざるを得ない。注2所掲のトレドの著作はそうした弊を免れているが、まだ少数派に過ぎない。パラフォックスに関する研究蓄積はかなり厚いと言ってよいが、列福も済んだ今、従来の視点と異なった研究の出現が期待される。

タル人を単なる野蛮人と片付けることはできなかったし、またその積極的価値を認めるのにやぶさかでなかっただろう。

もうひとつ指摘すべきは、当時のスペインが置かれていた状況である。ポルトガル、カタルーニャが次々と反乱を起こし、スペインの支配から脱しようとしていた。むろん、独立を志向する彼らから見れば、それは反乱と呼ばれる筋合いのないものだったが、スペイン・ハブスブルク帝国の立場からすれば、これは明らかに「反乱」であり、統治体制の一角を担ったパラフォックスの見方もそれに同じだったはずである。この「反乱」の前半戦の間、彼は大西洋を隔てたメキシコにいたが、その影響を肌身でも感じ取っていた。彼が司教として着任した時の副王はポルトガル人との関係が深く、メキシコの大西洋交易の要所ベラクルズにおけるポルトガル商人の影響力が強かったが、結局ポルトガル・コネクションを断ち切ることがパラフォックスのいわば初仕事になった¹⁹⁵。こうした「叛徒」「裏切り者」の存在は即座に帝国の土台をゆさぶるものではなかったが、オランダ人の存在も含めて、スペイン人支配層にとっては頭痛の種であり、彼らをめぐる考察が様々に展開された。おそらく、パラフォックスがチナ人の母国への裏切り（あるいは「偽のタルタル人」であることによって二重に裏切る可能性もあった）を許せなかったのは、こうした事情が背景にある。「報告」自体、戦乱におけるチナ人の振る舞いに対しては否定的で、漢文史料の文脈では「忠義」とされている広東の抵抗軍をはっきり「賊軍」と書いてにべもないが、そうした第三者的あるいは被害を蒙った人民に寄り添った見方とはまた別のところで、パラフォックスは反応したのであるう。

しかし、「君主鑑」あるいは帝国の臣民はどうあるべきかを書きたいのなら、何もこんなに細かく事件を叙述するまでもない。この時期、マキャベリの『君主論』の反作用で、スペインでは様々な政論・君主論が書かれた¹⁹⁶。その1つに、パラフォックスと同じアラゴン出身で司教以上に有名でありながら、やはり今日では「知る人ぞ知る」

¹⁹⁵ Arteaga, op.cit., pp. 142-152.

¹⁹⁶ Laura Manzano Baena, *Conflicting Words: The Peace Treaty of Münster (1648) and the Political Culture of the Dutch Republic and the Spanish Monarchy*, Leuven, 2011, pp. 124-128.

の存在である¹⁹⁷ イエズス会士バルタザール・グラシアン¹⁹⁸の君主論(1640刊)があるが、この中に「大チナ」の王への言及がある¹⁹⁹。パラフォックス自身、他にも君主かくあるべしという著作が複数ある²⁰⁰。

やはり、彼がここまでの手間隙をかけて(多作な彼にとって造作なかったのかも知れないが)『チナ征服史』を編んだのは、当時彼がメキシコにいたからこそであろう。メキシコはアジアにおける橋頭堡のフィリピンと本国をつなぐ中継地であり、アジア布教の補給基地でもあった。しかし、それだけではない。近時、セルジュ・グリュジンスキがメキシコを一つの軸とした世界史の著作を次々と出し²⁰¹、またイエズス会についてはルーク・クロッシーがメキシコに軸線をおいたネットワーク史を描いているように²⁰²、メキシコはスペイン帝国の前線であると同時に、両洋の中間に位置する世界の軸心でもあった。こうした位置にあって、当時有数の知性であったパラフォックスが『チナ征服史』を著すのはある種の必然だったのである。

*本稿は平成21年～24年度科学研究費補助金基盤研究(B)「ヨーロッパ人の文献史料にもとづく清朝前期の政治と社会に関する総合的研究」(代表、松浦茂)の成果の一部である。

¹⁹⁷ 彼の著作をニーチェやショーペンハウエルが賞賛したことは有名だが、その代表作 *El Criticón* はいまだに英語の完訳が出ていない。

¹⁹⁸ Balthasar Gracián, *El político don Fernando Catholico*, ed. by Luis Sánchez Lafla, Jaén, 2011. 直接にはスペイン帝国の父(スペイン合同を実現)であるフェルディナンドを賞賛することを目的として書かれたものだが、引用されるのは古今東西の君主の事例である。

¹⁹⁹ 注釈者はこれは崇禎を指すとする。短い記述で確定する手がかりはないが、ある個人を指し、しかも現在のことを言っていると考えられるので、これは正しいだろう。この時点でまだ崇禎は死んでいないが、マルティニ『タルタリア戦記』の影響もあってこの後亡国の君主としてヨーロッパでは戯曲の主題に取り上げられるなど、有名になってゆく。注24 Van Kley 論文参照。

²⁰⁰ その中でも代表作である *Historia Real Sagrada* は文字通り旧約聖書のイスラエルの王たちを主題としながら、現実の君主論ともなっている。

²⁰¹ Serge Gruzinski, *Les quatre parties du monde: histoire d'un mondialisation*, Paris, 2004, *Quelle heure est-il là-bas? Amérique et islam à l'orée des temps modernes*, Paris, 2008, *L'Aigle et le Dragon: Démesure européenne et mondialisation au XVI siècle*, Paris, 2012.

²⁰² Luke Clossey, *Salvation and Globalization in the Early Jesuit Missions*, Cambridge, 2008, pp. 105-108.

スペイン語版と漢訳の異同表

※英訳が仏訳から乖離したものを△、漢訳の誤りを×、仏訳でズレ、英訳・漢訳が更に誤訳したものを××で示した。残りは仏訳を踏襲したものである。

スペイン語版	漢訳
頁数	頁数
1 Cunchin (崇禎)	17 Zunchin
多くの帝国	若干州郡×
2 なし	18 (李と張は) 身分・出生についてとりあげるほどのものでないが、二人とも最高の統治者たらんことを渴望していた。
精兵	大量精兵
3	皇帝の温良な性格を利用して
4 李は張を圧倒するか、詐略により殺害したらしい。というの、この報告にはこれ以上張についての言及がないからである。	19 李は張を密謀ないし公然たる武力でもって排除することに努めた。彼と張の関係についてはこれ以上の報道がない。×
5 一つ一つの点についてすべての情報を見て照合し、ある情報に含まれる事柄から、他の情報にあるものを類推する必要がある。	何度も記録を一つずつ校合する時には、その中の記載が別の記録に対する続編、解説に過ぎないことがあることに留意する。△
Xanssi (陝西)	Xenzi ※仏・英は Xensi
Singansuase (西安府) ※ Singanfu の訛	Singanzuase ※仏・英は Singansuase
6 王と王国をよくも悪くも左右する力は廷臣 (cortesanos) よりも兵士にある。	君主に仕える軍人の国家に対する働きや貢献はただ君主に取り入るだけの小人の及ぶところではない。
裁断を王侯より上位者である神にゆだねる。	20 神に地上の王侯を制裁されんことを祈る。△
7 侮辱には侮辱でお返しするのがアジアなら、乾杯には乾杯で返すのがドイツ (Alemania) である。こうした慣行はドイツだけのものであればよいのに。	私はひたすら神の加護を祈り、暴力による復讐がアジアの地に限られることを願う。
8 平和協定や権利 (※タルタル人が元朝時代にもっていた中国に対する領有権) の譲渡も辺境での小競り合いに影響を与えることはなかったが、帝国への侵入となるとそうはいかず、そのために彼らは様々な理屈や口実を設けてこれを正当化した。こうした正当化はヨーロッパの政治家 (estadistas) に良心を教えるものとなりうる。※建前の大義名分すら顧慮しない政治家たちを批判	両国の間で和約が結ばれ、韃靼人は中国に対する野心を放棄したが、なお衝突の発生を防げなかった。しかし、韃靼人からすれば、中国への宣戦布告は理にかなっておらず、尊厳を失う行為でもあったので、ヨーロッパの政治家たちが持ち出すような口実を探そうとした。
洗練された人々 (políticos) ※ barbaros との対	21 政治家
9 la ultima raçon de los Reyes	Raultima Regum (Ratio ultima Regum が正しい) × ※「王の最終手段」の意
10 タルタルの君主は聖油を塗られ聖別されてはいないが	天がたとえ彼に神聖な宝座を与えようとも×
11 チナでは君主として生まれるのでない限り、所有はよいというより悪いことで身を滅ぼす原因にもなる。なぜなら王族以外は財産を相続できないからである。	中国では皇室出身の王公のみが権勢と地位を有するので、富貴を図る者は才能や身分によるのではなく暴力で奪うしかない。また、財産は父子間で相続されず、全国ほとんどの人間は家産を失う恐れがある。
12 兵士が時間がたつにつれ、王 (皇帝) に再び愛情を抱くのではないかと恐れ	兵士が恩恵を得られないがために皇帝に投降するのを恐れ
lacta est alea (賽は投げられた) ※この前に「ルビコンは渡らずに李はこう言った」の文言あり。	選択は決まった。×
叛徒が勝利者となったからには、いまや忠義の徒である。中間はない。大チナの皇帝になるか、戦場に倒れるかである。	23 もはや匪賊ではなく、正当・合法な君主となったからには、何を疑うことがあろうか。△
14 多くの廷臣 (cortesanos)	朝廷と内閣の数人の大官
宮臣 (palaciegos)	將軍×
15 ここから生まれつきの貴族がいない国の欠点がかかる。貴族はその血の中に忠誠と義務感を受け継いでいくが、これは受け継がれない限り身につけることができない。	24 ここから当時の国家の状況がどうあれ、そこには徳行が見られなかったことが分かる。偉大な先祖の継承者がその生命の第一原則を受け継ぐ際に忠君の原則を受けとらなかったということが言いたいのである。×

国を売ったのは裏切り者の廷臣たちである。	売国者は本来国土を守るべき人々であった。
16 恩を忘れ、裏切った臣下は服従をやめるばかりか、皇帝の命を狙った。	25 敵は凶暴にも武力で彼の国と王位を奪おうとするだけでなく、命まで狙った。△
17 こうした状況は一介の庶民にとっても悲惨なのだから、至高の皇帝にとってはなおさらのことである。	淪落した皇帝は、最下層の人民にまで同情された。×
なし	彼（崇禎）は絶望して、悲痛し、傷害を受けやすい帝王が滅亡に際会したかのようであった。国家とその君主はしばしば苦難に襲われるものである××
18 この裏切りの世界では、時には暴力的な死（自殺）が幸福となることがある。	26 この種の生命への恥辱は、驚くほどに心に浸透して、自殺が幸福と考えられさえする。
1640 年に出版されたチナに関する最新の報告 (la ultima relacion impresa de la China)	1640 年に中国で刊行された書物
19 下賤の身から出発し、最後は反逆者となった暴君、悪漢	正当な君主に反逆し、高尚偉大なところがない。
20 (皇帝は) 名誉のみを気にかけ、慰めは奪われていた。なぜならこれほど傲慢な不幸（妻の名誉を守るために殺す）が激しくひっきりなしに彼を苛んだので心休まらなかったからである。	27 皇后の尊厳保全が彼が最後に抱いた唯一の希望で、その実現のために暴力を使うことを決意した。恐怖がこれらの真の大人物を圧倒した時、皇帝はどれほどの苦痛を蒙ったであろうか。×
21 皇帝と皇后は口をつぐみ、乾いた目で	受難の大臣たちは悲哀を抱き、一言も発せず、一滴の涙も流さない皇帝に随行した。
なし	28 皇后は操を立てるために、彼と一緒にいるいは先に死のうと決意した。
23 木の枝でさえも、大チナの偉大な皇后のかくも不幸でふさわしくない死を悲しんだだろう。	木の枝よりも無情な人でさえ、大皇后の惨死を悲嘆した。
24 崇禎を「puit, ut, cum」(「不入宮」の音写?) すなわち後宮に行かぬ人と呼んだ。スペインでなら、彼を純潔 (casto) と呼ぶだろう。	彼をある称号で呼んだ。清潔な君主、つまり後宮を顧みない王という意味である。
25 なし	29 どうしてこのまま生きながらえて、命より大事な国家の滅亡を見ることができようか。
26 皇帝への貢物は億を数える。	千万×
これほど急激な大きな悲惨への転落は人々に多くのことを考えさせる。	大君主がおそろべき、そして渴望した偉業を実現した瞬間に、栄光の頂点から悲惨の深淵に落ち込むのにはどれだけエネルギーを要するだろうか。××
27 王であってさえ、長生きすればするほど不幸である。	国王あるいは皇帝であろうが、人間は生きた実年齢ではなく、体験した悲惨な年月を数えるべきである。
出版された報告	30 中国で出版した報告
1618 年時点で在位 46 年	1418 (誤植) 年に即位し、在位 46 年×
Taicom (泰昌)	Thaicam
Hienchi (天啓) ※ t が脱落	Thienchi
この王「チナのドン・ロドリゴ」	スペイン人の報道では「ドン・ロドリゴ」と呼ぶ。
29 マンダリンの大部分	31 数人のマンダリン△
高官の多くが	若干の全国で最も顕貴なる高官が△
30 なし	(皇帝に随行した官員は) 死を選択したことで尊敬された。△
31 こうして多くの人が死んだが、これらは裏切り者やそれに仕えたものが得た報いである。	32 暴君李に様々に処遇されたマンダリンの中には、彼の支持者もいれば、君主に忠義心を持っていた人もいた。叛徒からすれば、(マンダリンの死は) 当然の賠償であったし、皇帝と国家に忠誠を示すのが遅きに失した人々に対する懲罰であった。××
32 (タルタル人は) 古い権利を持ち出した。彼の考えでは、これはタルタル人がチナに対して有しているものである。この権利は王家にのみ譲られたのであり、それは父から子へと譲られたと考えた。なぜなら、もしすべての王族が王冠に権利を有するなら、王朝は変わらないことになってしまう。	彼はあらためて鞏固と中国の旧約を考慮するのが妥当と考えた。この盟約は当時の皇室が結んだものであって、父から子へと受け継がれる限りにおいて効力を有した。皇帝の他の親戚が鞏固人よりも帝位に権利を有すると考えるなら、この限定は意味を失ってしまう。鞏固王が当時の皇室に対して中国の領有権を放棄したのは、帝王の親族が存在する限り、玉座が自分から転がりこむことはないからである。鞏固人は兵権がある家族から別の家族に移ることはあると考えていて、これは君主国である中国では普通に見られることである。××
33 タルタル人たちは言った。	33 鞏固の議会は討論を進めた。

彼らは関係者たる立場からは、自らの帝国を回復し、高潔な人間としては、同盟者の皇帝のために復讐しようとした。	残る問題は武力でいかに征服を実現するかである。彼らはそのために種々の準備を行ったが、特に尚武の民族として、自分たちには征服する正当な理由があると深く信じていただけでなく、事柄は彼らの名声にかかわってもいたのである。
35 Sangui V なし	34 呉三桂 (英訳 Usangue) 呉は暴君に復讐したいという激情の余り、こうしたやり方が祖国に取り返しつかない損失をもたらすことに思いが至らなかったのかも知れない。
なし	(李に対する) この種の憎悪が短期間で彼を転覆する力を生み出したことは容易に想像できる。
なし	(弘光が) 人民に血を流させるのを願わないのであれば
36 暴君 (李) はますます嫌われた。	暴君は大臣に無礼だったので、日ごとに反抗に遇うようになった。
37 にもかかわらずタルタル人は Barbaros と呼ばれ、ヨーロッパ人は Politicos (文明人) と呼ばれる。しかし、Politicos が Estadista (政治家) の別名であるとすれば、Barbaro のほうがより洗練されているというべきだろう。	35 とにかく、信義を講ずるのが却ってこの蛮族なのである。我々欧州の政治家には修養が足りない。要するに、人道と文明社会の責任が教えられていない。もし、政治家の名が修養を積んだ人を指すだけのものとすれば、今日の韃靼人は手腕と修養の上で、他国の本物の政治家と肩をならべることができよう。××
38 順治の年齢は 12 歳に達していない。	36 10 歳あるいは 12 歳
李に服属していた省を通過したのは、侵入への反感をやわらげるためである。	37 彼らは北方諸省が戦争を経て李に征服されたのを、悪い事と思っていなかった。××
39 中国に侵入したのは第 3 三半期 (últimos terços)	この年の末尾
40 頑強に抵抗する者は厳しく弾圧した。	人民は反抗すれば厳罰に遭うのをおそれて降伏した。
42 我々にこれらの情報をもたらした者はこれ以上のことは確認できなかった。なぜなら今日まで帝国は混乱しているからである。	39 私に情報を提供した者はこの間の歴史について述べた時これ以上のことは知らず、ただ「手紙を書いた時は全国が混乱しており、諸々の事情については明確にできない」と言うのみだった。××
43 この報告には、タルタルのカーンの即位後に北京から来た人の情報が載っている。	韃靼汗の即位以来、北京から来た複数の人たちの情報は次要のことばかりである。
彼は自らの破滅が配下の者も破滅させ、その他多くの人を虐殺にまきこんだことに満足した。	40 彼 (李) は祖国をその廃墟に葬られることもない異族に与えることになろうとは思ひもしなかった。 △
44 暴君李は裏切りとともに消えた。	現在、北京では李の消息がない。
45 コレア スペイン全土と同じくらしい大国 その後、チナの王に背き (李氏朝鮮の成立) 団結して	スペインよりやや小さい。× 終始中国の版図に入ることを拒み 議事会内で団結して×
46 ライオンやローマ人の流儀で なし	41 雄雄しいライオン、あるいは英雄好漢のように 朝鮮王はこのように屈辱に耐えて、再起を期した。 ×
48 (コレア王は) 自らの慰めを得た。	人民は歓呼の声で迎え、本人は満足した。
Xantung (山東)、Honan (河南)、Xenssi (陝西)、Xanssi (山西)、Lahotum (遼東) ※ p.51 では Leaotung)	42 Xantum, Leantum, Honam, Xansi, Xensi
51 (順治は) 北京に凱旋した。 なし	43 北京に戻り、正式な皇帝に立てられた。×
52 なし	詔を発して朝廷の官員や韃靼の貴人を北京に来させた。勇武の気概を示した後、偉大な事業を行おうとして経験を持ち忠実な武官に命じ
54 世界は一つ同じ穴のむじなで商人にあふれており、商売のためには神をも利用する。	44 しかし、絶賛して史書に載せ、他の大君主が模範とするにふさわしい点は 45 世人は心算を尽くして神の加護を求め、奇跡の出現を待ち望み、求めているものが手に入ると、自己の作為は天意に従っているのだと言い募る。
(タルタリアに近い省の) これらの人々は出身省の安定を保証する人質としての役目も果たした。	これらの人が隣人とされたのは、彼らの忠順な部下を加えることで兵力が増強できるからである。 ××
56 なし	46 (辮髪の命令は) 彼らにとって苛酷にすぎる。

59 (チナのマンダリンたちは) 暴君李の圧制に対抗すべく王室の血を真に引く新皇帝 (弘光) を擁立した。 (弘光は) 皇帝がまだ平和に帝国を所有していた時代にも彼の費用負担で養われていた。	47 彼らは国家の福祉を最重要とみなし、この合法の王子が僧主と敵対する事態を回避した。× 宮廷で育ち、終始皇室の王子として扱われ、皇帝が朝政に煩わされていない時にもその愛顧を得ていた。
60 ついに彼は押し切られて王冠の重みを受け取った。こうした場合の重圧と苦悩はいかばかりか。	48 最後に戴冠に同意した。その重みに押しつぶされることを予見していたにもかかわらず。
61 (弘光は) 容易に李をおいつめることができただろう。 (順治が) もし王家に対して結んだ和約に反してチナに侵入してはならぬという良心を持っていたなら、新しい皇帝が現に保有している領土の保持を望んだ場合にはそれを彼に委ねるべきだっただろう。	鞏韌人よりも容易に逆賊の野望を打ち砕くことができただろう。 鞏韌汗は勝利の果実を口にした時、中国侵入に良心の呵責を覚えず、中国皇室との和約を破った時のように平静であった。この王子を生かしておけば、暴君が占有していない土地に彼を留めざるを得なくなるのではと恐れていた。××
62 彼はこう強弁した「王の血とは父から子へと引き継がれる王国の継承を意味する・・・」	彼は弘光が皇室の血統をうけた王子と認められているのを知りながら、勝利によって別のことを考えるようになり、正義をもはや問題にしなくなった。
63 タルタル軍は抵抗を根気と多勢と勇気によって打ち破った。 (弘光は) 彼の名が意味する輝きを南京で保っていた。	49 中国人は強大な敵軍に遭って戦意を喪失し、勝利者に投降し始めた。 南京での豪華な暮らしは、彼の地位にふさわしいものだった。△
66 Kianssi (江西), Huquang Honan, Suchuen (四川), Huquang ※ママ	51 Schiamsi, Fuquam Honan, Suchuen, Cancheu (貴州)
67 福建または漳州	52 福建及び漳州×
68 (唐王は) ついにチナの皇帝となったが、タルタル人はこれを認めなかった。 (一官は) 運命のあらゆる変転を体験していた。	53 これらの民も彼らの大皇帝も、タルタル人を威圧する力はなかった。 当時の中国情勢の理解に資するために、この人の一生を紹介して、読者の好奇心を満足させよう。
69 Annay (安海) 様々な職人のもとで卑しい仕事にも携わった。	南安 (Annay) ※誤り 何人かの商人のもとで働き、最後にある商人のもとで仕事をしたが、よいポストは得られなかった。
一官の洗礼名 Gaspar ガスパールの名をつけたのは、この名が東洋では王者を表すからであろう。※イエスを訪れた東方の「三王」の一人の名	Jaspar △
70 Camboja (カンボジア) 日本では飢饉に続いて疫病が発生した。	Cambaye 疫病について飢饉が発生した
71 彼の主人やその腹心が異教徒なので (亡くなっても) ミサや代祷の必要が無いのをいいことに、キリスト教徒の責務を忘れて彼らから財産を奪った。 彼は信仰を捨ててはいなかったが、守ってもいなかった。死者のカンボジアでの資産の正当な相続人も彼 (の詐略) を見逃した	彼は基督教徒だが、第八誡を遵守せず、信仰に違反した。 彼が上帝の律法を棄て、公然とキリスト教を放棄しなかったのは、商人の本当の相続者が良心から、当時カンベイで彼が上げていた利益をそのまま与えらるだろうと信じていたからである。
72 生者と死者を勘定に入れる。 彼にとって財産を返すより盗むほうがよく思えた。と同時に、チナに着いたら官人たちが勘定の提示を求めるだろうと悩んでいたが、どうせ神にそむく様な行為をしたのだから人に対してあれこれ考える必要はないと思い・・・神に恥じる気持ちを失い、信仰を捨て、俗世に対しても破廉恥に公然たる盗人となることを選んだ。	55 生者でなく、死者を考慮する。 盗めば本人は金持ちになれるが、貨物を返してしまえば一転貧しくなる。さらに、中国のマンダリンとの交渉で厄介なことになるかも知れない。そこで、今生の煩惱を振り捨てるためにこれらのものを留め置き、来世の補償を待つことにした。こうして一官は宗教を心にあまりかけず、ひたすら財産を保持増大することを考えた。そのための最も便利で妥当な方法が海盜になることだったのである。××
73 パルバロッサ (オスマンの海賊)	盗匪×

74 王の海軍は賊を破り、また賊を殺した者に多くの褒賞を与えるので、賊はすぐに王の兵の手に倒れるか、賊同士でつぶしあう。後に見るように、これは一官と別の海賊の間に起きたことである。	彼らは皇家の船が港に留まり海上に出撃しない時だけ海に出た。海に出ても他人の襲撃を受けないように短い時間に止めた。皇帝は巨大な褒賞をかけて海盜の頭目捕えるよう奨励した。たしかに、時には盜賊同士が戦い、一官を攻める者もあった。 ××
80 彼には海軍力と手兵がまるまる残り、海岸の將軍の称号を得た。 以前は破壊者だったのが、今や防衛者となった。	58 強大な軍の支持と人々の敬畏を受けていたので、海軍大將の地位を引き受けることに決めた。××
なし	59 彼はかつて人々に与えた災難を補償し、豊かにすることを約束した。
なし	彼は今や自由な貿易活動を海上で展開した。
一官ほど王から権限を与えられている海賊はいないが、その王自身から最も多くを盗んでいる。	彼はと部下は海を離れて陸に上がることができた。 ××
82 海岸の敵を掃討するとの名目で海に出たが、これは口実で、実は王から逃げたのである。	一官は皇帝本人から奪うのだから、私人から奪うより大胆である。
83 貧乏人から奪って金持ちを満足させる。	60 彼は副將を派して韃靼との戦いにあたらせ、自らは沿海の盜賊を掃討した。こうして朝廷に接近しようとしたのである。
84 このように王が財産をくいつぶされ、行政官が収入を得て王に借金が残るのは、世の常である。	さらに多くの富を集めるには国内で増税するしかなかったが、彼にはそれが圧迫されている貧民の恨みを買ひ、強い反対が起きることがわかっていた。しかし、同時に彼を陥れようとする人たちの批判を封じ込め、その怨恨をしずめる必要があった。
85 (オランダ人は) 銀が採れる日本やその他の場所、そしてヨーロッパに運ぶ商品がない。	61 帝王たちがこのように騙されれば、朝政もそれによって処理されることになる。俸給と国家の供養に依存する臣子こそがもっとも帝王に不忠なのであり、彼らは人民の労働の成果と錢財を食いつぶすのである。
86 3万ペソの貢物	62 別の場所さらには欧州でも、中国ほどの市場は存在しない。
87 チナとその海岸部では、王よりも一官のほうが王者に見えた。彼は海でも陸でも王よりおそれられていた。	63 6000～7000 ポンド※仏訳3万エキュ
2～3万ドゥカート	一官はオランダ人から皇帝本人以上に中国の王とみなされていた。しかし、この海盜は陸上の中国省内において海上よりも威風を吹かせようとした。 5000～6000 ポンド△
89 (一官の女は) 1636年に他のキリスト教信者とともに日本から追放された。	64 基督教徒が追放された後、彼女は皆とともに逃亡した。××
90 なし	65 一官が怒りを静めた理由はわからないが、誰しも不思議に思った消息によれば、
93 こうして長年の間、一官は海の賊、陸の暴君であり、王国の破壊者であると同時に、王への奉仕者と見られていた。	66 数年の間皆が一官の海陸における強大さを口にした。中国皇帝の忠臣だった時でさえ、中国の暴君のリストに入れられてしるべきだった。
95 (一官は) 王を見捨てず、タルタル人と妥協せず、個人の利益を求めず、戦争の危険を逃れようとしなかったが、これすべて君主のためであった。この忠誠、それも月並みでない忠誠によって彼は過去の暴虐の大半を吹き飛ばすことができたのである。	67 彼はもはや中国人を恐れる必要はなかった。しかし、その忠誠心は財産欲を上回っていて、ましてや韃靼に自分の命を投げ出すことなど考えもしなかった。強敵に抵抗する力のない君主を極力保護しようとした。機に乗じて忠貞の名を天下にあげ、海盜時代の所業を人々の記憶から去ろうとしたのである。
なし	彼の兵力は中国の一地区を守り、韃靼の兵力に抵抗しうるものだったと言われている。
96 Kiangsi (江西)、Chekiang (浙江) Huquang (湖広)	68 陝西 (Shiamsi)、湖広 (Huguan) 雲南 (Juana)
97 なし	(洪承疇は) 一官の尊敬を受けていた。△
98 日本の王	69 日本天皇× ※当時の欧人の記録に見える「王、皇帝」はふつう將軍を指す。
鄭芝竜は同国人から必ずしも愛されていなかった。	日本人の武勇を中国人の武勇より信頼していた。
なし	(天皇は) いつも興に乗って
99 これほどの重要事には王の要請と回答が必要である。	70 政治に責を負う大臣がいるから、事あればその上奏が必要である。×

一官は日本の皇帝の軽視を甘受する気が無かった。	一官は日皇と同等の地位ではなかった。二度と要請しなかったのは朝廷内の顯貴に侮られないようにするためであった。××
100 南京副王であるチナの官人を更迭した。	マンダリンを総督に任命した。××
順治はこの石で二羽の鳥を殺した（一石二鳥）。	二つの重要なことをした。
高位にあるチナ人マンダリン	このマンダリンは機知に長けた熟練の政治家である。
Pelipaovan	Pelipaouan △（博洛）
タルタリアのエル・シド	韃靼人の大英雄
102 兵力は陸・海あわせて 100 万を越える。	71 その省には海上の人員は別にして百万の兵がいた。
まず最強の省に侵入したのはこのタルタル人の傲慢さによるものだったが、当初は非常に手こずった。	これは大胆な襲撃であった。最初にこの省に侵入した時司令官は危険を犯しさえした。
103（隆武は）よみがえったらしい。	72 相当長時間抵抗したらしい。
なし	鉄鎖も牢屋も彼の勇気と信念をくじくことはなかった。
104 一官がこの軍事行動に協力し、部下を安堵し、かれらがタルタル人に抱いている恐怖をとりさらねば、艦隊に必要な武器と船の入手は容易でなかった。にもかかわらず、(タルタル人は)彼から財貨を奪った。	一官の部下たちを、一官が落ち着かせ、韃靼人のために働くよう仕向けない限り、艦隊に必要な武器と船の入手は容易でなかった。これらの人々は韃靼人を怨み、彼らは一官の財貨を掠奪した。
なし	73 彼は大量の銀を所有していた。
106 明らかなのは、王に対して不忠な人は憎主に対しても忠実でないということである。	74 確かなのは、この種の臣子は中国皇帝の朝廷にのみ出現するということである。韃靼人はここから彼らが異邦の君主に本当に忠実ではありえないことを知った。この手の連中がしばしば合法的君主に背き、本国の主人を売るのである。
107 一官は罪の有無にかかわらず、有利な処断が下されるようにする道を知っていた。	罪があろうがなかろうが、事態が落ち着くことはないだろうと分かっていた。××
108（一官が神に罰されたのは）彼のような栄華を得ようとしてその悪行を真似る者が出てこないようにし、彼の罰を見た者がその前例を憎み、悪行には悲惨な末路が待っていることを知るようになるためであった。	多くの人民と省を苦しめた暴君について悪報が下った。しかし、かつて彼の幸運がその出世を目撃した者に嫉妬を引き起こしたように、今度は彼の滅亡はただ同様の難に遭った人たちの同情を得ただけだった。
110 Pelipaovan も同様に属省の副王を指名した。この権利は君主順治から委託されたものであり、彼は個々の副王に対しては上位に立つ。	75 博洛にも配下の臣属がいる。ここから分かるのは、王号は皇権の標記ではなく、朝廷の許可を得て官府を設ける執政権を確保するものでしかないということである。××
111 王と 3 人のおじが守り、帝国全土にもその遵守を命じていた公正さの信用を落とした。	77 人民はひたすら勝利者の寛大な措置を期待していた。順治とその叔父たちが各所で仁政を敷いていたことを聞いていたからだ、総督の暴行により彼らは新政府への見方を変えた。
112 なし	これが、南部の省の被害が他に比べて大きかった原因である。
113（紹武帝が）12 月の初めに即位した。	先月つまり 12 月に××
（広東に朝廷が置かれたのは、）マドリッドにコンスタンティノープルの総主教が着任するようなものである。	なし
115 なし	78（広東旧城の）門が開いていて
116 3000 エスクード	79 600 ポンド※仏訳 3000 エキュ
政務についていた皇帝は彼の面前ですぐに処刑するよう命じた。	皇帝は彼らを見ると玉座を降りて、その場で処刑を命じた。×
118 チナの旧副王の宮殿	80 中国皇帝が居住していた旧総督府×
119 多くの女性を愛した結果が、犠牲を増やすことになったのだということを彼（皇帝）に知らしめた。	愛の結果が自分の死をもって表現した愛だとは奇妙なことである。××
彼は眠りと恐怖に打ち勝たねばならなかった。玉座を降り、人の生死が急速に変転する時には、沈着さと理性が必要だと考えた。	彼はそこで死を待とうとは思わなかった。恐れあるいは疲労から玉座を降りた。この重要な役割を演じる必要はもうないと考えた。彼の尊厳はもはや消滅しようとしていたのである。
120 旧城から 2 レグア	81 4 マイル※仏訳 2 リュー

艦隊は逃げ去り、また二度やってきた。一度は夜の火攻、もう一度は昼にである。これはこの哀れなまちにとって悲しむべきことだった。	艦隊がまちを焼いた後、夜にもかかわらず火の手は彼ら自身の姿を照らし出すほどだった。彼らが引き上げた朝にはまちの大部分で凄惨な光景が見られた。××
なし	以前に韃靼人は繁栄していた数省を破壊していた。
124 マンダリンの家の奥の院は妻を閉じ込めておくために、重視された場所である。	83 彼ら(韃靼人)は妻子にものを与えるためにそうせざるを得なかった。×
126 女性たちを軍営に連行したのは	84 彼ら(韃靼人)が中国に来たのは
約千人の女性	85 多くの女性
(兵士たちは)聖母像(la Señora)まで持ち去った。	富貴の家の女性がもっとも辱めを受けた。
133 戦場でのタルタル人の横暴	88 軍隊を近隣の土地の征服に派遣△
134 Xaokin (肇慶)、Xaochen (韶州 ※nはuの訛)、Nanchium (南雄)、Hochicheu (惠州)	Xao Chin, Xuochen, Nanchium, Hochicheu
136 Shinhianuan	90 紹武王×
Gueivan (桂王)	Guequan
139 広東から李が率いた兵 20万	91 二万×
141 トロイ人はそのことに気づくのが遅すぎた。	92 トロイは強力な軍隊に包囲されて十年も持ちこたえた。××
142 (タルタル人は)次の日に反撃した。	時機を失わず△
143 肇慶城内に残った広西人が広東人の傲慢に対する意趣返しのためにまちを守らず	93 別の一方は広東・肇慶人に報復して、援助に尽力せず
147 他の軍隊	95 韃靼人が肇慶で敗北したのを聞いてかけつけた援軍
148 (報告の)日付は特定できない。	事件の細部が分からない。
149 (桂王生存の情報もあるが)私にはそうは思えない。こうした例は、カステイリヤのペラヨ、アラゴンのガルシア・ヒメネスしかないからである。	ただカステイリヤ国にペラヨがおり、アラゴンに他のもう一人のガルシア・ヒメネスはいない。×※この注に「以上両国均在西班牙、余不詳」とあるように、訳者にはまったく意味が取れていない。ペラヨはレコンキスタを開始したとされるアストゥリア国王、ガルシア・ヒメネスはソブラルベの初代国王で、いずれも失地回復の前例として持ち出されているのである。
150 (順治の軍は)世界を征服したのではなく歩き回ったというべきだろう。ただ征服を終わった土地を歩き回るだけでもこれ以上速く歩き回ることはできない。	96 彼らの征服地は侵略した国家の多さには及ばない。もし、大軍がこれらいくつかの大国を通過するだけでも、それに要する時間は征服に費やすのと同じくらいだろう。
153 同じ王のことが別の名前で語られている。	98 この君主にはおそらく二つの名前があるのだろう。
Xacatia (ジャカトラ、iはrの訛)	Xacasia
154 Bernardo del Carpio ※スペインの伝説的英雄。囚われの父を解放したことが、鄭成功の境遇になぞらえられている。	なし
155 広東省ではタルタル人に服属した後、大きな暴動が起き、さらに進行しそうである。	99 広東省で韃靼人は最大の抵抗にあった。彼らはすでに抵抗を抑え込んだと自信を持っていたのにである。中国人の闘争が一定の成功を収めたのにはそれなりの理由がある。××
彼は王位を維持するという名目で、彼を擁立した市民たちから掠奪した。	彼が哀れな人民からさらに高圧的に搾取したのは、人民が彼の起義を支持せざるを得ないと考えたからである。××
156 坊主(Bonzo)は悪魔が荒野に置いた修道士で偶像に仕えている。修道士と呼ぶにはあまりに卑劣な輩だが。	100 和尚は道に迷った者の呼び名である。魔鬼の誘惑により孤独に隠棲生活を送り、偶像を静かに礼拝している。
彼(タルタルに投降した王族)は安全を保証されながら大きな危険にさらされ、殺された。王家が帝国を失った後に、王家出身であること以外に何の罪もない人間が死刑となるとは、恐ろしく、野蛮なことである。	彼にはなお生命の危険があったが、韃靼人はそれを全く気にかけていなかった。これは人を造反に追いこむ奇妙な法律である。同一の血統に出自する者が皆不幸にも国を失い、命も奪われたのである。××
158 マカオと広東の距離 40 レグア	101 80 マイル※仏訳 40 リュー
159 世界に類を見ないほど、気取り屋で信用ならず、心配性の民族	102 世界でもっとも猜疑心の強い民族

160 幾度も友であるチナ人のためにタルタル人に宣戦しそうになり、この場合に保つべき中立性を失うところであった。チナに関する古記録にもあるように、かつてマカオのポルトガル人がチナ人の対タルタル防衛を助けようとして、うまくいかなかった。	直近の戦争期間において中立の立場を一貫して取ったのは、過去に中国人が強敵に対抗するのを助けようとしたことがきわめて危険だと認識したからである。これは中国との古い関係において立証されていることである。
決断の時機を失ってはならなかった。決断が遅れば、それだけ後悔することになるからである。	重大事については色々考慮するのが有益である。後悔したくなければ、慌てて決断するべきではない。
162 こうした性質はインディアスの全都市も共有している。	103 こうした条件下で、印度群島の都市と工場は日に日に減少している。××
スペイン全土に2、3年雨が降らねば惨状に見舞われるのと同じことである。雨は大地を潤すと同時に、船を運ぶ海水ともなる。	もし数年船が来なければ、スペイン自体も同様の状況に陥る。天から降る雨は、四方から無数の船を運ぶ大海のように常に富裕な国を潤してくれるわけではない。××
163 国王に支払う税は10%で、税は400万ペソのうち40万	国王に支払う税は百分の一で、関税が10万ポンドなので輸入は100万ポンドとなる。×
この年にマニラから100万輸入	数年間で30万ポンドの銀を輸入※仏訳1年で300万エキュ
164 ヨーロッパ人やカステリヤ人が戦い方も知らないタルタル人に降伏するのはよくない。	104 欧人は彼らに代価を払わせようとした。ポルトガル人は一心に民族の榮譽を守ろうとして戦術も知らない蛮人に簡単には屈服しなかった。
165 このまちは帝国の主人なしには生きてゆけない。日常の物資補給がなければ生きられないし、チナと敵対したら助けてくれる者もない。	マカオは生存のために中国の大総督に依存せざるをえない。他の地方から援助も得られないし、強大な敵を防ぐに足る援軍もないからである。××
北京-マカオ間の距離 およそ600レグア	一万二千里×
167 1日に60人以上の殉教者 ※マカオから1640年に日本に派遣された使節団の殉教を指す	105 60人以上の伝教士×
我々の話し方（上記の殉教を指す）で神にこれらの贈り物をしたことにより危険から守られたのである。この時も同様に我ら人間の野蛮な言葉で話し続ければ、神は同じように納得されるであろう。神の御業を適切に表現する言葉は人は持たない。	神は危急にあってマカオを守ることを望まれ、住民の教会への奉仕に報いた。たしかに、上帝の忠実な僕はそこで保護を得て、大いに主の名の栄光を称えたのである。
これらのキリスト教徒たち 新たなキリスト教徒たち	上述の教会 注一主にイエズス会を指す 最近マカオに建立された教会 注一フランシスコ、ドミニコ会などを指す。※ここで言っているのは宣教師のみに限られない信者共同体のことであり、「新たなキリスト教徒たち」はヨーロッパに比べて新規に参入してきた人々を指しているの で、修道会のことを言っているのではない。
170 なし	107 韃靼人は海盜を片付ける前に海南島を征服しようと思った。
海南島と広東の距離 40レグア	80マイル※仏訳40リユー
チナについて書かれた本に	中国に関する報道によれば
171 (南部の住民は) 交易以外にはチナ人と接触しない	中国人と交流がない。△
172 チナを征服した東・北タルタリア人は海から遠い土地の出であり、海を見るのに長城から広東海岸まで600レグアの距離を行軍してきた。	108 韃靼人とくに北方の韃靼人は、中国を征服し大帝國を跨ぎこしてはじめて海を見た。
ローマ人はカルタゴ人との最初の戦いで	ローマ人は第一次ポエニ戦争で△
173 Aciacaの戦い ※ラテン語表記 Actiaca pugna のtが脱落	アクティウムの戦い
船酔いせず海に乗り出した。	韃靼人は海上の活動に慣れ、海戦の準備や敵の追撃に神経を使う必要もなくなった。確かに彼らは熟練の水手となったのである。××
174 (海賊は) 同胞に対してタルタル人より残忍だった。	109 行為は韃靼人と似たようなものだった。
175 よき国家理性 (buena razón de Estado)	聡明な人
176 この省(遼東)の人は(タルタル人に)反抗する諸省の人々を外国人のようにみなしていた。	110 この省の居民は別の一省の民を異邦人、外国人とみなしていた。

(文の副王が中国人であることについて) 確かなことは分らない。同省人はそれを否定しているし、こちらのチナ人も推測でそう言っているだけである。	この点については、あの將軍のケースと違って、肯定はできない。
177 しかし、チナ人はその本性からして不寛容で、とくに同胞の間ではそうである。	しかし、中国人は本性凶暴で、同胞に対してもそうなので、お互いの間に寛容さを欠いている。
178 理由無き残酷は臆病者の特質である。	111 別の種類の人たちの残忍な本性は、彼らの卑劣、怯懦と墮落を証明している。
179 この副王は残虐さゆえに交渉を成功させられなかった。世界のどこでも厳しさは交渉を成功させない。	総督の残忍さは彼の主人である皇帝にとっては何の利点もなかった。事を行うに厳しすぎる人が政治を適切に処理することは珍しいからである。
この副王の交渉下手は海賊の制圧の局面において、耐え難いほどの損害をもたらした。	総督の悪行が招いた災害は信じられないほどで、彼は種々の卑劣な手段を弄して海盜を制圧しようとした。
なし	陸上では家が焼かれ
180 一人の悪い大臣だけで、一つの帝国、国民を思ふべき対象とするに十分なのである。その帝国と国民がいかによきものであっても。	112 一人の軽率な將軍が事の処理を誤れば、彼は過去に人々の尊敬を受けていても、人民全体からの罵倒の対象になる。××
なし	海盜が積極的に進攻を準備していることを意にとめていなかった。
182 真のタルタル人であれ、タルタリアと境を接した地域のチナ人であれ	113 韃靼人は
184 タルタル人に降服した集落で、野蠻で横柄な兵士によって掠奪の災厄を蒙らないところはなかった。	114 海盜は海と川に出没するだけでなく、田畑やまちを破壊し、韃靼に帰順した住民に息つく暇も与えなかった。
186 広東占領を述べた時にこれに言及しなかったのは、まず帝国全土の陸地の征服について述べ、その後海戦をとりあげることで、両者の混線を防ごうとしたためである。	115 中国がすべて征服されてから、これらの消息は中国から伝わってきた。私の考えでは韃靼人と中国人の海陸の戦いには違いがある。××
187 広東での海賊対策に必要という名目で彼を広西から召還した。	広東將軍を広西省から召還した。広西省の征服後、博洛は將軍にその統治を命じていた。彼は海賊平定のために彼が広東に止まることが必要だと考えていたのである。××
188 タルタリアの大勇者ローラン (Roldan)	116 韃靼の勇将×
Pelipaovan の意志でなければ、これほど早く敗北を償う更迭は起きなかっただろう。	もし彼が怒りを表してたちどころに新しい將軍を任命して広西の征服統治に向かわせなければ、これほど早く敗北による劣勢を挽回できなかっただろう。
(修養甲は) 王の信頼を得ていた。	この君主は新しい臣民の主人である。×
191 チナは朝貢国に対して軽い朝貢とひきかえに自由を与える。	117 朝貢国の王は自己の子民の安全のために××
193 四旬齋の日数 46 日 ※日曜日を数えると 46 日	119 四日齋 (誤植) 40 日
194 この事件は不実な異教徒を恥じ入らせるし、宗教家とよばれる人に、黒人それも奴隷でしかも逃亡奴隷である人たちが宗教というものを教える出来事だった。	一定期間の肉食禁止という教会の規定を不要さらにはでたらめだと見なしている異教徒は、たとえ宗教を改革しようと妄想していたとしても、これらの黒人から宗教の力を認識するであろう。××
195 タルタル人曰く「戦闘の際の勇氣よりこの答弁のほうが賞賛に値する。」このように野蠻人にさえ、この答弁に見られる理性の光を否定できないのである。理性は石をも納得させ、真の神は野蠻な動物とは違う目的で人間を創造された。ここから明らかなのは、野獸同様に生きている人間には神の法も神のもとに導く法も無意味だということである。野獸の道を通れば野獸としての最期が待ち受けているだけで、神のもとには到達し得ない。理性によって理性の終着点に達するのである。というのも、法は知識にもとづいており、知識は善に達するのにふさわしい手段だからである。	なし
198 (黒人たちは) 武器を手放さず	120 武器を置き×

(この新たな教徒たちには) 神に対する義務が少ない。というのも、生得の理性の点で彼らと他の人たちに違いはなく、この超越的な理性は万人を神の僕となしうるのだが、ヨーロッパ人のほうが何世紀にもわたって祖先から信仰を受け継ぎ、カトリック信仰の光と認識に満たされ、神の認識において確固としているからである (ヨーロッパ人のほうが神に負うものが大である)。	上帝は自己の創造物に対して義務を持たない。一切の創造物は彼の子民奴僕であり、彼らは永遠に神に対する借財を清算することはできない。
204 副王の出動はマカオに対するものではないかと多くの人が疑った。このまちの近くまでやってきたことが疑いを招いたのである。勝利は人を増上させるので、この副王もそうではないかと疑われたのである。しかし、これを否定する向きもあった。なぜなら馬を余り連れておらず、マカオの城壁を打ち破るのに必要な大砲も備えていなかったからである。そして、こうした懸念はすぐに消散した。彼はマカオを攻撃するそぶりも見せず、広東に凱旋したのである。彼は寡黙で、如才なく、向こう見ずで信用できない人物なので、安心はできなかったが、油断は平安をもたらさない。	122 なし
206 Lantao (南頭) * 金国平『西力東漸』(澳門基金会、2000) pp. 46-49 参照	123 藍塘 (Lautan) ※ Lautao の誤植
Anssan	124 香山 (Anslan) △
208 なし	心配する必要がなかった。××
209 なし	125 帆をかけた船
210 Li の字は徳、洗練、榮譽、尊敬、人に対する礼節、交渉における慎重さ、慎ましやかな態度、長上に対する服従、若者への愛情、老人への尊敬を表す。	李の字は2つの言葉からなり、天性の知恵と徳行を表す。××
218 4つの村	128 近隣の城市と鄉村
100 人を殺す	多くの人
219 (ネロが) タルベイアから	129 なし
220 (2人の張は同一人ではないが、) これは奇妙な符合であり、この帝国を最初に火にかけたのが2人の暴君李と張であるとすれば、この火災を現在終息させずに炎を再びかきたてているのが別の李と張である	130 中国人は国土を蹂躪し始めた人とそれを再開した人の名前が一致することに注目しているが、前者の姓は李であり、海賊の首領の姓の張とは違う。××
222 暴虐が賞賛され、無辜の者が困窮する。	131 他人を圧迫する人は他人の歓呼を必要としない、圧迫を受ける人は自分を守ってくれる人を見つけれない。××
223 (盗賊の頭領を) 彼の油断によってか、あるいは彼を見離れた部下の裏切りによって捕まえた。	132 將軍は彼を突然捉えた。その時部下は恐れて彼を見捨てて逃げた。×
大海の水を壺一個で汲みつくそうとするようなもので、いくら懸命にやっても海を空にはできない	將軍は大海の一滴を汲めば、潮水を減退させられると思っていた。×
225 (訓練すれば、中国人は) 世界最高の兵になれる	他国同様にすぐれた兵士
タルタル人とともにやってきたヨーロッパ人	幾人かの欧州人
226 タルタリアから遠い省のチナ人	133 韃靼地方を遠く離れた南方諸省の中国人
227 軍事評議会	二つの兵部△
229 物事において極端は忌むべきことだが、中庸を得るには一方の極から最初は他方の極に押しやる必要がある。	134 彼らは極端なやり方が間違っていることを知らないわけではなく、最終的には的確な措置を取ろうとしたが、彼らは極端から別の極端に至ることが必要と考えた。×
これらの海賊の間では懦弱さは余り見られず、軍事的によく鍛錬されていた。	中国人は当初軟弱だったが、最後は勇敢な軍人兵士となった。
こうして時とともにチナ人が勝ち、タルタル人が負けるようになった。	ただ不幸だったのは、中国人がもっと早く敵に打撃を与えられなかったことである。
これらの戦闘において、よくあることだが、噂が先行して四方に広まった。タルタル人はこれを隠蔽しようとしたのだが。	彼らは至るところで殺戮を行い、四方に名をとどろかせ、最近の戦争において得た最小限の成績を保った。韃靼人もまた軍威を保とうとした。××
231 二人の有名な海将とともに	なし
234 報告には言及がないが	137 消息はここで途絶えているが×

235 Calao ※ Colao の訛 Chim (陳)	Colao 秦 (Chin) ×
240 文の副王のこの行為は、正義を離れ、厳酷さに傾いた点で、正当化できるものではない。	140 民政総督は厳しい手段を取ったが、何の収穫もなかった。彼は常態に反して、暴力を用いた。××
245 信仰していた偶像 Catilinas (カティリナ) ※共和政ローマ期のカティリナー党による国家転覆の陰謀をたとえに使っている。	141 菩薩即偶像× 塔琳朝 (Cataline) ×
249 チナ人はすれっからして、彼らにはこれほどの英雄的なふるまいを真似する者はほとんどいない。	143 自分を人の模範とすることができないと自覚している中国人は、同胞の意志堅固さに不安を覚えた。××
252 Caton El Utiense (ウティカのカトー) ※小カトーのこと	144 Utca × ※ Utica が正しい。
254 この有名な将官は大きな賞賛に値すると思うので、彼の勇気についてここで特筆した。	145 彼の勇気は同胞の中でも極大の声誉を博した。彼の最後の冒険は機会があれば本書の中で評論し、記述しよう。×
しかし、海賊の活動はまだ終わっていない。	146 彼らは毎日敵を揺さぶっている。
256 城外の海賊、城内のタルタルの人馬による喧騒は大きなものだった。	海盜の城外における呼び声は城内の韃靼人を上回った。××
ヨーロッパ人の間では夜に城壁のところで銃声がおきれば、戦闘開始となる。	147 ヨーロッパではそうではなく、士兵が発砲すれば恐怖を感じる。××
(この叫喚は) 私の考えでは、威嚇ではなく、彼ら流のやり方で人々を一体化し、景気づけるためのものだろう。	彼らは常に呐喊と喧嘩で人員の不足を補い、こうするの慣れていて、大軍の中で大声で呼ばわり、同伴者たちを団結させる。×
259 大タルタリアの王順治や、「チナ人の征服者」で本省を管轄下におく Pelipaovan の手を煩わせるまでもなかった。	148 韃靼の皇帝はこれを重視せず、せいぜい「中国の征服者」を派遣して広東省を統治させる程度であつたろう。×
260 ハンニバルが戦場で一息をついたのと同様に、タルタル人にとって油断が入りこむ余地があった。	中国人にとって最善策は、韃靼人にしばし中国の栄華を享受させることだった。彼らがこれを受けて油断すれば、彼らに勝つことも可能になる。これは(ローマが) カプアでハンニバルを破ったようなものである。
タルタル人の支配(元朝)期間 90 年	80 年△
261 なし	149 (レコンキスタの偉業は) 軽く軟弱な中国人にはなしえない。
262 Zahori ※ スペイン語で古い師の意味	150 Cahorri
264 (アンチクリスト出現の予言に似るが) その類似は表面的なもので、本質的なものではない。真の予言と順治についての不確かな予言の違いを見分けるには僅かな神学がありさえすればよい。	151 なし
266 かくも急速に無抵抗のうちに滅亡したことがチナの周囲の諸国にどのような影響を与えたか。	152 中国人の防備方法が間違っていたために、彼らが新たな主人に屈服する情報が伝わる前に、彼らが受けた打撃を知ることは難しかった。××
この半球内の諸国の中で	アジア諸国
日本は外国との貿易において常にチナを真似てきた。	少し前に彼ら(中国人)は国外で貿易を行った。××
違反すれば死罪	体罰
267 トンキン、コチンチナ	なし×
Sihan	シヤム
500 レグア	5 ~ 600 リーグ
268 現在では以前同様の頻度でやってくるのが期待される。	153 彼らはおも以前同様にやってくる意志を示している。×
(チナ人は) 独立の居住区に住む者もあれば、その国の領土の土地に散在して住む者もいる。	彼らは少なからず農場を持ち、農場で生活しているが、多くの移民先でもそうしている。×
1649 年にチナ人がマニラ市に対して反乱をおこした時、渡航者は 4, 5 万だった。※ 49 は 39 の誤り	1649 年だけでも、フィリピンでマニラと対立した島には 4, 5 万人いた。
269 私が執筆している時に	なし
私は笑って、彼の目をさましてやろうとした。	こうしたデマを聞いた人は極力訂正しようとした。

(チナからメキシコ在住のチナ人に送られた) 手紙の日付と、事実を記した報告がチナから届いたのが同時期であり、まさしくその時に帝国はタルタル人に屈していたのである。※手紙は報告より後に書かれたものということになり、パラフォックスはここから手紙が事実を糊塗するために書かれたと考えたのだろう。	彼らはこの手紙をみて、注目すべき点を見つけた。それは手紙の日付とこの件に関する詳細で確実な報道が一致することである。この時すでにタルタル人は中華帝国の征服を完成していたので、報道は疑いなく真実である。×
私は笑って	154 その中国人の話聞いた人は冷笑して××
270 しかし、彼はふさぎこんでしまった。私には彼が兄弟より私を信じているように思えた。	この哀れな男は違う情報を聞いて憤り、憂鬱な面持ちで去っていった。彼は最後には兄弟の手紙でなく、別人の話のほうを信じたいらしい。××
271 なし	155 彼ら(タルタル人)が以前に中国のマンダリンの前で膝まずいていたように
このため、チナ人が国を失ったことは、他国人にとっては大した痛痒ではない。	中国人だけがこの大帝国の政局の変化を心配している。
コチンチナの小王(Reyecuelo)はこの(チナ)王国と接した Xunchin(※トンキンの訛)王に背いた副王の孫である。	この君主はトンキン王の総督の孫で、総督とその人民はトンキン国の小洲で暮らしていた。××
272 (トンキンとコチンチナの) それぞれがチナと陸続きだった。	南と東は海に面し、北側と隣のトンキンは中国大陸とつながっていた。
戦争が続けば、金と人を費やしたが、土地と栄誉は手に入らなかった。なぜなら敵を助ける内通者がいたからである。	同時に方針通りに戦争を続ければ、最後には大量の金銭を費やして軍隊を維持する必要があるが、双方とも得るところはない。××
(清軍が出動すれば) 騒乱をおさめ、その原因である両国を奪うことで戦争を終わらせるだろう。両国ともチナに近く地続きだからである。	両王の争いを解決できるだろう。両王は征服者と境を接し、その威名にひれふしているからである。
コチンチナ王は高慢で pocas narices	強大ではないが、非常に凶悪である。
Tayfu ※ Faifo の訛	西湖(Tayfy) △※注であるいは Tay Ho(紅河)とするが、誤りである。
273 これらの名分(国を裏切った者との交易は認められない)を口実にして	彼は彼ら(中国人)に大王による虐待を感じさせようとした。××
他人の不幸に対しては、この王がやったように、彼に会うために下手に出ている相手に対して傲慢に出れば、相手はあつかましくは出てこず、卑屈な態度を示す。	156 彼はこの哀れな人民から搾取することが自分の身分にふさわしくないことだとは思っていなかった。彼があえてこのように中国人を扱ったのは、かつてはこのように扱うことを願っていなかったけれど、今や彼らを軽視していたからである。××
274 (日本王は) 一方で勇敢、強大を自負していた。	157 彼は十分に勇敢で強大な君主とみなされていた。△
275 日本に潜伏している者	彼を匿っている者×
昨 1647 年	158 1647 年
Nangasaqui	長崎(Nangasacka) ※英訳 Nangasacke
276 7月26日	7月6日と20日×
9月6日	9月16日△
ヨーロッパ流の甘言、慫慂さはあったとしても	たとえばポルトガル人を厚遇する気持ちがあり、彼らを友人扱いしていたとしても
この時に長崎に入ってきた多くのオランダ船	毎日長崎に入港するオランダ船
277 ムルシア(Murcia)	159 馬西亜(Marcia)
Valença	Valentia
セビーリャ	アンダルシア
278 山を海に移す	大海は日本人によって山に遮られた一方の側に移される。××
なし	岸边や砂州に投げ出される。
山を海に移すというのは誇張ではなく、次のように理解するべきである。「奇跡のグレゴリオ」のように山を移したのではなく、石を一つずつ移していったのだろう。※「奇跡のグレゴリウス」は三世の聖人で、山を移してそこに教会を建てたという伝承がある。	日本人が山を移したのは神話だとみなす必要はない。確かなのは少しずつ山を移したのであり、過去の聖人が奇跡を現したように大山をそっくり移したわけではない。

279	この川は水量豊かで、町のあたりでは川幅が4分の1いや3分の1リーグしかない。この狭いところが、ある朝宮殿の前方で橋によって封鎖され、彼らは完全に閉じこめられた。	ポルトガル人はついに町から半里のところまで河道を遡ったが、数日後の朝、船上の人は河道が橋で封鎖されて分断されるかっこうとなり、橋と町の間に閉じ込められていることを発見したのである。××
280 (長崎奉行は)	この使節について皇帝に手紙を書く一方で、ポルトガル人にある恐れと不信感を抱いていた。彼らがガレオン船で去るのではないかと恐れたのである。	160 彼はポルトガル使節到着のことを日本の宮廷に報じた後、使節はすでに民にかかったので、これで彼らを速やかに帰らせることができると考えた。×
	幅3分の1レグアの河	このような大河
281	これほど遠い国を征服するのは不可能である。	欧州の帝王がこれほど遠い国を・・・
	(1万のスペイン人で日本を征服できるという日本人の言は) 明らかなおべっかというべきで、わが国民でさえこうしたお追従は真に受けない。	スペイン人はこれを真に受け、非常に得意がっている。×
	こちらが命を失う危険なしに、日本の王の兵を10万いや1万とで殺せないだろう。	1万あるいは10万の必死に抵抗する日本人を打ち破って征服できると考えるのも、ばかげている。
283	この人たち(日本人)の強さと気質を知る者は、私のいうことが確かだと思うだろう。	161 日本人の特徴と強さを知る者は、もし彼らが自身の力量を確信すれば、これらの事態の処理方法を変えようと断定するだろう。
	わたしが長々と述べたのは、このようにすれば我々の聖なる信仰の宣教師に門戸が開かれるよう王ないし王国を説得できると思ったからである。	私が長々と述べてきたのは、哀れな人民が自己の安全のために心配する必要がなくなり、彼らに幸福を指し示す人の入国が許されるようになることを希望してのことである。×
	日本と朝鮮の距離 30 レグア	遠くない△
284 (タルタル人が日本を征服すれば)	チナ同様に信仰への門が開かれ、チナ同様に日本は自らの恐怖心により自滅するであろうし、神にとって開かれぬ門はないことを思い知るだろう。なぜなら、神は人間に思いもつかない鍵を使って門を開くことができるからである。	日本人の征服への対処は中国人のそれと比べても有効なものとならないだろう。哀れな人民は彼らには主人がいてその進入を防げないことを最後に承認せざるを得なくなる。主人はやりたい時に好きな方法で進入できるからである。しかし、その方法を日本人は知らない。×
285	日本の王はチナの滅亡を知ると、日本にいるチナ人を裏切り者、臆病者と責めた。	162 中国が清の手に落ちたという知らせが伝わるや、彼らは叛賊、懦夫とみなされた。
	天下 (Tenca) の大令	Tengan 大議会の法令××
	出航命令があまりに急だったので、禁制品の武器や皮革の持ち出しが容認された。	匆忙のうちにあって、彼らが皮革や武器といった商品を持ち出すことは許されず、これらの商品は禁輸とされた。
286	この風をモンスーンと呼び、逆風時には数ヶ月待たねばならない。この海では1年の中で風の方向が時期によって決まっているが、これはスペインで風によって四季が分れているのと同じである。	その海域では、我々が画定した季節に応じて、1年の風はその時々に応じて発生し、その順序は不変である。××
	なし	163 賤しく、卑怯な魂を持つ人民△
287	広東の副王たちは(日本の)大征服に十分な力を持たなかった。しかし、もし順治王が彼らと同じ怒りを覚えて、	彼らはこれで納まらず、怒気のはけ口を求めたが、勝手に日本に進攻することはできなかった。若い順治がこの争いにまず関心を持つべきだったからである。
	順治を侵略する気にさせるのは正しくない。なぜなら、これは暴虐の行為である。善を収獲するためとはいえ悪の種をまくことは不正だからである。	我々はそのから好いことが得られるとは思えない。だから、我々は篡奪者や覇王の出現を望まないのである。×
290 (スキピオは)	思慮深いカトリックいや教皇がするような回答をした。	164 哲学者、真正のローマ人と呼ぶにふさわしい回答をした
	私自身、カルタゴを滅ぼすよう命じたのだから。	なし
291	カピトリノの塔の上に軍旗を立てる。	都城(ローマ)の主人となる。
	ローマの騎士たちの数セレミンに上る指輪	なみなみとしたブッシェルに盛られた指輪
292	同じように聖ヘロニモはエゼキエル書の注解を中断してこの悲劇(ローマ劫略)を嘆いている。 ※ヒエロニムスはアラリックのローマ劫略の報を聞いて注釈作業をしばらく中断した。	165 教会の神父や長老の話では、聖ジェロームはローマの劫略を嘆いて、遲疑することなく聖書の阐述をしばしばやめたという。
	この都市(ローマ)にはそこにいるといわれていた世界の女主人がいなくなったので、野うさぎでもそれを占領できたのである。	ローマ帝国はすべてを持っていたが、取るにたらない鬼のような動物に占領されたことは言うておかねばならない。

294 タルタル人は特定の偶像、偽神を持たない。	166 韃靼人は古代に崇拜されていた偶像と神霊を知らない。
天を見た目で崇拜するだけである。高く、大きく、明るいものを見て、その高さや大きさ、明るさが崇敬の心と呼びおこすのである。	彼らは礼拝するだけで、目で見た天を賛美するといったほうがよく、その明るさや大きさ、そして天が生み出す奇跡にまで思いを致すことがない。
Bonzo	Bonzi
295 Pagodes	167 菩薩×
悪魔の荒野にはマカリオはおらず、アマリリスややつれ顔はここでは信用されない。むしろチナの荒野に住む悪魔の隠者たちは華やかで丸々としており、彼らのくらしぶりは慎ましやかなものではない。※マカリウスはエジプトの修道僧。アマリリスは同時代にペルーからローベ・デ・ヴェガに送られた詩 (Episotola a Belardo) の作者のペンネーム	たとえ、これらの哀れな者たちが質素に暮らし、修行に励んでいたとしても、肉欲を抑え、自らを磨くことをしない。韃靼人も、人々がいうほど僧侶たちはやせていたり、奇形だったりすることはなく、むしろ健康で太っており、体が強いことに気づいた。
296 (仏僧の存在を黙認しているタルタル政府の) 行動はキリスト教布教に大きな意味を持つ。	しかし、基督教の全国布教許可に関してこれ以上重要な決定をすることができなかった。
297 (宣教師は) 兵士とくにタルタル人に仕えるチナ人に迫害された。	168 韃靼に反抗する中国人から人身と財産の損害を受けた。×
298 教会の祭壇上の聖像	教会聖壇上の神父×
(タルタル人は) 素直で単純、礼儀正しく、どんな宗教も拒まない	民族全体が非常に礼儀正しく、奇妙なまでに人の気分に合わせて。××
299 姦淫を実行すれば	常習犯なら×
(タルタル人は) 平和な時は、愛想がよく気さくである。	彼らには天性の長所が多くあり、ふるまいは立派で気前がよい。率直豪快であり、平和で敵の心配が不要な時は約束をよく守る。
正義を売買することは、神の書に言うところの賄賂である。※神の書 (libros de Dios) とは、『旧約聖書』箴言 (17.23) 出エジプト記 (23.8) などを指すだろう。	169 上帝の律法言うところの官員買収行為の名である。×
300 しかし、マキャベリはトルコで (約束を守る必要はないという) 教えを広めたわけではなく、約束を守らないのはトルコ人やモーロ人だけではないので、逆に誓約を破った者をモーロ人ないしトルコ人と呼ぶこともできよう。以上がタルタル人が信じていることと、信じるのをやめたこと (約束を守らないことを指す) である。	誓言と許諾を破るのは、トルコ人や韃靼人だけではない。さもないと、偽誓し、ウソをつく者をすべてトルコ人、野蛮人、純粋な異教徒と見なすべきなのである。これが韃靼人の宗教信仰について得られた最良の情報である。
南辺はほとんどチナと接している。	170 一定程度中国大陆に包囲されている。××
302 なし	次のような格言を実証している。△
304 辮髪 (が中国人に与えた苦痛) のように、これは王国全体にとっての苦痛であったが、どんな苦痛も長続きしない。	171 しかし、これは中国人の辮髪同様に、国家の安寧にとって重要で、韃靼人はこの不満はすぐに消えろと考えた。
なし	彼らは、彼 (順治) が自分たちを奴隷扱いしていないと思った。
(北京と南京は) それぞれ省全体に対抗しうる。	随時、管轄下の省を防衛できる。×
(順治がいったんタルタリアに引き上げたとして) 彼が長城を通して戻ってくるのに対し、抵抗できない。	172 順治が軍隊を率いて征討する時、中国人は十分な兵を集めて抵抗することができない。
305 (タルタリアの) 首都の名はこちらに届いた報告にも、情報にも言及されていない。	関係する情報には、この都への言及がない。
北京から来た人	北京で順治に会った人
306 納税の義務はなかった。	中国人は納税の義務を認めなかった。
1643 年末	1643 年
多くの都市では税が2、3倍徴収されていた。	中国の大半の省や都市の損害累計は税額を数倍以上回っていた。×
307 順治は「重税は抵抗した彼らに責任があるか、あるいは兵の横暴によるものである……」と言った。	173 韃靼人は「中国人が軽率にも反乱を起こしたことが兵の横暴を招いたので、これは自業自得だ」と言った。
兵が犯した盗み	各地の盗賊×

そこまでやれるのは、14歳の野蛮で偶像教徒の王に似つかわしくないが、彼は実際にそれをやったのけたのである。	わずか14歳の君主は偶像崇拝者で野蛮人だから、真の理智や統治の公平さに欠けるところがあっっておかしいのだが、強い態度に出て偉業を達成した。××
308 過去3年の税 チナには多くの引退した官僚がいる。	納入すべき数年の税 中国のマンドリンは非常に多い。
309 なし	彼は彼らの官職を解いた。
310 (タルタル人の女性) 自らの貞節さで身を守る。	174 なし
311 なし	176 彼ら(官員)を貪官賊吏と見なさずに逆に賞賛し、彼らに統治の資格ありと率直に認めた。××
なし	彼(順治)の朝内の大臣の忠誠を証明している。
312 官僚は役所へ向かう路上、常に行列を引き連れているが、これに対して悪態をつくと逮捕される。	マンドリンの巡行につねに一隊の儀仗兵が随行するさまは、あたかも国の一大事であるかのごとくである。
314 チナのほとんどを占めるのは人民で、反乱が起るとすれば彼らの間からである。	177 中国では一握りの人間が謀反をするが、ふつうの人民は造反など考えもしない。△
このことは官僚(並みの官僚であっても)が、自らの面前で犯人(いかに軽微な罪でも)を旧来いかにあつかってきたかを知らなければ分からないだろう。ここで一例を見てみよう。	中国人が王朝交代の被害者であったかどうかは、疑ってみる価値がある。この点を明らかにするために、従前の中国のマンドリンが不幸にも収監された罪の軽微な犯人をどのように裁いていたかを見る必要がある。×
なし	中国から伝わった報告によれば
6頭立ての馬車が狭い道を曲がるのが難しいのと同じくらい、目を一方から他方へ考えられないほど大きく動かす。	彼の目はいつもぐるぐる動く。
315 なし	あわれな犯人をもったいぶった厳酷さで眺めてから、にらみつけ、まるで死刑を宣告するかのごとくである。
蚊が彼(官人)の血を吸ったとしても	178 なし
316 静修している修練者も及ばないほど(跪き、叩頭する)	なし
なし	(罪人の声は)訴えるがごとく泣くがごとく△
敬礼のためにしか手は動かない。	両手を、ずっとくっついていてかのようにピタリと合わせ、時に無理やり離させられる。△
哀れな罪人は風邪で咳をしたり唾でも吐こうものなら、それが心ならずのものであっても、罪とみなされて罰金を払わされる。	もし彼が唾を吐き、咳をするだけで重罪となり、厳罰を受ける。××
317 病人なら、50や60叩かれただけでも、あの世行きである。	なし
(執行人は)容赦なく	マンドリンの面前で彼の尊厳を気にもかけずに
蚊の羽をむしるがラクダはのみ込むような人(ものが見えていない人)は気づいてしかるべきことに、いつも知らぬ顔である。※蚊とラクダの比喩はマタイ福音書23.24から	彼はまっとうな人間を装うが、普通の人同様に、小さいことを気にする余り大きなことを見逃す。××
318 結局、帝国を失うも安定させるのも大臣次第なのである。	179 国家と民族の存亡はすべて最高統治者の諸施策にかかっている。△
319 (チナの行政官を)喜ばせるために、彼らを法に順応させた。	人民はこの点について新しい主君に感謝し、新しい法律を甘受した。△
書記	訟師××
320 なし	彼らには次のような名言がある。
321 (執行政吏は死体の)肉片を持ち帰る。	180 腿を持ち帰る。
罪人が死体になるのはタルタル人の間では幸運とされる。なぜなら、生きたまま墓に入れられることがあるからである。	鞭撻人も罪人の死体を尊重して墓を作ってやるといふようなことは考えない。××
(順治の)裁判の方針はこうである「調査を速くしなければその罪は裁判官が償わねばならない。」なぜなら順治にとって、そういう場合は裁判官に罪があると考えられたからである。	しかし、被告の有罪が確かなのに、その罪状を公にせず刑も定めずに被告を救おうとする法官は同等の罪とされて処罰される。順治が「過失は法官にある」と述べたからである。××
322 罪が立証されればいやおうなく即刻処罰される。	過失が立証されれば、たとえ困難があろうと、被告は即刻懲罰を受ける。△

逆に遅鈍なこともまた別の悪である。中庸に従うのがもっとも幸福であり、中庸にこそ徳が存在する。	私の考えではこの民族の多くは粗野とは言えない。韃靼人のように急いで案件を処理したり、他の場所のようにひきのばしたりもしない国があれば幸運である。しかし、人間はいつもそのようにできるわけではない。××
にもかかわらず「マンダリンとは名ばかりである」と言われている。これはもっともなことで、今やいままでより名が重みをもつようになった。政体にとって名声を多く有する大臣がいることほど重要なことはない。	181 この人たち（中国人官僚）はマンダリンの名と肩書があるばかりだと不平をかこった。今や以前より名声の獲得には努力しなくてはならなくなったのだと彼らが考えていたのなら、その不平にも一理ある。君主が任用する官吏は才能と功績が重要で、それらがあつてこそ人々から尊重されるのである。
323 同じ給料で仕事をする人はいくらでもいる。	皇帝はこれらの官僚がいい給料をもらいながら不満を抱くことを望まなかった。×
324 こちら（西洋）で生きている我々は彼ら（官僚）を憎んでいるし、チナが滅亡する以前から嫌ってきた。だから、これら官僚のことになると私の筆は走るのである。	中国が滅亡する前から彼らは隣国に憎まれてきた。関連の書籍・著作においてマンダリンに対する憤りがまじった風刺の見られぬものはない。
皇帝の1年の収入 1500万ドゥカート	3000万ポンド△
あるみすばらしい叛徒から20人の官僚が逃げ出したが、少し前までは1人の官僚が20人の将官を踏みつけにしていた。	昔は1人のマンダリンが軍隊の大將を蔑視嘲笑していたが、逆に今ではマンダリンが小兵を見て逃走し、身を隠す。
326（李成棟は）タルタリアの辺境のチナ人ではないかと疑われている。	182 皆が彼を中国人と考えている。××
（広東総督の）役所では大カトー（のような清廉な官僚）であつた。	しかし、後に高官となると清廉な法官になった。××
328 訴訟で1000ドゥカート勝ち取るために、哀れな当事者は2～3000ドゥカートを使わねばならなかった。	183 訴えを起こすのに300ポンドを必要とし、当事者双方は600ポンドまたは1000ポンドを支出せねばならなかった。×
329 武は文より敵が多い。	184 後者（文学芸術）は武装と士兵の保護を必要とする。
なし	我々は学術で国土を守る必要のない国の実例をいくつか見てきた。
スペイン人は本の出版が少なかった時に5000回戦ってきた。征服はともかくとして、王朝を創り、さらに拡張していく上では本が不足することはなかった。	当時スペイン人は5000回戦ったが、本を書こうとは思ひもしなかった。近年の遠征を見ても本をまったく使っていないことは容易に分かる。
330 タルタル人曰く「武器がなければ身を守ることはできない。」	「国家は武力に頼らねば生き残れないが、本に頼る必要はない。」
なし	ある国が戦争の準備をしているとの噂が流れただけで、他国が武装する。
Bachilleres（生員を指す）の数はどこでも多い。	185 欧州にはこれほど多くの博士と学士はいない。×
331 学位制度（科挙）	学習方式と書斎臭××
（かつては）人々は学問に励み、他人の敬意を得ようとした。	今では学生は尊重と報酬を受け取るだけである。
なし	どの国の人でも最大の名声と利点が得られる仕事を望むものである。
私は学問を職業とする人間であり、死ぬまでそうである。	自分のライフスタイルによりかかり、本を偏愛していると自称する人は筆墨を弄することしか知らない。××
332 戦場で死んだ100人の兵士のうち99人は十分に報われることがない。	ふつう報酬を得られないまま、最後は戦場で死ぬ。
（兵士が）褒賞を得ようとするより前に送った。	彼らが思ってもみない礼品と褒賞を送った。
北京と広東の距離 500レグア	1000里
333 大臣に褒賞を決めさせるだけでなく、速く離れた将官のもとへそれを持っていかせる。	186 大臣を派遣して、皇帝が彼らの忠貞と勇氣に満足していると伝えさせる。
広東省の文の副王	広東の大法官すなわち民政総督△
334（修養甲と）彼の下僚との間に起きた出来事	彼がこのテーマについて友人とかわした対話
335 審理の海原では勤勉と好き意図が必要で、これほど深い真実と正義は存在しない。	我々の面前には隠れもない事実があり、訴訟の渦や底のない洞窟の中に永遠に発見不可能な証拠を探する必要はない。

兵士や将官は（文の偏重の弊害を）はつきり口に したが、王が改革を導入したすばやさには及ばな かった。	（順治は）軍士と将官が無用の職業を公然と嘲笑、 軽視するのを満足げに見ていた。これほどかの君 主の選択を推進したものはない。
336 書房には清風が通る。 タルタル人将官には、この場所が自分のために詠 えられた場所のように思えた。	187 書房とは風が通る場所を意味する。× 彼は自分の住居より便利に感じた。
私の為にこの場所を空け、このガラクタを取り除 いてください。	速やかにここを空けて、人が本を見にくるのをや めさせ、本をすべて運び出してください。××
ある人に（書斎を）与えても、彼はそれのある町 で喧伝するに止まるだろうが、この将官はこの官 僚の書物を全チナに喧伝することとなった。	もし、彼が本をインテリアとすることで実際には 使わず、大図書館の虚名を得ていたとするなら、 彼に（書斎明け渡しを）怨む理由はない。のちに 韃靼人は彼がマンダリンに本を搬出させたこと中国 で得意げにふれて回った。
337 なし	信仰の根拠を理解しようとしたが、深く研究しよ うとは考えなかった。
（タルタル文字を）アジアの全国民、さらにはフィ リピンに我々のインディオたちも賞賛した。イン ディオたちはアジア人に似たところがあるからで ある。 ※ここでいうインディオはアメリカから連れてき た者を言うのであろう。	アジア民族が使う文字、さらには印度群島とフィ リピンに住む欧州人が使う文字よりも認知され た。これらの欧人は当地の民族の風俗を学び、こ の奇妙な文字を使い、ついには本国の文字が読め なくなり、当て推量をするようになるのである。
338 文字の上と下は点で囲まれている。 文字というよりヒエログリフといった方がよい。 重々しい響きがある。	文字は上から下へ書く。× 188 符号と象形に似て、字体をなしていない。 低い音調を含む。×
339 (Peli の) 発音は粗雑ではなく、スペイン語やイ タリア語風である。 (Pelipaovan の名は) 私にも最初は、我々なら Principe, Principe, Principe と 3 回繰り返すよう なものに思われた。ヨーロッパの 3 つの違う言語で それぞれ言い換えたとしてもである。	イタリア語、スペイン語の柔らかさ、滑らかさに くらべるとすこし粗雑である。 たとえ 3 種の違う言葉で表現したとしても、意味 は変わらない。
しかし、チナでもタルタリアでもそうではない（同 じ意味の言葉を重ねることで新たな意味を生み出す）	しかし、中文でも韃靼語でも、この重複には強調 の意味がある。△
340 Kium (君) Kiumban (君王)	Chium Chiumvan ※英訳は Chiumval
341 タルタリアではヨーロッパと比べて	189 韃靼王は他の君主とちがって××
342 なし	190 (チナの刀は) 古いが錆びている。△
343 兵士への褒美の銀 4 レアル	191 4 ジュリオ
344 彼ら（チナ人）は安楽とは手を切らざるをえなく なったが、それは当然である。かつて敵から身 を守る努力を怠ったために、今は敵に仕えることで 苦勞しているのである。	これらの怠け者はこうした苦しみを蒙るのを望ん でいないが、敵から武芸を学んだことで韃靼人は 彼らを兵役に服させることができた。彼らが国や 自己を守ってこなかったためにこうなってしまっ たのである。
345 なし	192 スイス刀のように
346 lança (槍) は pica (槍) ほどの長さではなく、 短槍、矛槍 (alarbarda)、chuco (槍の一種) であ る。pica は後に見るように戦には使わない。 矢は猛烈な勢いで放たれるので、最も弱い力で引 いたとしても巨人を射抜くであろう。	刀には刺がなく、彼らの戦いからしてこれは不便 だろう。彼らの矛は非常に短く、我々が槍戦を使 うように使う。××
347 このこと（チナ人に武器を委ねる）と、おじたち への実権委任については順治にいくらかの責任が ある。しかし、おじたちへの信頼によってその忠 誠が確保されるのであり、チナ人への信頼によっ て彼らとタルタル人の勇戦が確保されるのである。	これによって、順治のやり方は親王に大権を与え るのと同じだということがわかるだろう。しかし、 この君主は王叔を信頼すればするほど彼らの忠誠 が保証されることを信じている。彼は恐れるもの がなく、チナ人を軽視していることを示すために、 彼の勇氣と韃靼人の士気をチナ人に恐れさせよう とした。
348 (タルタリアの馬は) その美しさ、体格のよさに おいてヨーロッパ、アラブにひけをとらず、獐猛 さにおいては世界に類をみない。 チナ人にはタルタリア馬を押しとどめる槍の列 （密集部隊）がない。	193 体型と強健さにおいて、ヨーロッパ、アラブさら には全世界の馬に劣らず、その気概は言葉では形 容できず、人に忘れがたい印象を与える。× 中国人には騎兵を阻む防御の長矛がない。×
タルタルの軍は少なくとも馬 5 万頭は連れているの で、順治の軍なら間違いなく 10 万を超えるだろう。	皇帝が自ら指揮する 10 万の軍隊中、5 万の騎兵 が△

タルタル軍で最良なのは騎兵であり、最も尊重されている。ヨーロッパではふつうその逆である。	欧州の軍隊は韃靼人の主力が騎兵であるのとは違い、歩兵は比べることができない。
350 (死を軽んじ、) 花畑を行くがごとくリラックスしている。	194 まるで馬上で榮譽と成功を取められるかのごとくである。
なし	彼らが中国と戦っている4年間で
通常、1軍の兵数は20万で、騎兵が5万、歩兵が15万	1軍はふつう騎兵5万を含み、残りが歩兵である。×
351 この報告にはタルタル人の軍旗について何度か言及されているが、それを知らないわけでも忘れたわけでもなく、ヨーロッパの言い方を使えば軍隊の重複を避けるためのものである。	韃靼人の旗幟について言えば、ヨーロッパの士兵の習慣による限り、軍隊の人数を通報し、重複を避けるためのものである。
352 教区の標旗	195 ローマ教会の人たちが使うようなもの△
353 敵の都市を包囲した際、その攻撃法は珍しいものである。	韃靼人の都市攻囲のやり方は野戦のそれよりさらに珍しい。
354 (はしごは) それが一本の棒にすぎなくても、タルタル人はよじのぼれる。普通のもののように棒2本でできている時でさえ、1本ずつ使う	196 はしごは1枚の木板に釘を打ちつけたものに過ぎないが、タルタル人は我々が普通使うもののように巧みに登る。
355 この時には、城壁を守る側の条件は攻撃側より悪くなっている。	守備側は攻撃側とほぼおなじくらい大きな危険にさらされている。
タルタル人はその間に梯子に蟻の様にとりつき、絶え間なく城壁を登り、城内に入り込む。	一部の人が城壁に登る。
357 全軍共通の輜重はない。	197 全軍の輜重はいっしょに行進しない。△
安楽でない生活をしてきた人間には安楽が苦痛なのである。	人生の驕奢や淫逸は最後には人をうんざりさせ、それを長く享受してきた者の負担になる。△
358 なし	巡邏しても、人を起こしはしない。
征服事業の厳しい試練の中でも	激烈な戦闘中であっても△
359 (チナ人は敵が遠くにいる時は) 声をあげるのに、近づくとき口を開かず、ましてや軍旗を広げることもない。それでいながら小心翼翼として警戒だけは怠らない。	198 中国人はまだ人が見えないのに叫ぶが、敵が近づくとき「戦いだ、戦いだ」と叫ぶ者は少なく、敵を迎撃したり、各省への敵の侵入を阻止したりすることがない。要するに彼らは守りを好むが、それでも不安なのである。
なし	敵が彼らの勇武を恐れて攻めてこないことは分かっている。
名声が得たければ、よく眠れ。	声望の高い人はベッドで横たわっていられる。
360 チナを征服したタルタル人は、一般に太っていて体が大きく、頑丈である。	199 中国を征服した韃靼人は普通の人と変わらず、体形はよい。肩幅は少し広すぎるが、四肢のつりあいは取れている。××
髪は余り無い。	なし
ホラティウス※引用は <i>Odes</i> 3.6 より	ある詩人
タルタル人の顔はチナ人ほど白くはない。	顔色は中国人の美しさには及ばない。×
(顔が) 褐色の者が多い。	黒、黄褐色の者がいる。
361 チナ人よりあごひげが濃い。	あごひげが濃い。
なし	(少なくともその国では)
(タルタル人は) 勇敢である。	彼らの態度や外観はまったく勇ましくなく、勇気や果断を示そうともしない。△
(労苦は) 人間が生きていく上で必要であり、生存には疲れて消耗することが必要なのである。	200 人の生活には労働や機敏さ、その他もろもろが必要であり、我々はある一面を強調し、それを他の面で補うことが必要である。××
362 (タルタル人は) 実際ここまで極端でないとしても、冷静な時と怒っている時の見分けがつかないような人たちは違う。	人は内心の矛盾をさらけ出さず、表面をとりつろって他人に喜怒を分かせないようなことがあっても、いつも同じ態度を保っているわけではない。
(彼らの間では) 裏切り者であることに比べれば、残酷であることのほうがましであると言われている。	彼らは心の中で怨んでいる相手に迎合したり、彼を恐れたりしない。
人間関係を壊す人	人類社会の敵△
疑いなく、サテュルス王とその時代はヨーロッパからタルタリアに移ったのである。	もし彼らが神話伝説を知っていたら、農神の時代と黄金の歳月は欧州から韃靼に移ったと言うことができるだろう。
上手な騎手であることを大変自慢する。	彼らの自慢は良馬を持っていることである。

騎馬については大いに見栄を張り、驚くべき技を見せる。	馬の世話は至れり尽くせりである。
363 なし	201 あるいは謙遜を示すのに
左手を左膝の上に置き、手で少し膝を持ち上げ、同時に手のひらに接吻するかのように頭を下げる。	刀の柄を右膝に置き、少し体を起こして、まるで右手に接吻するかのようにする。
364 チナ人の男はどんな時でもスペインの婦人の流儀で扇を使う。	中国の男がいつも扇を手放さないのは、他国の婦女のようである。
風を送るものというより、熱で化粧がはげないようにするものである。	涼を取り、空気に顔をさらすのを防ぎ、化粧落ちないようにするものである。×
365 日が照りつけ、「風を閉じ込めたユリシーズ」のように風が風いでも ※オデュッセウスが風の王から風を閉じ込める皮袋をもらった話を指す	暑くても、窒息しそうになっても
音楽の調は甘美ではなく、音がよく響く。音楽を大いに好むことがないのは、快楽や怠惰一切を嫌うからである。	音楽は聴きやすくなく、ただ軍歌と高らかな曲調を好み、靡靡たる音を喜ばない。こうした音は空虚で、聞くにたえないと思っているからである。
366 トランペットやクラリン（ラッパ）	202 ラッパと太鼓△
なし	小馬の肉を美味とし、宴席ではつねに食べようとする。△
謝肉祭の火曜日と灰の水曜日を区別しない。（魚を食べる時期を気にせずに気の向いた時に食べる）	肥瘦は問わず
偶有よりも本質を重んじるのは、的確で有用な哲学である。	彼らは中身のつまった上級の肉を好み、もしよい肉でなければ食べずにすませる。
（小麦パンを）米より好んで食べる。	肉とともに食べようとするが、そういう時は米を食べない。××
367 茶は普通に飲み、贈り物や求愛に使う点はチョコレートと同じである。ピノレ（Pinole）風に冷たくして飲むこともある。※ピノレはメキシコの飲み物で、とうもろこしから作られる。	茶は儀礼に全国の人を招くためのもので、他の民族の習慣に従い熱いものを飲む。彼らはまた熱いチョコレートを飲む。冷たいものもあるにはあるが。※注でチョコレートを「疑うらくは馬乳か」とするが、無用である。
（彼らは）自分が独り占めしたいがために信者に飲酒を禁じたマホメットを許すであろう。飲酒は彼らにとってマホメットの第七地獄がタルタリアに出現しないための大きな予防なのである。彼らの隣人に多くのムスリムがいるにはいるが。 ※『神曲』ではマホメットは第八圏にいる	彼らはマホメットが酒を厳禁したのを信じられずにいる。しかし、このベチン師が酒を禁じたとするなら、それは本人が酒好きでねたみから人に飲ませないのだと思うだろう。あるいは彼らにとって酒は隣国から来る有害な思想を防ぐ手段といえるかも知れない。××
労働者にとって酒を水で割って地獄に行くことは二重の苦痛である。水を通らずに、火を通るので十分である。	彼らは水だけしか飲んではならないということを彼らの宗教の原則と認める理由はないと考えている。
368 （タルタリア人は）「乾杯は分別を保つどころか、それを壊すものである」と機知に富んだことを言う。	203 フランスの格言に「（乾杯は）他人の健康を気遣ってするもの」とあるが、これに対して彼らは「気遣うのではなく、考えない（から乾杯するのである）」と言う。△
たとえ百杯乾杯して、頭が壊れそうになっても	なし
369 彼らの食器で変わっているのは、すべてに足がついていることである。	酒器△
370 食べるのににはスプーンを使い、チナ人の箸にはイライラしている。	彼らが食べるのにスプーンを使うのは、中国人の箸をどう使うか分からないからである。
箸で食べられるようになるには、その練習に多くの時間を費やすのでなければ、人は Juanelo（が作った自動人形）でなければならない。 ※カール5世、フェリペ2世に仕えた時計職人で、自動人形を製作した Gianello Torriano のことを指すと思われる。	彼らは生まれ変われば、中国人のように自由に箸を使えるようになるだろう。長時間の練習を経て漸く自在に使えるようになるのである。
タルタリアに豊富にある物と全世界で最もチナに豊かにある貴重な商品とを交換する。	当地ではありふれているが外地では貴重とされる商品を交換することが、中国を世界で最も豊かな国にしたのである。
371 （役畜は）馬とロバであり、タルタリアやその他の土地に多く産する。	204 馬がそれに類した動物であり、ふつう輸送に用い、全国に非常に多くいる。

372 タルタル人の間では、庶民以外は皆絹を全身あるいは一部にまわっている。	205 もっとも貧賤な民以外は絹を着る。
庶民は亜麻、毛織、綿織物を身にまとう。	毛織、綿織物、或いは亜麻を着る者もある。
ムスリムの真似をするのに、酒を止めるよりこちらのほうが簡単である。	回教徒は服装の様式を守りたがるが、禁酒令を守るのは好まない。×
靴下の上にブーツを履くが、膝まで達しないので半長靴と呼ぶべきだろう。半長靴がびったりしたものである時はその上に短靴を履き、短靴がない時は半長靴をブーツのように履く。	彼らは小さな靴を履き、高さは膝に及ばずふくらはぎまでである。短靴に底がない時は靴といっしょに履き、底があれば靴は履かない。
短いシャツと、たっぷりした帯で締めるズボンを着用する。	シャツは短く、ズボン下でもって腰のところで締める。
薄手のサテンあるいは厚手のタフタの絹	緞子と余り変らない絹あるいは厚手のタフタ
373 上着は膝下1パルモ以上の長さで、びったりとしており、縁は少しだけかあるいは全く無いか、上から下まで綿や絹の詰め物が入っている。	上着は膝下までで、体に十分びたりしているが、watすなわち綿で上から下まで縁取られている。××
袖は拳のあたりで広くなり、これを手首の上に折り返す。	袖を腕までまくって翻すと
(上着のボタンは) 両側は腰まで、正面は上から下までついている。	衣服の両側から腰の辺りまで、上から下までボタンがついている。×
正面のボタンは上から下までまっすぐにはついておらず、曲がっている。上着の前の部分は開いているが、腰のところで合わせずに、左側を1パルモ分折って右に重ねるか、上にくる左側の端から曲線状にボタンをつけるからである。曲がっているが、優美でもある。	206 ボタンは前ではなく横につける。衣服の左を折って右に重ねるので、ボタンは斜線上に固定され、衣服はさらに腰にびったりすることになり、これは優雅な眺めである。××
375 タルタリアの北は今チナにいるタルタル人の大半の故郷である。かくして彼らの服は夏より冬のものの方が多い。	住民は一年を通じて中国の夏服でなく、冬服を着ることができる。××
(上着に) 襟がない。折った襟も立った襟もなく、襟ぐりが大きく開いている。品質のよしあしにかかわらず、死刑囚のチュニックのようである。	襟はなく、あったとしても長くはなくて襟の形を呈していない。上から下まで同じ方法で縫合されていて、罪人の処刑時に着るものに似る。××
376 スペイン人は服装のことで誰を笑うこともできない。なぜなら、このことで世界中の人が我々を笑うからであり、我々が服を次々に変えるのが笑われるのは道理のあることなのである。タルタル人は我々が彼らの奇妙な帽子のスタイルを盗用するのではないかと気が気でないだろう。我々はこれまで馬鹿にしてきた他国のスタイルを盗用してきたのだから。	207 韃靼人の帽子を笑う人がいるとすれば、その人には考えてほしい。全世界が彼の服装を嘲笑し、彼の国が時々スタイルを変え、最後には彼自身がおかしいと感じ始めた別国のスタイルに倣うさまが嘲笑されたら、どういう気持ちになるかを。結局、彼が最もきらっている韃靼人の帽子をいつか受け入れることになるかも知れないのである。××
377 基部は防具のように見える。	中身のつまった材料でつくられているようである。
頭の周囲には縁飾りがある。	四周のへりは分厚い。
この縁飾りの上に飾り房があり、弱いあるいは燃った絹でできていて、色はお好みである。	このへりの上に一層の糸がかぶっていて、ふつうは淡い色をしていて、持ち主の好み次第である。××
これらの房飾りは我々の大学の修士、博士の帽子のものに似ていると言われている。また、無学無知の人間がつけるものだという説もあるが、つけないのはなおさら悪いと言われている。	頂部の大きさはスペインの僧侶帽と同じだが、韃靼人のものはすべて包密である。
378 8分の1リアル大の場所	1クラウン大の空洞※仏訳1エキュ
この標識を乱用してはならないことは、我々の法官の徽章の場合と同じである。	この標記によって、他国でおきるような官僚の地位争いを防ぐことができる。
379 人夫でさえも	208 普通の商人でも××
380 なし	帽子のつばの垂れ下がりが具合は雨どいから垂れ下がる排水用の鉛片のようである。××
(絹の房より) 評価が低いのが金色で、とうもろこしの花に似る草で作ったものである。	金持ちや物好きは黄金色の草木で、とうもろこしや印度麦に似たものを使う。
この草は丈夫で帽子の周りにまきつけると、指1本分の厚さになる。	この植物の茎はほぼ指のようで、長くて柔らかく、帽子の周りに数周まきつけることができる。
381 この草は乾いていれば要するに藁にすぎないのだが、それがおしゃれや虚飾の道具となるのである。	この植物の茎は金持ちや身分の高い人には華麗な装飾とみなされている。

薬で見栄を張るくらいなら薬を食べたほうがましである。どちらにしてもむなしなことだが。	大人物が糟糠と稲を自慢する虚栄心はいかばかりのものだろうか。××
382 女性の服装についてはすぐ後で述べる。	209 婦女は比較的好い待遇を受けている。
なし	彼ら本人の品德や民族の榮譽が認められている。
383 タルタル人は女性に対して非常に節度をもってふるまい、丁寧に扱う。	韃靼人の婦女尊重は中国人の希望に沿っている。
スペインで宮廷人が身分ある女性と話す時に 'mi Señora' と呼ぶようには	なし
384 男に比べて帽子を飾りとして用いることは少ないが、中にはお洒落としてかぶっている人もいる。	精美な飾りが無いのは、そうしている方が上流であるように見えると女性が考えているからである。
384 自然は自らの仕事が完璧であり、女性を完璧に仕上げるのに努めているのに、彼女たちがその完璧さを人工に帰しているのに腹を立てるのも、もっともなことである。	大自然が怨むのには理由がある。天賦に恵まれた絶世の美女でも時々化粧に頼り、まるで人を迷わせる優雅さが化粧のおかげであることを認めているかのごとくだからである。×
なし	210 しかし、韃靼の女性はこうした化粧はしない。
ヨーロッパの女性のように髪を伸ばし	髪を伸ばし×
フープスカートがない。	なし
385 靴下の上にブーツまたは半長靴を履き、気が向いたり、必要な時には拍車 (espuela) をつける。	半長靴を履き、狩りや旅行に出る時にはブーツと拍車を履く。
なし	馬の御し方は自然で、女性たちが使うのにこれ以上適した道具はない。××
応接室	女同士で集まったり、伴侶と出会う場所
ティルス の処女	古代 Tyrrian の Nymphs ※英訳は Tyrrhian
チナの女性はかごの中にいて、甘やかされてきたから、これほど男らしい女性を見て驚き、男同様に恐れた。	一生牢獄の中に閉じ込められた中国の女性はこれに対し非常に驚いた。タルタルの女性たちが男か女か区別できなかったからである。そしてたとえ彼女たちを男同様に扱っていたとしても、その一方で崇拜していた。
戦は通常の仕事ではないが、必要とあらば戦場で勇敢に戦う。	騎射が韃靼女性の唯一の任務と考える必要はない。彼女たちが騎射を習うのは、必要とあらば戦う能力と勇気を持つことを示そうとするために過ぎない。
全ての女性が多かれ少なかれ乗馬を知っている点ではスペインの男より上である。	他国の男は彼女たちほど乗馬を知らない。
386 宗教・道徳に関することを除けば、習慣ということとで説明がつく。宗教・道徳に関する事柄については、一つの習慣ではなく、習慣全体についての評価があつてしかるべきだが、純粋に社会的な事柄については、人々の見方によって当然賛否が分かれる。人々は見た目同様、好みもまちまちであり、服の評価も気まぐれや虚栄で決まる。	しかし、風俗習慣ということで、この種のこととは理解できる。宗教信仰に反しない限りにおいてのことだが。あるいは少なくとも我々は彼らの習俗によってその作法の是非を判断しない。民族や国家の他者に対する礼節に見られる習慣は他者にその文明度を評価させるしかないから、輿論の評定に待ちたい。××
この男らしい演習	211 他国の女性に見られないこの種の演習△
388 使徒王の子孫の使徒王	使徒王公の尊号××

『チナ征服史』と「報告」の対照表

チナ征服史	報告
1章 崇禎の統治、名前の語義 李・張の出現 大臣による言路遮断 張の動向 李と張の関係 李の西安での即位 李・張の出自 反乱という行為について タルタル人の侵入とその大義名分 李の北京攻め 李の「サイは投げられた演説」 廷臣・宮臣への非難	× 1r × 1r × 1r × × 2v 1r 演説はない ×
2章 崇禎が自殺においやられた過程 太子について 1640年刊行の書物に言及 皇女の殺害 皇后の自殺 詳細 崇禎の血書の遺言 自殺 崇禎の年齢、治世の年数 刊行された書物に言及 滅亡の兆し 李の即位と忠臣の自殺 高官の多数が死んだとする 他の官僚の財産徴収 タルタル人の反応 呉三桂 三桂批判 侵入の名分に対する評価	× × 『チナ征服史』は「最近の報告には言及なし」とする。 1r 1v ごく簡単 1v 1v × × 1v 多数は李に従ったとする 1v 2v 1v × ×
3章 順治帝 3人のおじ 最長者が皇帝を補佐 李の敗走と北京での暴虐 順治即位、「黄金の国」 李の末路不明 「北京から来た人」の情報でも不明 李批判 コレア侵入	3r 3r 1v 1v × 「北京から来た信者」の情報は 35v-37v × 3r
4章 北の5省征服 征服の迅速さ アレクサンドロスらに並ぶ偉業 大河の奇跡的渡渉 チナ人、敗北を天意に帰す タルタリアと境を接する地域のチナ兵の起用 旧朝の官僚の処置 武官の上司にはタルタル人を置く 辮髪	3r × × 19r 19r 7v 13v × 14r
5章 南京の弘光帝 順治、弘光の正統性を認めず 南京攻撃 弘光の死 マンダリン「猿」 南方諸省の帰順	2r × 2r × 3r 3v

6章 福建の唐王と一官 一官の履歴 詳細	2r 2r	マカオで受洗し、海賊になるとともに棄教したと記すのみ
7章 一官の履歴（つづき） 南京副王の一官への書簡	×	25v-26r
8章 日本乞師 マンダリンを副王に Pelipaovan に南方経略を委ねる Pelipaovan について 福建侵攻 唐王の在位を6ヶ月とする 唐王の消息 一官、北京へ 一官と南京のマンダリンの文通をめぐる事件 一官のその後 死亡説を有力とする。	39r-v 3r 3r 3v 2r 2v,39v 2r 26r 26v	福州は数ヵ月後に陥落した、とする。 清朝による地位保全にもかかわらず死が待ち受けていることを予測する。
9章 広東の両副王 李成棟と李自成の姓の一致 軍の粗暴と中央との距離 王（紹武）の即位 広州城 20騎による侵入 富豪が貧乏人に身をやつす 貧乏人がそれを暴露して復讐 44日の天下 王の言葉 妃の自殺 皇帝の逃亡 援軍の到来と放火 順治の掠奪禁止令 総督の布告	4r ×	姓の一致の指摘なし
10章 3日続いた掠奪 マンダリンに対する掠奪は軽い 貧者の密告 貧者には誅求 「籠の鳥」であるチナの女性 タルタル人は女性の拉致を「解放」と強弁 1000人以上を拉致 人民の訴えを受けて新たな告示 掠奪に対する両副王の態度の違い しかし、2人とも黙認 死者15000以上 兵に城外に出よう命令 チナ人の恭順 チナ人を奴隷扱い 「順民」の証しとなる紙 王（紹武）の逮捕、殺害 秩序の回復へ 肇慶・韶州・南雄・惠州の帰順	4v-5r 5r ×	5r ×
	5r ×	5v 5r 24v 5v 5v 5v 6r ×
	6r 6r 6r 5v 7r	惠州はなし。しかし、地名は別の処に出てくるので補うのは可能。

11 章 肇慶城 広西で即位した Sinhianuan 年令なし 桂王 (永暦) 桂王、肇慶入城 狼兵 李成棟、広西へ 桂王側の勝利 肇慶への凱旋 広東人と広西人の対立 桂王敗れて、広西に Sinhianuan との和解 広西で王族以外のものが2人擁立される すぐに王位を放棄 タルタル人、梧州占領 桂王、梧州回復との報道 信がおけないとする 両王の死 桂王生存の情報 少年皇帝の偉業	× 7r Sinkiamvan 20 才 × × 20r 19v 19v × 20r 20r 28v 20r 20r 20r 35r 41v 34r ×
12 章 全国概況 魯王と唐王 一官の子 ジャコトラでの修業 チナ人の軟弱 李の広西遠征の留守を狙って惠州で王を擁立 ある王族の投降 タルタリアに送られる	× 35r 唐王の記事とは独立 34v × × 28v 28v ×
13 章 マカオの説明 近時の戦乱における中立 日本との交易途絶 インディア諸島への影響 タルタル軍到来の報に接してのマカオ側の思惑 日本での殉教 (1640 年) 広東への使者派遣案	41r-v 41v-42r 40v × 22v 45r 22v
14 章 海南島 タルタル人による征服 4 人の海賊 交渉役の2人を殺害 李成棟は遼東人 軍の指揮をチナ人に委ねる理由 チナ人の傲岸、卑屈 タルタル人の温和 李の悪行 海賊の復讐	27r-v 27v 34v 19v 7v × 7v 16r 19v 19v
15 章 賊船を焼く 李、広東に凱旋 海賊の人民への横暴 居民に服装を改めさせる 海盜大敗の時期推定 (47 年 2 月末) Pelipaovan が李を広西から召還 李の留守中に佟養甲が奮闘 漳州人の奮戦 城門の開放 朝貢使節	19v 19v 19v 22v × × 20v 20v 20v 21r シャムと特定

16 章 黒人の活躍 信仰の威力 4 日後の再来襲に対して黒人の死者ゼロ 一官の艦隊の出現 佟と広西から戻った李がこれを迎える 李、順徳に出陣 李の政令違反罰せられず やり口からして李は真のタルタル人にあらず	21r × 21v 21v 21v 21v × × 7v で遼東出身としている。
17 章 李、南頭へ 賊の増大 広東の戸口調査 広東の窮境 李成棟批判 東莞攻防 李の思惑 援軍のヨーロッパ人 スペインにおける援軍の遅延 タルタル軍を撃退した賊側の嘲笑 タルタル軍の逆襲と賊の逃亡 周辺の集落の破壊 掠奪に満足する李とネロ	23r 23r 23v 23v × 23v-24r × 24r × × 24r 24r-v ×
18 章 佟養甲、サンビアシに愚痴 李の佟に対する優位 居民の被害 賊の首領捕まる 李、再び海へ チナ人と軍事 政府の軍事軽視 戦いがチナ人を強くする	24v × 24v 25r 25v × × 27r
19 章 47 年 8 月 4 日の海賊襲撃 佟養甲の対応 首謀者は閩老陳 内通の発覚 内通者 200 人の処刑 200 隻の来襲 首謀者の兄弟、いここに書簡を書かせる 佟養甲に対する批判	32r 32v 32v 32v 32v 33r 33r ×
20 章 賊船 1000 隻出現 タルタル人の服を着ていない者を処刑 李成棟の帰還 内通者の洗い出し チナ人批判 居民の沈黙 ある軍人の勇気 カトーとの比較 軍人と桂王の関係 桂王を賞賛	33r 33r 33v 33v × 33v 34r × 34r ×

21 章 賊の勢力増大 城内の防衛による喧騒 タルタル人の士気鼓舞の方法 李成棟の出撃 盗賊の戦いの無意味 チナ人再生の可能性	34r 34r-v × 34v 34v ×
22 章	×
23 章 チナ人の海外交易 マニラのチナ人 征服を聞いたチナ人の反応 海外チナ人への侮辱 スペイン人を含めた外国人の反応 コチンチナの自立 コチンチナ王の凶悪 来航チナ人に対する措置	38r × × × × 39v × 40v
24 章 日本王の外国恐怖症 ポルトガル王使節の到着 武器預かりの要求 結局受けいれたとする。 日本人の恐怖の無根拠 ガレオンの封鎖 長崎奉行の対応 スペインの日本征服の可能性 タルタル人の日本侵入の可能性 日本王によるチナ人の追放 辮髪チナ人の来航禁止 広東副王の反応 順治出征の可能性 カルタゴとローマに比す	× 47r 47v 拒否したとする。 × 48v 49r-v × × 38v 38v-39r 39r × ×
25 章 一切の宗教を受け入れる = 無宗教 天の崇拜 坊主への無関心 女性の信心深さ タルタル人の寺院・僧侶への態度 キリスト教への態度 女性が北京の教会を訪問 男性の禁欲 平時のホスピタリティ 戦場での残忍 ムスリム、マキャベリとの比較	12v 12v 12v 13r 12v 8r ~ 12v 13r 18v 18v 18v ×
26 章 4つのタルタリア 団結して征服に当たる⇔トルコの前に分裂する欧州 辮髪におけるタルタル人とチナ人の区別 タルタル人の移住政策 両都の降格 順治の人となり 3年分の免税 秩序の回復 以後、税を3分の1減免 郷紳の特権剥奪 寺院・僧侶の整理 宦官を軽視	37v × 14r 14r 28v-29r 36r 13r 7r 13r 13v × 13r

27 章 チナ人の官僚起用 旧時代の官僚の標章 帽子、帯、輿 タルタルの大人の外出 タルタル官人の民に対する親切 旧時代の裁判描写 タルタル人は街頭でも訴状受理 人民、新政を歓迎 官職 迅速な裁判 罪人の処理 順治の裁判に関する法令 新旧の裁判の欠陥 官僚への待遇 収賄の禁止 旧朝の官僚の腐敗は世界一 順治による改革 広東副王とある官人をめぐるエピソード 欧州との比較	13v 13r 13r 29v × 29v 29v } 広東でのこと 13r 13v, 30r 13v × × 13v 13v-14r × × 30r ×
28 章 文と武 南京での科挙実施 旧朝での文の優位 順治の武重視 47 年 8 月の広東への褒賞 広東副王とある文人のエピソード タルタル人将官と書斎人のエピソード タルタル人の天文学への関心とシャル登用 道徳・哲学への関心 文字 発音 スペイン語と同じくらいの母音数 Pelipaovan pao の意味についての類推あり	× 29r × 31r 29r 29r 14r-v 14v 14r-v 14r チナ語より音が少ない 3v 類推なし
29 章 戦好き チナ人の戦嫌い 少年も武器携行 教練と褒賞 鎧 弓、刀、槍 弓の連射 火器 騎兵	14v × 30v 30v 14v 14v-15r 14v 14v 15r
30 章 軍の構成 1 軍の騎兵 5 万 行軍の無秩序 攻囲戦の方法 宿営 チナ人の警戒心	7r 15r 15r-v 15v 15v

31 章	
ローマ兵に比すべき質実	16r 単に忍耐強いとする
容貌	16r
平時の温容	16r
裏表がない	×
馬好き	16r
作法に無頓着	16r
あいさつ	16r-v
扇	16v
チナ人女性との結婚	16v
音楽	16r
食べ物	16r
飲酒	16r
乾杯について	×
皿、酒盃	16r
スプーン	16r
交易	16v
役畜	16v
航海	16v
32 章	
絹を着用	16v
ブーツ	17r
シャツ	17r
上着	17r
腰帯	17r
上着の上の重ね着	17r
帽子の「奇妙さ」	×
冬用	17r-v
夏用	17v
チナ人男性への服装強制	18r
女性は従来と変わらず	18r
女性の保護	18r
広東の兵士の暴行	18r
タルタルの大人の女性への敬意	18r
女性の長髪	18r
服装はチナ女性と変わらず	18r
ブーツ	18v
馬好き	18v
民族の風習	×
結論部	×